2019 Annual report

一般財団法人京都地域医療学際研究所

Kyoto interdisciplinary institute of community medicine

2019年度　年報

一般財団法人　京都地域医療学際研究所

設 立 趣 意 書

（1981年11月）

20世紀後半における世界共通の重要な社会問題の一つは、老人問題であるといわれておりますが、わが国もその例外ではありません。

特に、わが国の老人人口の増加は、実に目覚ましく、西欧諸国に例をみない速さで高齢化社会へ移行しており、そのため、わが国は、来るべき高齢化社会への対応を短期間のうちに準備しなければならないという厳しい情勢に直面しています。

とりわけ、老人は、加齢に伴う心身の機能低下から疾患に罹患しやすく、慢性化する傾向にあるため、老人の健康を保持することは、老人福祉の向上を図る上で基礎になる重要な課題であります。そのためには、疾病の予防に力点を置きつつ、治療からリハビリテーションに至る一貫した対策が、老人の生活の場である地域における家族、老人クラブ、自治会、診療所、病院等のあらゆる力によって総合的に推進されることが望ましいことは言うまでもありません。

同時に、老人は、稼働能力の喪失や核家族化の進行に伴う扶養意識の減退といった社会情勢の変化の影響を受けており、老年期を迎えての様々な心理的特性についても、十分配慮した医療が必要となっています。

このような状況の中で、様々な医療機関や人々の手で老人に対する医療と介護が行われてきましたが、本格的な高齢化社会を目前に控え、社団法人京都府医師会は、老人に対する地域医療について、医学、経済学、社会学、心理学といった多くの境界領域の専門知識を結集し、新しい医療のあり方を研究し、その実現を進めていくことが必要であるとの認識の上に立って、ここに「財団法人京都地域医療学際研究所」を設立することに致しました。

本法人は、京都府・京都市をはじめ、地区医師会等関係団体並びに諸機関の協力・援助を得て、高齢化社会における地域医療のあるべき姿を究め、もって、住民の健康の増進と福祉の向上に寄与しようとするものであります。

目　　次

設立趣意書　1
目　　次　2
巻　頭　言　5

第1章　一般財団法人　京都地域医療学際研究所組織の概略

基本理念・基本方針 …… 8
法人中期vision …… 9
沿　　革 …… 10
事業所一覧 …… 11
理事・監事・評議員名簿 …… 12
組織体制図 …… 13
役職者名簿 …… 14
年度末職員数 …… 15
永年勤続表彰 …… 16

第2章　がくさい病院

病院理念・基本方針 …… 18
病院中期vision …… 18
2019年度の活動 …… 19
病院概要・施設基準 …… 20
医師体制 …… 21
診療統計 …… 22
整形外科部門 …… 25
スポーツ整形外科 …… 26
A病棟 …… 27
スポーツリハビリテーション科 …… 28
看護部外来・手術室 …… 29
回復期リハビリテーション部門 …… 30
B病棟 …… 31
リハビリテーション科 …… 32
看護部門 …… 34
医療技術部門 …… 35
薬剤科 …… 36
放射線科 …… 37
臨床検査科 …… 38
栄養科 …… 39
事務部門 …… 40
医事課 …… 41
地域医療連携係 …… 42
システム管理課 …… 43
総務課 …… 44

訪問リハビリテーション …… 45
訪問リハビリテーション統計 …… 46
医療安全管理部門・医療安全管理委員会 …… 47
院内感染防止対策委員会 …… 48
院内教育委員会 …… 49
栄養管理委員会 …… 50
褥瘡防止対策委員会 …… 51
診療録管理委員会 兼 システム委員会 …… 52
企画広報委員会 …… 53
衛生管理委員会 …… 55
倫理コンサルテーションチーム …… 57
病院機能評価委員会 …… 58
学会発表実績 …… 59
外部研修参加実績 …… 60
実習生受入状況 …… 67
京都府立医科大学 クリニカルクラークシップ …… 68
地域活動［がくさい健康塾］ …… 69
患者アンケート調査結果（入院） …… 70
患者アンケート調査結果（外来） …… 72
職員満足度調査 …… 75
京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター …… 76
新入職員について …… 80

第3章　介護老人保健施設「がくさい」

基本理念・基本方針 …… 82
老健中期vision …… 83
2019年度の活動 …… 84
施設概要 …… 85
職種別職員数 …… 85
事業統計 …… 86
生活支援部門 …… 88
入所療養科 …… 89
リハビリテーション部門 …… 90
リハビリテーション科 …… 91
通所リハビリテーション科 …… 92
事務部門 …… 93
総務課 …… 94
相談課 …… 95
褥瘡・感染対策委員会 …… 96
身体拘束人権委員会 …… 98
安全対策・リスク管理委員会 …… 99
行事・ボランティア委員会 …… 100
生活向上委員会 …… 101
学会発表実績 …… 102

外部研修参加実績 …… 102
施設内研修開催一覧 …… 104
京都市レジリエント・シティ京都防災功労特別表彰について …… 105
地域貢献活動 …… 106
実習生受入状況 …… 108
DWAT活動報告 …… 110
業績発表会 …… 111
京都市北区地域介護予防推進センター …… 112
職種別職員数 …… 112
地域活動実績・研修参加実績 …… 113

第4章　在宅関連部門

訪問看護ステーション「がくさい」 …… 116
在籍職員 …… 116
外部研修参加実績（訪問） …… 117
事業統計 …… 118
居宅介護支援事業所「がくさい」 …… 119
在籍職員 …… 119
外部研修参加実績（居宅） …… 120
事業統計 …… 120
京都市鳳徳地域包括支援センター …… 121
在籍職員 …… 122
外部研修参加実績（包括） …… 122
事業統計 …… 122

第5章　法人運営等

法人事務局 …… 124
理事会・定時評議員会 …… 125
法人運営会議 …… 126
クラブ活動：野球部 …… 127
クラブ活動：フットサル部 …… 128
クラブ活動：バレーボール部 …… 129
クラブ活動：テニス部 …… 130

年　　表 …… 131

巻　頭　言

理事長　森　　洋一

2019年度の年報を発刊するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

1982年の財団創設当時の事情をご存じの方も少なくなり、年号も昭和から平成を経て昨年は、令和へと御代代わりしました。戦後75年を超え社会は経済も豊かになり、文明、文化も発展して国民は豊かな生活を謳歌しているかに思えますが、医療界の置かれている立場は社会の変化に比して恵まれたものにはなっていないように思われます。

医学、医療の進歩と経済の発展により今や人生100年時代になったと言われていますが、果たして豊かな人生100年を終えることが可能な成熟した社会になっているといえるのでしょうか？国は、財政が厳しいと社会保障財源を抑制し続けてきました。社会保障を抑制して果たして人生100年時代の健康長寿社会は実現出来るのでしょうか？

医学医療の進歩により今まで不治の病と言われてきた疾病も予防や治療が可能となってきました。一方で、新興・再興感染症が次々と発生しパンデミックを引き起こす可能性が指摘されてきました。昨年末武漢市から世界に広がったCOVID-19は今や世界で2,000万人を超える勢いで感染者が発生しています。我が国でも、第1波は何となく押さえ込まれましたが第2波は7月末から8月にかけ増加中でいずれ5万人10万人が感染することになるであろうと思われます。このような状況下で多くの医療機関が厳しい医療、経営状況に置かれています。新型コロナウイルス感染症による重症患者を収容する病院では、日常的に必要とされている患者に十分な医療が提供できないばかりか、受診控えと重なり大幅な収入減少により経営が成り立たない状況に陥っていますしそれ以外の医療機関でも経営困難な状況に陥っています。COVID-19の患者のみならず多くの国民にとって医療が十分に受けられない状態、重症化してからの受診ではその結果は悲惨なことになってしまいます。当院でも、職員総力で感染者の発生予防対策に強力に取り組んでおり、感染者の発生は予防できていますが経営的には大変厳しい状況となっています。今後の見通しも楽観できないとして対応を進めています。

さて、昨年の実績報告をさせていただきます。新体制になり1年が経過しました。運営も順調で実績も結果が出せたと思っています。詳細は本書でご確認下さい。

病院、老人保健施設の方も職員の頑張りで成果が出ています。高齢社会を見据え、京都府医師会により設立された財団としての取り組みを進めてきた老人保健施設始め在宅部門への対応も訪問看護ステーション、包括支援センター業務の拡大のために昨年度末に事務所を分離拡張しました。そのために、実績は年度計画よりは低下していますが、居宅介護支援事業所、京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター、京都市北区地域介護予防推進センターなどの充実を図り2020年度には十分な実績を残せるよう努めていきたいと思います。

移転以来課題としてきた組織強化と運営基盤の安定化への取り組みも順調でCOVID-19の流行も乗り切れるのではないかと考えておりますが、今後の発展のためには人材の確保と育成が何よりも大切です。今年の状況はかつてのような研修、教育が質量ともに十分には受けられない状況ではありますが充実した内容のものにして補ってまいりたいと考えております。関係医療機関、関係団体の皆様の一層のご支援並びにご指導ご鞭撻をお願い申し上げご挨拶とさせていただきます。

第1章

京都地域医療学際研究所の概略

一般財団法人　**京都地域医療学際研究所**

基本理念

安全で、質の高い、信頼される医療と介護を目指します。

基本方針

1. 安全で安心な医療と介護を提供します。
2. 思いやりの心で患者・利用者本位の医療・介護を進めます。
3. 急性期から生活期まで切れ目のないサービスを目指します。

一般財団法人　京都地域医療学際研究所　中期vision

（策定　2018年4月1日）

［方　　針］

医療・介護報酬同時改定に向けて、強固な組織作りを継続する

［強化項目］

1. **安定した経営基盤**
2. **医療と介護の質**
3. **連携（チームアプローチ）**
4. **組織体制と人材育成**
5. **働き甲斐のある職場環境**

1. 安定した経営基盤の強化

前年度から改善しつつある経営基盤を更に強化し、持続可能な経営基盤を構築する。財務状況を健全化し、計画的な投資が出来る環境を整備する。そのためには予算計画に沿った法人運営を強化する必要がある。

2. 医療と介護における質の強化

医療と介護サービスの質を強化していく。そのためには、その基本となる医療安全管理や感染対策・接遇等の質も同時に向上させなければならない。質を担保する各種委員会の機能向上が必要である。

3. 連携（チームアプローチ）の強化

回復期におけるチームアプローチだけでなく、整形関連部署による整形チームの連携強化、また地域医療機関との連携強化が必要である。老健・在宅部門においては、地域包括ケアシステムにおける事業所の役割を認識し、法人内や地域との連携を強化する。

4. 組織体制と人材育成の強化

既存の組織体制に囚われず、いま必要な組織体制を構築する。また法人内の管理職とその候補者育成を強化する。

5. 働き甲斐のある職場環境の強化

適切な人事評価を導入し、頑張っている職員が働き甲斐を持てる環境を整備する。また法人運営に関する職員の前向きな意見を積極的に取り入れ、職員参加型の法人運営を目指す。

一般財団法人　京都地域医療学際研究所沿革

1981年6月	京都地域医療学際研究所　設立（京都府医師会による）
1984年1月	がくさい病院　開設（病床数50床）
1984年10月	病床数変更（101床）
1984年2月	健康診査事業部　設置
1985年	高齢者栄養生態調査事業（京都市保健センター委託事業）
1986年	スポーツ選手の筋力測定診断事業　開始
1987年	高齢者の体力に関する調査
1992年9月	老人訪問看護ステーション開設（京都府第1号）
1995年4月	スポーツ医科学センター開設
	アスリート体力測定・相談事業開始
1996年9月	京都市在宅介護支援センター開設
1998年12月	A棟3階病棟（21床）を「療養型病床群」に変更
1999年10月	診療科目　放射線科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション科を追加
2000年4月	介護保険事業開始（京都府知事指定）
2005年1月	介護老人保健施設「がくさい」　開設
2006年4月	健康スポーツクラブ「がくさいウェルネス」事業開始
	京都市鳳徳地域包括支援センター　受託経営開始
2007年7月	A棟4階一般病床（40床）を「障害者病床」に変更
2011年7月	A棟3階療養病床（21床）を「一般病床」に変更
2013年11月	がくさい病院移転（中京区）
	整形外科40床（一般病床）、リハビリ科50床（回復期リハⅢ入院料）
2016年4月	リハビリテーション科50床　回復期リハⅡ入院料へ類上げ
2016年10月	リハビリテーション科50床　回復期リハⅠ入院料へ類上げ
2017年4月	がくさい病院　訪問リハビリテーション事業開始
2018年5月	病棟改修工事（回復期病床50→46床、急性期一般病床40→44床）
2018年7月	介護老人保健施設「がくさい」強化型老健取得
2019年6月	がくさい病院　公益財団法人 日本医療機能評価機構　病院機能評価認定
	（リハビリテーション病院3rdG:Ver.2.0、付加機能審査バージョン3.0）
2020年2月	居宅介護支援事業所「がくさい」　移転

2020年3月末現在

一般財団法人京都地域医療学際研究所　事業所一覧

がくさい病院
京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター
〒604-8845
京都市中京区壬生東高田町１番９

介護老人保健施設「がくさい」
京都市北区地域介護予防推進センター
〒603-8465
京都市北区鷹峯土天井町54

訪問看護ステーション「がくさい」
〒603-8214
京都市北区紫野雲林院町76

京都市鳳徳地域包括支援センター
〒603-8145
京都市北区小山堀池町10
レスポアール紫明102

居宅介護支援事業所「がくさい」
〒603-8225
京都府京都市北区紫野南舟岡町15-2
クラスカ西陣515号室

理事・監事・評議員名簿

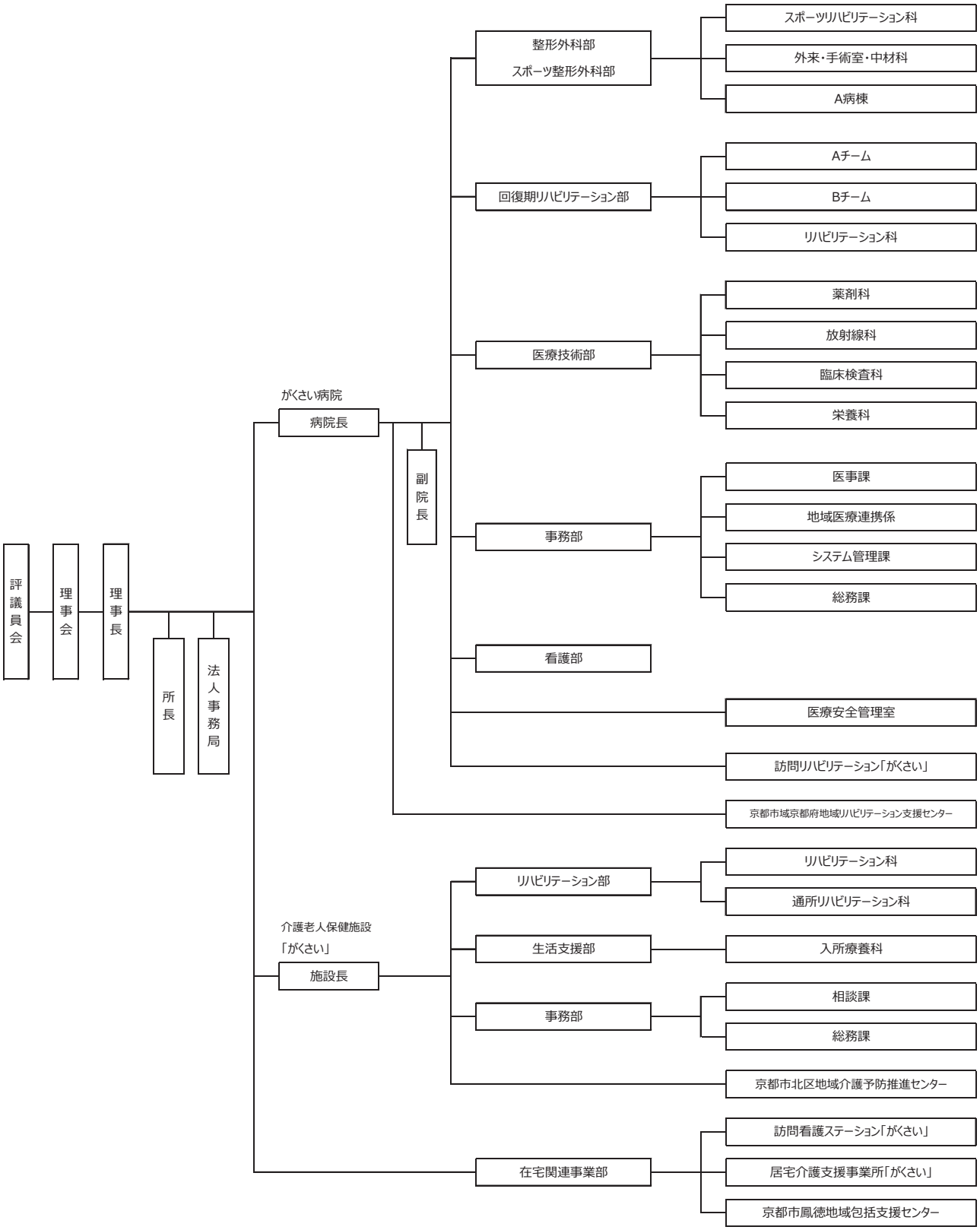
役職名	氏　　名	備　　考
理事長 （代表理事）	森　　洋一	京都府医師会顧問
副理事長	立入　克敏	京都府医師国民健康保健組合理事長、たちいり整形外科理事長
理　事	久保　俊一	公益社団法人日本リハビリテーション医学会理事長
理　事	城守　国斗	京都府医師会顧問、日本医師会常任理事、医療法人三幸会会長
理　事	三上　靖夫	京都府立医科大学大学院医学研究科リハビリテーション医学 教授
理　事	内田　寛治	京都府医師会理事、内田整形外科 院長
理　事	置田　文夫	アクシス法律事務所 所長
理　事	上島圭一郎	がくさい病院病院長
理　事	土井　　渉	介護老人保健施設「がくさい」施設長
理　事 （常務理事）	竹村　淳一	京都地域医療学際研究所事務局長

役職名	氏　　名	備　　考
監　事	安達　秀樹	安達消化器科・内科医院 院長
監　事	近藤　一郎	近藤公認会計士税理士事務所 代表

役職名	氏　　名	備　　考
評議員	田中　彰寿	田中彰寿法律事務所代表
評議員	田中セツ子	元市議会議員、田中セツ子京都結婚塾代表
評議員	加藤　アイ	上京地域女性連合会会長
評議員	髙奥　英路	紫竹自治連合会会長
評議員	小笠原宏行	下京西部医師会会長、医療法人三宝会小笠原クリニック院長
評議員	斉藤　憲治	右京医師会監事、さいとう医院 院長

2020年3月31日 現在

一般財団法人 京都地域医療学際研究所 組織図



2020年3月31日 現在

役職者名簿

1.京都地域医療学際研究所

理事長	森　　洋一
所長	久保　俊一
事務局長	竹村　淳一

2.がくさい病院

病院長	上島圭一郎				
副院長	菅　　寛之				
回復期リハビリテーション部 部長	前田　博士	整形外科部 部長	日野　　学	スポーツ整形外科部 部長	小牧伸太郎
回復期リハビリテーション部 医長	横関　恵美				
看護部部長	細越万里子	医療技術部部長	中井登代美	事務部部長	吉田　　潤
スポーツリハビリテーション科 科長	吉田　昌平	外来・手術・中材科 師長	谷田砂登美	リハビリテーション科 科長	中西　文彦
整形外科病棟 師長	今井千賀子	回復期リハビリテーション病棟 チームマネジャー	角田　公啓	回復期リハビリテーション病棟 チームマネジャー	中尾　元美
薬剤科　科長	古川吏恵美	放射線科　科長	吉川　友晴	医事課　課長	林　　亮治
医療安全管理部門 担当科長	山田　美香	総務課　課長	新谷　圭由	システム管理課 課長	髙田　賢悟
京都市域京都府 地域リハビリテーション支援センター センター長	上島圭一郎（兼務）	スポーツリハビリテーション科 科長補佐	相馬　寛人	訪問リハビリテーション 科長補佐	森本　雅之

3.介護老人保健施設「がくさい」

施設長	土井　渉				
生活支援部　部長	丹羽智佳子	リハビリテーション部 部長	岡　　徹	事務部　部長	矢田　圭吾
相談課　課長	井上　洋一	入所療養科　科長	中島由希子	通所リハビリテーション科 科長	井上　淳子
京都市北区地域介護予防推進センター センター長	藤林　通代				

4.他事業所

在宅関連事業部門 部長	稲田祐美子				
訪問看護ステーション「がくさい」 所長	藤原美智子	居宅介護支援事業所「がくさい」 所長	下山　照美	京都市鳳徳地区地域包括支援センター センター長	竹内　卓巳

※科（課）長補佐以上を表記している

2020年3月31日 現在

年度末職員数（有資格者人数）

2020年3月31日現在

	病　院	介護老人保健施設	訪問看護ステーション	居宅介護支援事業所	地域包括支援センター	合　計
医師	9名	1名	0名	0名	0名	10名
看護師	56名	13名	6名	0名	2名	77名
准看護師	4名	1名	0名	0名	0名	5名
薬剤師	4名	2名	0名	0名	0名	6名
管理栄養士	4名	2名	0名	0名	0名	6名
栄養士	0名	0名	0名	0名	0名	0名
放射線技師	3名	0名	0名	0名	0名	3名
臨床検査技師	2名	0名	0名	0名	0名	2名
理学療法士	30名	10名	3名	0名	0名	43名
作業療法士	14名	7名	1名	0名	0名	22名
言語聴覚士	6名	0名	0名	0名	0名	6名
介護福祉士	8名	59名	0名	0名	0名	67名
介護士	3名	名	0名	0名	0名	3名
社会福祉士	4名	1名	0名	0名	1名	6名
ケアマネジャー	0名	2名	0名	5名	3名	10名
事務員	22名	15名	1名	1名	0名	39名
合計	169名	113名	11名	6名	6名	305名

※病院には、京都市域リハビリテーション支援センターの職員数を含んでいる
※介護老人保健施設には、京都市北区地域介護予防推進センターの職員数を含んでいる

永年勤続表彰

2019年度の永年勤続者は勤続年数30年2名・20年1名・10年8名であった。
それぞれに表彰状などが授与された。

職　員　名	表　彰	所　　属
山　田　浩　弓	10年表彰	がくさい病院
中　村　美樹子	10年表彰	がくさい病院
多　田　裕　香	10年表彰	がくさい病院
矢　田　圭　吾	10年表彰	介護老人保健施設「がくさい」
遠　藤　良　太	10年表彰	介護老人保健施設「がくさい」
湯　浅　真希子	10年表彰	介護老人保健施設「がくさい」
加賀山　隆　次	10年表彰	介護老人保健施設「がくさい」
池　田　総　子	10年表彰	訪問看護ステーション「がくさい」
古　川　吏恵美	20年表彰	がくさい病院
山　田　美　香	30年表彰	がくさい病院
中　島　由希子	30年表彰	介護老人保健施設「がくさい」

第2章

がくさい病院

がくさい病院

病院理念

私たちは、医療・介護・福祉の専門分野の知識を結集し、学際的な視野で地域医療に貢献し、患者を大切にあたたかく包み込み、質の高い日常生活を過ごせるよう、そして患者の喜びをともに分かち合える医療・リハビリテーションを提供します。

基本方針

1. 安全で良質な医療・リハビリテーションを提供し、地域に信頼される病院を目指します。
2. 患者本位の医療を実践し、思いやりの心を大切にし、全職員がチーム医療を推進するとともに、明るく楽しい環境でともに歩める医療をつくります。
3. 全職員が日々進歩する医療に対し自己研鑽を怠ることなく、知識の習得と技術の向上を目指し、最新で最良の信頼される医療・リハビリテーションを提供するよう努力します。
4. 地域医療に貢献するため、他の医療機関や保健・福祉・介護システムとの連携を密にして医療を行います。
5. 患者に納得がいくまで充分な説明を行い、必要な診療情報を開示するとともに患者のプライバシーを守り、個人情報を保護します。

がくさい病院　中期vision

（策定　2018年4月1日）

一般およびスポーツ整形外科医療と、運動器スポーツおよび回復期リハビリテーション医療に特化した、安全で質の高い病院を目指す

［強化項目］

1. 良質で安全な医療の向上
   ① 患者目線のチーム医療の強化
   ② 各種委員会機能の強化
   ③ 各種連携の強化
2. 計画的な組織運営の強化
   ① 適切な目標設定による組織の活性化
   ② 適切な時間外労働の管理
   ③ 予算計画に基づく組織運営
3. 組織風土の改革
   ① 人材教育の強化
   ② 人事評価制度の導入
   ③ 職員の意見を募集する仕組みを創設

2019年度の活動

病院長：上島圭一郎

がくさい病院は2018年度に策定されたがくさい病院中期visionに則り、一般およびスポーツ整形外科医療と、運動器スポーツおよび回復期リハビリテーション医療に特化した、安全で質の高い医療の実践を目指した。

2019年度の病院運営

［診療実績］

整形外科診療では年間延患者数は30,011名、新規入院患者数1,195名、年間手術件数は人工関節置換術や関節鏡下手術を中心に1,319件と2018年度よりさらに高い水準を達成した。手術数の増加により患者1日あたりの診療単価が増加し、医業収益も増加した。整形外科・スポーツリハビリテーションでは年間41,357単位を超える施療を実施できていた。

回復期リハビリテーション診療では、専従医師のもとチームマネージャー制による多職種が緊密に連携した患者中心のチーム医療を実践し、よりFIM利得率指数を意識した体制を構築した。高いFIM利得率の獲得により、回復期リハビリテーション病棟の最も高い施設基準を満たすことができ、診療単価が増額できた。

［診療体制の充実］

移転後からの病院運営や日本医療機能評価機構による病院機能評価取得に尽力された小西哲郎病院長が2019年3月末で退任された。2019年4月からそれまで副院長であった筆者が病院長に着任した。病院長の補佐として、菅　寛之整形外科部長が副院長に昇任した。日野　学医師が整形外科部長、小牧伸太郎医師がスポーツ整形外科部長へ昇任し、整形外科と運動器スポーツリハビリテーション医療の診療体制を強化した。

2019年2月には公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価リハビリテーション病院（3rdG:Ver2.0）／付加機能　リハビリテーション機能（回復期）V3.0を受審した。令和元年6月7日付でリハビリテーション病院（3rdG:Ver2.0）／付加機能リハビリテーション機能（回復期）V3.0の認定を取得した。病院機能評価の受審、取得を通じて、がくさい病院の管理運営、医療安全のさらに充実したものとなった。

［地域交流活動］

2019年6月28日に地域住民向け健康講座として京都府医師会館において、がくさい健康塾を開催した。「いつまでも元気に暮らすために～宇宙飛行士から学ぶ秘訣～」をテーマに京都府立医科大学リハビリテーション医学教室教授の三上靖夫先生にご講演をいただいた。150名を超える地域住民の方に参加していただき、有意義な地域交流活動となった。

策定したがくさい病院中期visionにもとづき、職員全員の努力により2019年度の病院運営目標を達成することができた。診療体制のさらなる強化と病院の理念である安全で、質の高い医療の実践、将来のがくさい病院を担う人材育成に今後も継続して取りくんでいきたいと考えている。

病院概要

住　　所　京都市中京区壬生東高田町1番9
開　　設　1984年1月（2013年11月移転）
敷地面積　2,406.13㎡
延床面積　4,739.41㎡
構　　造　鉄筋コンクリート造・鉄骨造　地上4階（一部5階）
病 床 数　90床
駐 車 場　18台

施設

・1階　受付・外来診察室・処置室・検査室・放射線科・事務室・売店・京都府リハビリテーション支援センター
・2階　リハビリテーション室（約500㎡）・薬剤室・事務室・会議室
・3階　整形外科病棟 44床（個室8部屋・4床室9部屋）浴室・相談室・食堂・ナースステーション
・4階　回復期リハビリテーション病棟 46床（個室2部屋・4床室11部屋）介護浴室・浴室・相談室・食堂・ナースステーション
・5階　手術室（2室）・厨房

認定

日本整形外科学会研修施設
日本リハビリテーション医学会研修施設
京都府リハビリテーション教育センター 教育指定病院
病院機能評価認定病院（日本医療機能評価機構，リハビリテーション病院3rdG Ver.2.0,付加機能V3.0）
京都府立医科大学附属病院地域医療ネットワーク登録病院

施設基準

基本診療料

・急性期一般入院料5
・医療安全管理加算2
・医療安全対策地域連携加算2
・感染防止対策加算2
・診療録管理体制加算2
・データ提出加算1
・回復期リハビリテーション病棟入院料1
・体制強化加算1
・退院支援加算1（地域連携診療計画加算有）
・入院時食事療養（Ⅰ）

特掲診療料
・薬剤管理指導料
・CT撮影及びMRI撮影
・脳血管リハビリテーション料（Ⅰ）
・運動器リハビリテーション料（Ⅰ）
・骨移植術（軟骨移植術を含む）（自家培養軟骨移植術に限る）

2020年3月31日現在

医師体制

病院長

上島　圭一郎（うえしま　けいいちろう）

京都府立医科大学　整形外科　臨床教授
日本股関節学会　学術理事
日本整形外科学会　整形外科専門医・指導医
日本整形外科学会　認定リウマチ医
日本整形外科学会　脊椎脊髄病医
日本リハビリテーション医学会　専門医
日本人工関節学会　認定医
医学博士

副院長

菅　寛之（かん　ひろゆき）

京都府立医科大学　整形外科　客員教授
日本整形外科学会　整形外科専門医・指導医
日本リハビリテーション医学会認定臨床医
日本スポーツ協会公認スポーツ指導者
日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会　関節鏡技術認定医
日本人工関節学会　認定医
医学博士

整形外科

部長

日野　学（ひの　まなぶ）

日本整形外科学会　整形外科専門医・指導医
日本整形外科学会　認定リウマチ医
日本整形外科学会　認定スポーツ医
日本スポーツ協会　公認スポーツ指導者

医師

下村　征史（しもむら　せいじ）

日本整形外科学会　整形外科専門医
医学博士

スポーツ整形外科

部長

小牧　伸太郎（こまき　しんたろう）

日本整形外科学会　整形外科専門医
日本整形外科学会　運動器リハビリテーション認定医
日本整形外科学会　認定スポーツ医
日本スポーツ協会　公認スポーツ指導者

リハビリテーション科

部長

前田　博士（まえだ　ひろし）

京都府立医科大学リハビリテーション医学教室　臨床講師
日本リハビリテーション医学会　専門医
日本リハビリテーション医学会　指導医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会　認定士
義肢装具適合判定医師

医師

横関　恵美（よこぜき　めぐみ）

日本リハビリテーション医学会　専門医
日本リハビリテーション医学会　認定医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会　認定士
日本神経学会　専門医
日本内科学会　認定医

医師

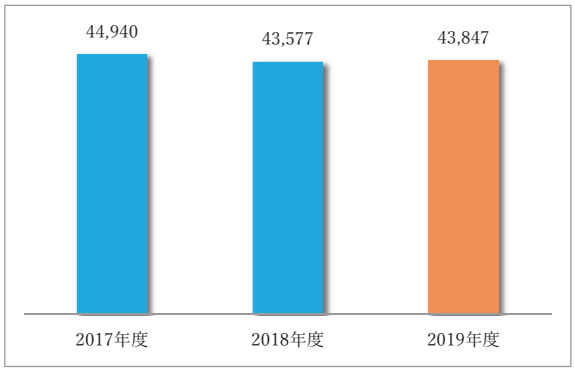
久保　元則（くぼ　もとのり）

日本リハビリテーション医学会　会員

2020年3月31日 現在

診療統計

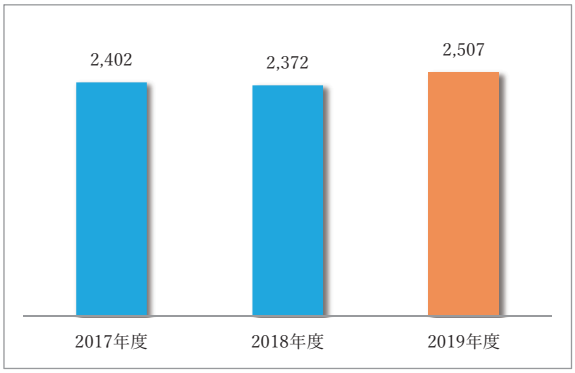
① 外来延患者数



（単位：人）

	2017年度	2018年度	2019年度
外来延患者数	44,940	43,577	43,847

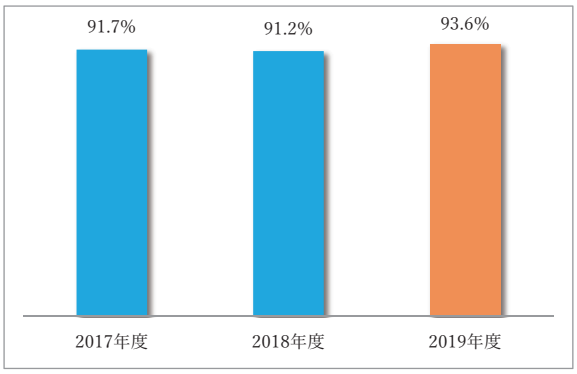
② 新規外来患者数



（単位：人）

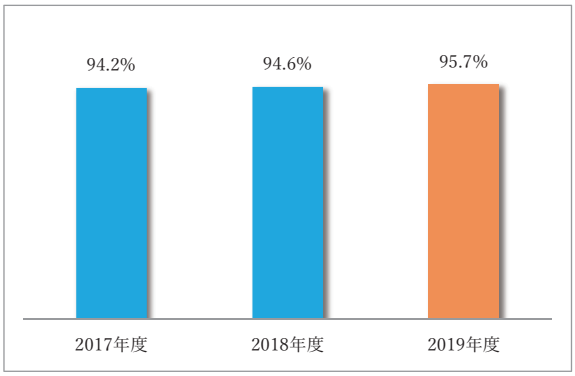
	2017年度	2018年度	2019年度
外来新規患者数	2,402	2,372	2,507

③ 病棟稼働率（A病棟）



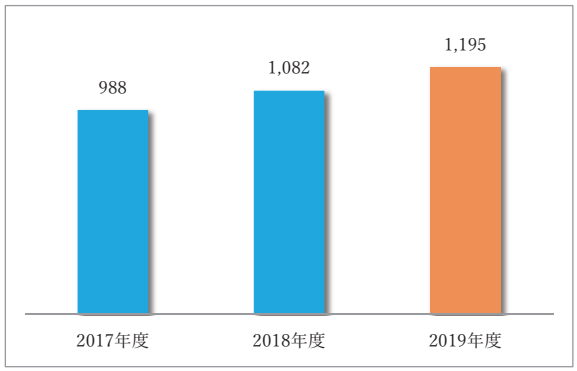
	2017年度	2018年度	2019年度
稼働率（A病棟）	91.7%	91.2%	93.6%

④ 病棟稼働率（B病棟）



	2017年度	2018年度	2019年度
稼働率（B病棟）	94.2%	94.6%	95.7%

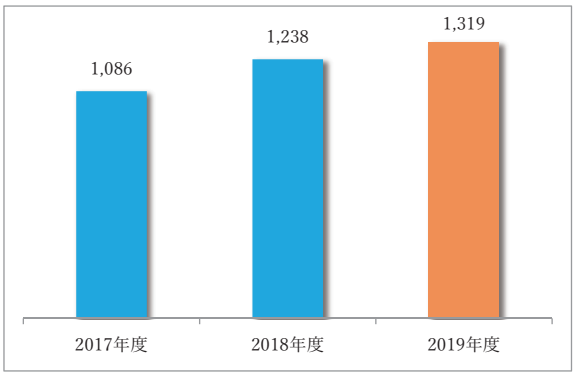
⑤ 新規入院患者数



（単位：人）

	2017年度	2018年度	2019年度
新規入院患者数	988	1,082	1,195

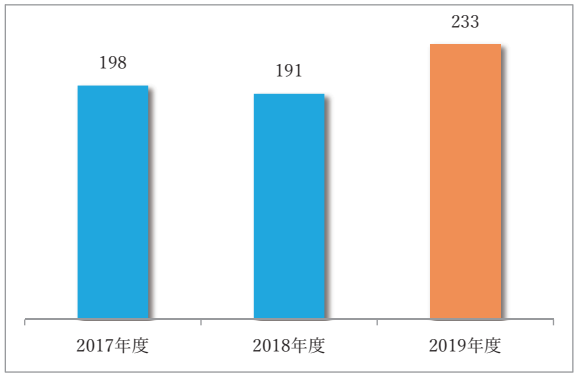
⑥ 年間手術件数



（単位：件）

	2017年度	2018年度	2019年度
年間手術件数	1,086	1,238	1,319

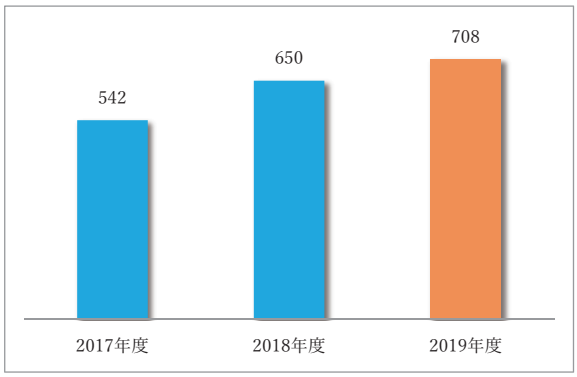
⑦ 人工関節置換術（膝，股関節）



（単位：件）

	2017年度	2018年度	2019年度
人工関節置換術	198	191	233

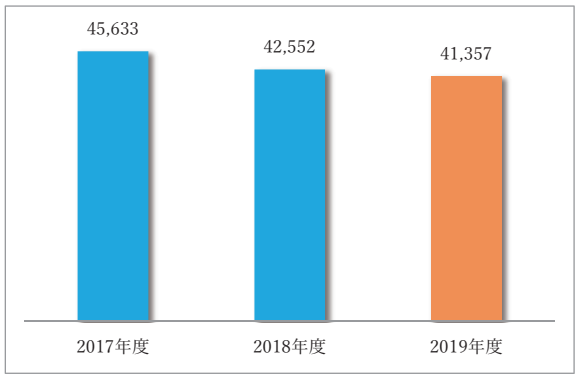
⑧ 関節鏡手術



（単位：件）

	2017年度	2018年度	2019年度
関節鏡手術	542	650	708

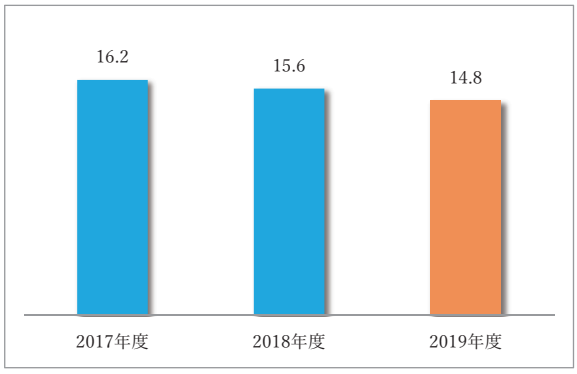
⑨ リハビリテーション総単位数：整形外科リハビリテーション



（単位：単位）

	2017年度	2018年度	2019年度
整形外科リハビリ	45,633	42,552	41,357

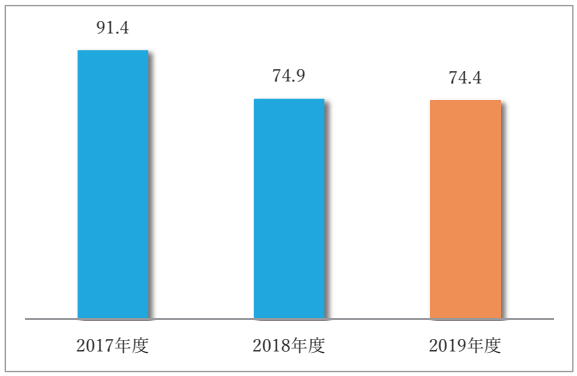
⑩ 平均在院日数：A病棟（整形外科病棟）



（単位：日）

	2017年度	2018年度	2019年度
平均在院日数	16.2	15.6	14.8

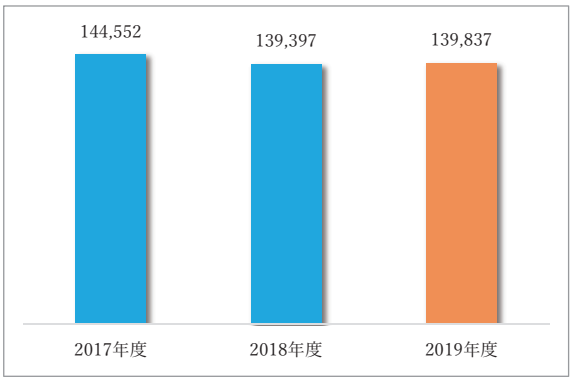
⑪ 平均在院日数：B病棟（回復期リハビリテーション病棟）



（単位：日）

	2017年度	2018年度	2019年度
平均在院日数	91.4	74.9	74.4

⑫ リハビリテーション総単位数：回復期リハビリテーション



（単位：単位）

	2017年度	2018年度	2019年度
回復期リハビリ	144,552	139,397	139,837

⑬ 在宅復帰率：回復期リハビリテーション病棟（疾病区分別）

	脳血管疾患	整形外科疾患	廃用症候群他
2017年度	79.3%	96.2%	85.7%
2018年度	78.1%	90.9%	85.7%
2019年度	76.2%	92.5%	100.0%

⑭ 患者1人1日リハビリテーション単位数：回復期リハビリテーション病棟

（単位：単位）

	脳血管疾患	整形外科疾患	廃用症候群他
2017年度	8.4	8.7	7.6
2018年度	8.6	8.4	8.4
2019年度	8.6	8.9	8.7

⑮ リハビリテーション総単位数：回復期リハビリテーション病棟

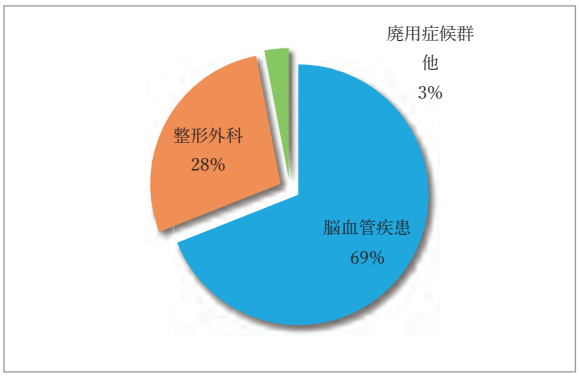
（疾患別内訳）　（単位：単位）

	脳血管	整形外科	廃用症候群他
2017年度	108,773	30,362	5,417
2018年度	101,323	33,632	4,442
2019年度	111,478	24,834	3,525

⑯ 施設基準項目：回復期リハビリテーション病棟

	2017年度	2018年度	2019年度
ADL改善 重症者割合	45.0%	55.0%	72.0%
FIM	－	39点	51点

⑰ 疾患別割合（2019年度）



	脳血管疾患	整形外科	廃用症候群他
疾患別割合	69%	28%	3%

整形外科部門

部長：日野　学

［部門方針］

各専門職は整形外科チームの一員として，高度かつ良質な医療技術をもって全人的医療を提供する。

［強化項目］

(1) 手術技術の向上と手術件数の維持
(2) トップクラスのスポーツリハビリテーションの提供
(3) 良質な看護ケアの提供と安定したベッドコントロール
(4) 手術室の安定運用と安全管理

2016年8月に当院着任後、整形外科医長・副部長を歴任し、2020年1月に部長を拝命いたしました。上島院長、菅副院長の下、引き続き良質かつ安全な医療技術の提供に努めていく所存です。

2019年度の整形外科は、前年度と同様に上記の部門方針を掲げ、医局・スポーツリハビリテーション科・A病棟・外来手術室中材科が一致団結しながら、方針の実現に努めた。医局体制においては、昨年度から菅先生が副院長に昇格され、3名体制となったが、院長・副院長を含めると整形外科医5名による体制を維持している。

手術件数においては、年間1319件（前年度1238件、伸張率107%）と過去最高であった前年度をさらに上回る手術を実施した。人工関節においては、人工膝関節置換術233件、人工股関節置換術が46件ともに過去最高手術件数であった。膝関節では全置換術（TKA）と比べ、低侵襲である単顆置換術（UKA）の実施が増えてきており、関節温存である膝周囲骨切り術は99件と引き続き高い水準で実施している。人工股関節は股関節外科専門である上島院長、下村医師が着任後から、近隣医療機関からの紹介も増えており、顕著な増加となっている。ご紹介していただいている近隣病院や開業医の先生方にはこの場を借りて御礼申し上げます。

手術室外来中材業務は統合直後では手術介助等の不慣れである分野もあったが、ここ1年で各個人が研鑽を重ね、日々頼もしくなっている。相互協力し合う体制も定着をみせ、より能率的な業務進捗が得られるようになった。A病棟においては、2019年度は1日平均入院患者数38.5名（前年度37.0名、伸張率104％）となり、前年度より増加した。2018年度に病床改修工事で4床の増床となり、入院患者数・手術数の増加も相まって、スタッフには労力の負担増もあったと思われる。看護師長・主任の下、病床管理を緻密に行い、看護職員・ケアワーカーの現場で尽力があった結果、質を落とさずに業務を遂行できたと考えている。

2019年度の整形外科部門は、新しい体制も定着をみせる中で、前年度を上回る活動ができたと考えている。今後の目標として、以前の強化方針に加え、互いの立場を理解・尊重する質の高い連携をさらに深めていくことを設定している。

スポーツ整形外科

部長：小牧伸太郎

こんにちは、2020年１月、スポーツ整形外科部長を拝命しました、小牧伸太郎です。

京都は昔からスポーツが盛んな地域です。野球、ラグビー、バスケットボール、バレーボール、陸上競技など、全国トップレベルの学生強豪チームや、社会人スポーツチーム、プロスポーツチームがあります。また、小学生駅伝、ママさんバレー、シニアの卓球、社交ダンス、登山愛好家など、幅広い年齢層でのスポーツ活動が多くみられます。

こうしたスポーツ活動を支え、様々なニーズに応えられるよう、がくさい病院スポーツ整形外科では、全身的な外来診療を行っております。丁寧な問診と、診察に加え、レントゲン、運動器超音波検査、MRIを用いて詳細な病態把握に努めております。アスレチックリハビリテーションが充実しており、保存加療でスポーツ復帰可能な症例も多くあります。

手術に関しては膝関節を中心に行っております。昨年度は、膝関節鏡視下手術が、年間584件（前年度569件・伸長率103％）で、主な内訳は半月板手術が年間328件、前十字靱帯再建術が111件でした。膝関節鏡視下手術の症例数は関西有数となっております。

スポーツ選手、愛好家の皆様が、怪我や痛みに悩まれたとき、「がくさい病院に行けば大丈夫！」と思っていただけるような病院を目指し、よりよい治療、アスレチックリハビリテーションを提供していければと考えています。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

A病棟

部　門：整形外科部門
記載者：今井千賀子

師長：今井千賀子　　主任：鈴木貴美子

[年間目標]

①安定したベッドコントロールを確保し、部署運営に貢献する
②専門職業人としてのケアの質をあげる

[主な活動]

①1,316件/年の手術件数より、月平均約110件の術後の患者を病棟で受け入れた。この件数は、目標件数75件/月を上まわり、部署運営に貢献出来たと考える。これは、医師をはじめ手術室・外来・医事課等の各部署とスムーズな連携がとれたこと。また、病棟では、スタッフ全員が患者の安全・安楽を第一に尽力してくれた結果、安定した入退院調整ができた結果であると考える。

次年度も、整形外科チームの良好でスムーズな連携体制が、患者の安全を守り部門の方針である全人的医療提供につながっていると思うため、さらに連携を強化していきたい。

②に対しては安全・安楽な医療の提供という目標掲げ、薬剤、特に注射に関するインシデント減少を指標として、取り組みをおこなった。

手術日の点滴確認方法を統一した結果5件/年となり、この数字は病棟の目標値内をキープでき、患者の安全なケアにつながったと考える。次年度は、内服薬に関するインシデント防止に取り組んでいきたいと考える。

次にプライマリナースによるカンファレンス開催率50%を指標とし、個別性のある看護が、患者に安全・安楽な医療を提供することにつながると考え取り組んだ。

結果目標値に到達することはできなかったが、チームで集まりカンファレンスを行うことで様々な視点で患者を捉えることに、看護で関わる部分があることに気付け、意識を共有できたことで統一した看護を継続して行うことにつながったと考える。次年度も取り組んでいきたい。

伝達講習・勉強会、倫理に関する話し合いについては、目標値到達でき、安全・安楽な医療の提供、ケアの質の向上につながったと考える。

倫理を理解するには、倫理とはなにか、その事柄が、倫理的課題なのかということに、気づけるかどうかという意識が必要になってくると思う。スタッフ全員がその意識をもてるよう次年度も取り組んでいく。

スポーツリハビリテーション科

部　門：整形外科部門
記載者：吉田　純

科長：吉田　昌平　　科長補佐：相馬　寛人
主任：金村　朋直、吉田　純

[方針]

『高い質の運動器リハビリテーションを提供する』

[主な活動]

【体　　制】

2019年度開始時点では理学療法士11名で業務を行っていた。
3月末には理学療法士9名であった。
（内訳）
入職：4月2名
復職：9月1名（育児休暇明け）
退職：5月、11月、2月に各1名、計3名

【業務実績】

月あたりの単位数：3468単位（3400）
各セラピストにおける月あたりの単位数：18.7単位／人（18）
離脱率：4.8%（＜10）
インシデント件数：2件（0）
研修会・学会参加：年8回／人（12）　　※括弧内は目標値

2019年度は職員の入退職があり、職員数が減員したことも影響し、運動器リハビリテーションの実施単位数は前年度と比較すると減少した。また、各セラピストにおける単位数も前年度と比較し減少していることから、絶対的なリハビリテーション実施単位数も減少した。しかしながら、実施単位数、各セラピストにおける単位数ともに過去3年間にわたり目標値を上回ることができた。

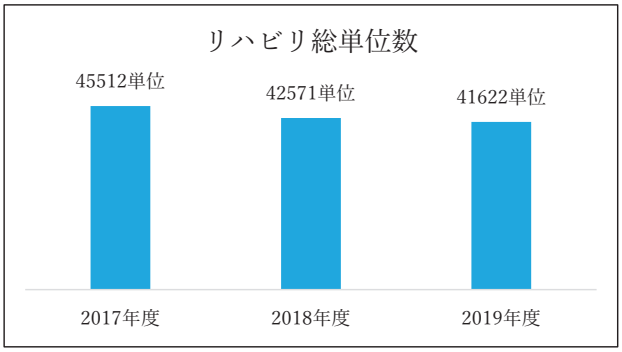
当科では『高い質の運動器リハビリテーションを提供する』ために、十分な説明を行い患者個別のリハビリテーションを実施することに努めている。その結果として、10%未満が目標である離脱率が4.8%であったと考える。

途中離脱された患者が4.8%ということは、言い換えれば95%以上の患者がリハビリテーションを終了することができたということである。リハビリテーションが終了するということは受傷前や手術前、もしくは一定のレベル以上まで運動機能が改善し、ADL動作獲得やスポーツ復帰ができていると考えられる。したがって、離脱率の数字を見れば患者の満足度は高く、患者に納得していただける質の高いリハビリテーションを提供できていたことが予測される。

科内では職員全員が協力し、リハビリテーション室内の患者全体の安全を把握することで、2019年度アクシデント発生件数0件であった。しかしながらインシデントは2件発生しているため、今後も引き続きインシデント発生件数減少を目標としていく。

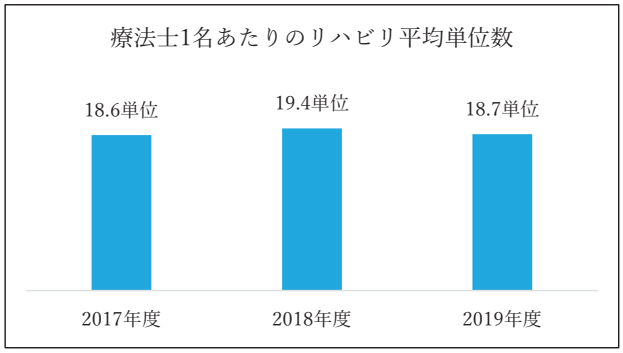
理学療法士個々としては、研修会・学会に参加することで治療における知識・技術を研鑽し、他部署との連携をはかりチームとして患者一人一人によりよいリハビリテーションを提供できるように努めている。

月あたりの単位数



	2017年度	2018年度	2019年度
リハビリ総単位数	45512単位	42571単位	41622単位

各セラピストにおける月あたりの単位数



	2017年度	2018年度	2019年度
平均単位数	18.6単位	19.4単位	18.7単位

看護部外来・手術室

部　門：整形外科部門
記載者：谷田砂登美

師長：谷田砂登美　　主任：進士　香織

[年間目標]

①チーム医療を行うためのシステムを構築し病院経営に貢献する
②安全で質の高い看護を提供する

[主な活動]

年間目標であるチーム医療を行うためのシステム構築は前年度から継続して取り組んでおり、細かな修正を加えながら着実に行っている。特に術前オリエンテーションは全ての全身麻酔を受けられる患者に実施している。手術決定後の術前検査時に行うことで的確に患者情報が得られ、外来～入院・手術への問題点の抽出や密なコミュニケーションにより、個別性のある継続看護に繋がっている。年間手術件数は目標900件に対して1,316件と前年度より大幅に増加したが、忙しい外来業務の中で全ての手術患者に対してオリエンテーションを通して関われたことは、外来看護の大きな進展と考える。

外来での関わり～手術看護・術後看護へと継続して行い、再び外来看護へと戻るという小規模病院ならではのサイクルで、看護の面でも安心して選ばれる病院を目指したい。

また、外来で看護師と密に係わることで患者からの質問を受けることも多く、疑問解決の場となり不安の軽減に大きく役立っていると考える。

退院時支援加算についても対象症例は全て算定できており、今後も継続していきたい活動の一つである。

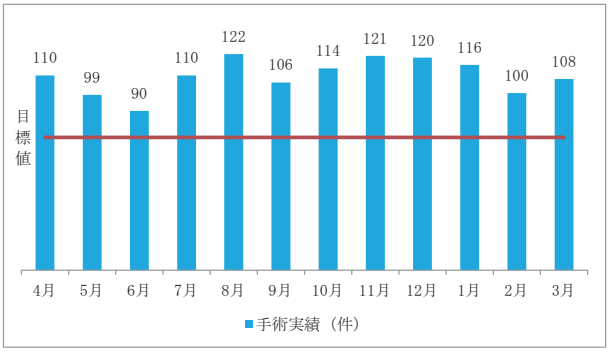
安全で質の高い看護を提供するために、スタッフ全員が交代で勉強会を開催。それぞれが再度深く学びスタッフみんなで共有することで、個々の『スキルアップ』と全体的な『看護の標準化』につながり、看護の質向上に役だった。

ヒヤリ・ハット報告件数は前年度と比較して多きな増加はみられなかったが、それぞれの事例に対しては対応策を考えて共有することでアクシデントが起きることはなかった。

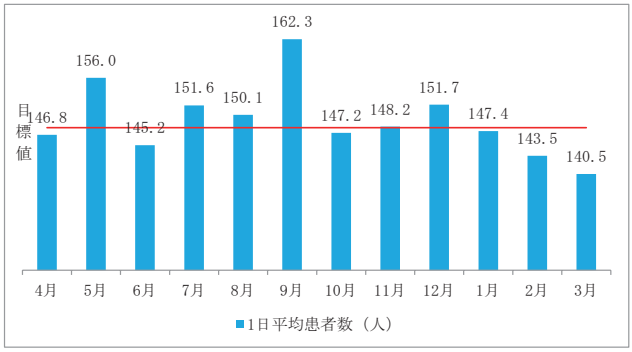
昨年度までは医事課と合同で行っていた患者アンケートを、今年度は外来看護師が独自で行い、看護師が日々抱いている疑問や不安に対して、『外来患者の声・意見』を聞くことができた。この声を生かして今後の看護に繋げたい。

[活動データ]

年間手術実施件数（件）



1日平均患者数（人）



回復期リハビリテーション部門

記載者：前田　博士

部長：前田博士
チームマネージャーA：角田公啓　　チームマネージャーB：中尾元美
科長：中西文彦

[年間目標]

『京都府における回復期リハビリテーション病棟のモデルとして，チームアプローチを強化し、質の高いリハビリテーションおよびケアを提供する』

[主な活動]

2019年度は、輝生会からの出向スタッフによるサポート期間満了により、当法人スタッフのみでの運営となる変革の1年であった。前年度に、角田TMや前科長補佐の髙野STらを中心に準備をしていたため、大きな混乱を生じることはなかった。4月にはPT 6名、OT 1名、ST2名、Ns 1名の新入職者を迎えた。新人教育には、各職種の主任らの尽力があり、新体制を整えることができた。また、前年度に受審した機能評価機構から6月7日に正式に認定の通知を受け、幸先の良いスタートを切ることができた。

昨年度から算定できるようになった回復期リハビリテーション料Iを維持するために、実績指数37以上を保つには、質の高いリハビリテーション医療とケアの提供を継続できるかどうかが課題であった。定期カンファレンスでの情報共有に一層力を入れ、獲得した能力の病棟内生活での実践などにより、ADLの早期向上と早期退院に各チームが一丸となって取り組んだ。機能評価受審を経てチームワークがより強固なものとなったこともあり、年度を通じて実績指数37以上を大きく超えた数字を残すことができた。この結果はわれわれに大きな自信となった。

京都府立医科大学リハビリテーション医学教室からの大きな支援も続き、三上教授からは、外来診療だけではなく、当科の入院治療方針についても多くのご指導をいただいた。また、沢田講師からは外来診療以外にも、専攻医指導や当科の療法士に対する教育や運営面でのアドバイザーとして支援を受けた。専攻医の久保医師は、年度途中から医長に昇格した横関医師とともにリハビリテーションチームのリーダーとして多くの症例を担当した。教育面では、京都府立医科大学の学部学生や同大学附属病院研修医の見学実習や短期研修の受け入れも継続した。

研究面でのトピックスとしては、急性期脳卒中片麻痺に対する歩行支援ロボットを用いた歩行訓練の実用性に関するパイロット試験を開始したことが挙げられる。これは、京都府立医科大学と京都第一赤十字病院と当院でのTOYOTA ウェルウォークを用いた他施設共同研究である。2020年2月に第6回京都リハビリテーション医学会学術集会で、筆者らは、この研究の経過を報告した。同学術集会では本研究も含め、当部門から5演題を発表した。他に第56回日本リハビリテーション医学会学術集会や第3回日本リハビリテーション医学会秋期学術集会をはじめ、多数の学会発表をおこなった。

2019年度、新体制での診療を軌道に乗せることができた。2020年度は、欠員している管理職を育成しながら、臨床だけでなく、臨床能力を高めるような研究活動にも注力したいと考えている。

B病棟

部　門：回復期リハビリテーション部門
記載者：角田　公啓

Aチーム	チームマネージャー：角田　公啓	主任：吉田　幸世　中山　泰
Bチーム	チームマネージャー：中尾　元美	主任：津野真奈美　榊原久見子

[年間目標]

『チーム医療による良質なリハビリテーションとケアの提供』

[主な活動]

今年度は、入院基本料1を維持すること、病床稼働率96％以上、カンファレンスの質の向上を大きな活動目標とした。

入院基本料1が維持できた要因として、実績指数を管理していくために病棟にとって脳血管と運動器の最適な割合（バランス）が図れるようになったことが上げられる。チームが自ら掲げた目標・入院期間を目指してリハ・ケアを実施していくことで平均在院日数も昨年に比べ短縮が図られ実績指数の上昇につながっている。また、重症者が多くなったときなど、適宜入院患者の重症度の調整をすることで業務量の調整もできるようになってきた。完全にフラットな業務量にすることは難しいが、平均した業務量に近づけることで業務の負担感は軽減でき、スタッフの定着につながると考える。スタッフの定着は、回復期病棟の質を向上させるための大きな要因になり得る。

病床稼働率は、年平均95.7％で目標を達成できなかった。①98％以上の月が1回、②97％以上の月が2回、③96％の月が4回、④95％以上の月が3回、⑤91％以上の月が2回、以上の経過となり目標は達成できなかった。91％の9月は5名の方が急性増悪により転院したことで稼働率が低下した。1～2名の転院であれば何とか稼働率を維持できるが、5名の転院はカバーしきれなくなる。回復期のため、重度な方、多くの併存症を抱えている方など急性増悪のリスクを抱えている方が多数いる。しかし、回復期として一定割合の重症の方を受けて行く必要があるため、今後は全スタッフがさらに協力して全身管理を行いながら介入していく必要がある。

カンファレンスの質の向上として今年度大きく問題となったのは、スタッフが退院後の生活を見据えて物事を考えることに不十分な時が散見されたことである。当病棟が回復期として経験が浅く、若いスタッフが多いため、高齢者が麻痺などの症状を伴って自宅で生活を送っていくことをイメージすることがまだ難しいと考える。退院後の生活をイメージするために情報を共有し整理するための、『生活期（退院）に向けての準備・整理リスト』を作成し電子カルテ内で誰でも入力・閲覧ができるようにした。どの職種でもこのリスト画面に入力ができることで、退院に向けて行う必要な事項を網羅し、共有と把握がし易くなることを目指している。

次年度は、更なる成長を目指すために、常に質を意識していきたいと考える。

リハビリテーション科

部　門：回復期リハビリテーション部門
記載者：中西　文彦

科長：中西　文彦
主任：山﨑　泰志、岩永　久乃

[年間目標]

『回復期リハビリテーション病棟チーム制の充実と専門性を高めることで、質の高いリハビリテーション医療とケアを提供する』

1. リハビリテーション提供単位数の維持・向上
2. 回復期リハビリテーション病棟Ⅰの基準維持
3. 評価データベースの利用
4. カルテ記録の充実を図る
5. 時間外労働の削減
6. 中堅職員の育成
7. 部門研修の実施と各種研修会への参加
8. 学会発表など研究活動の支援

[主な活動]

春にはPT6、OT1、ST2の計9名が入職、年度内に1名の入職と4名の退職があった。PT18、OT14、ST6の総勢38名体制で目標に取り組んだ。

リハビリテーション提供単位数について記載する。年間総単位数は139,892単位（昨年度：139,270単位）であった。図1には疾患別リハビリテーション実施単位数の前年度との比較を示す。図2には月別実施単位数の前年度比較を示す。図3には患者1人1日当りのリハビリテーション提供単位数の推移前年比較を示す。

次に、時間外労働を削減するために間接業務枠の見直しを行なった。従来から直接業務20分1単位に合わせて間接業務20分1枠を合わせて、職員1名1日20枠で管理している。人員配置上可能な場合は必須間接業務枠以外に業務時間内に行う「その他(同席・フィードバック、サマリー作成など)間接業務枠」を新設して時間外滞在時間の削減に取り組んだ。更に滞在時間が多い職員との面談・指導を行い、下半期徐々に滞在時間が減少した。図4は「一日の業務と滞在時間の変化」であり、療法士1名1日当たりの実施単位数（橙）に積み上げた間接業務枠数（青と緑）と時間外滞在時間4月を100%とし月毎の変化を示している。年度末には時間外滞在時間3割削減を達成できた。今後も時間外滞在時間の短縮に対する個人指導は継続が必要と考える。

続いて、評価の入力と記録の充実に取り組んだ。評価データベースの見直しを行い、その入力を促し定着させた。SOAP形式の記録は項目別には入力出来ているが、アセスメントとプランは内容が不十分であり、今後は評価結果を他職種と共有することが求められている。

また、職員の教育、研修、根拠に基づいたアプローチのための学会発表にも取り組んだ。2019年度は年間12回の部門・部署研修会を開催し、研修出張には計画の7割参加を果たし、10件の学会発表を行った。2020年度はCOVID-19の影響の中でも研鑽に励み、チームアプローチの強化と総合力のある専門職の育成、学ぶ意欲を育みキャリアアップを支援することで、質の高いリハビリテーション医療とケアを提供していきたい。

［活動データ］

図１　疾患別リハビリテーション実施単位数前年比較

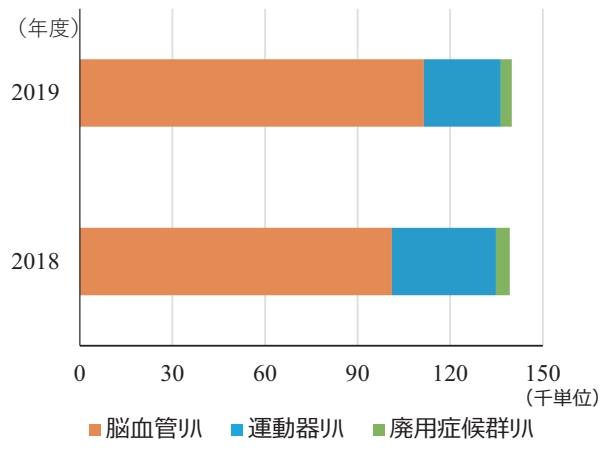


図２　月別提供単位数前年比較

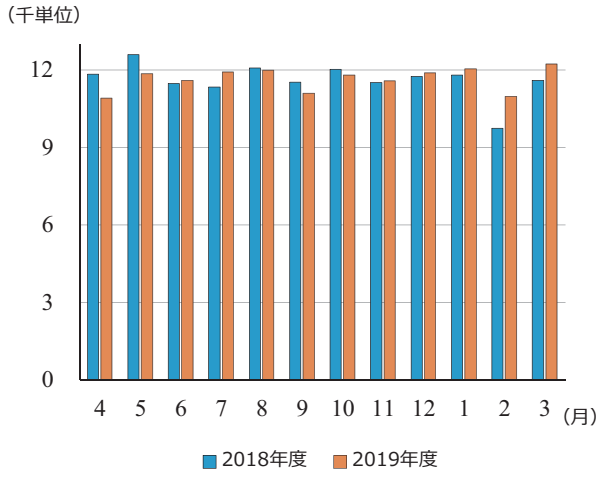


図３　患者１人１日当たり提供単位数

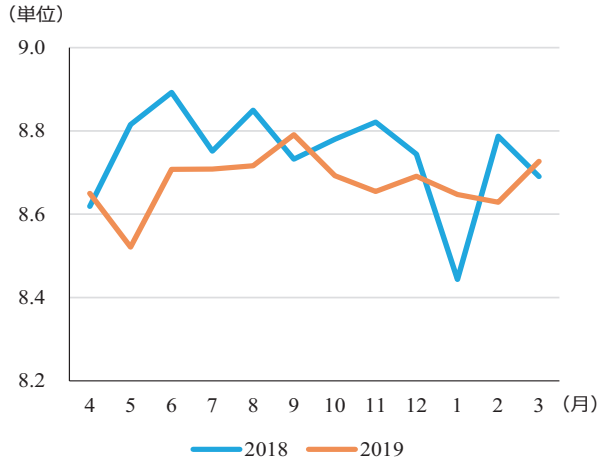
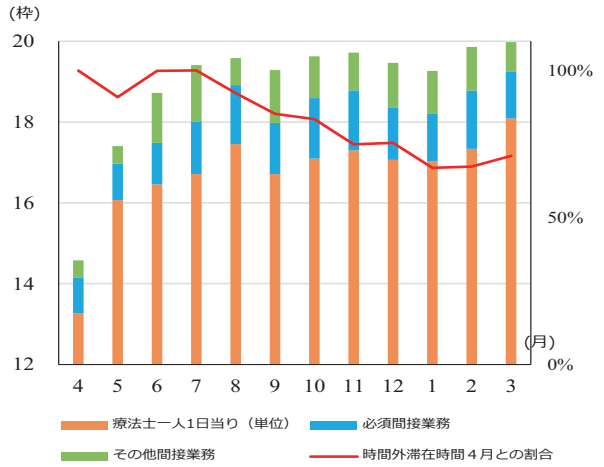


図４　１日当たりの業務と時間外滞在時間の変化



看護部門

記載者：細越万里子

看護部長：細越万里子
外来・手術室師長：谷田砂登美
Ａ病棟師長：今井千賀子　　Ｂ病棟ＴＭ：角田　公啓・中尾　元美

[方針]

『看護専門職としての能力を高め、安全で安心な看護を提供する』

[主な活動]

2019年度の看護部門の組織体制は、前任者の退任に伴い新たに看護部長を選任し体制を一新してスタートした。看護部門は、看護専門職としての能力を高め、安全で安心な看護の提供を部門方針に上げ、整形外科部門（Ａ病棟、外来・手術室）、回復期リハビリテーション部門（Ｂ病棟）がそれぞれの部門方針と共に実現に努めた。

1. 看護ケアサービスの質の向上

部署の特性に応じたテーマの院外研修や学会にそれぞれが参加できた。毎月部署で勉強会や研修の学びを共有し業務に取り組むことができた。研修一覧は別紙参照

2. キャリアアンカーの分析と価値観の確立

今年度は人員が充足していたため新規採用の予定はなかった。しかし期中でケアワーカーの体調不良や定年により4名が退職となり、さらに老健へ出向要請、看護師の産休・育休、病欠者が続いていたため回復期病棟に看護師1名、介護福祉士1名を中途に採用した。介護職の人材確保は、年々難しくなっている状況であり夜勤業務への意欲を高め退職者を減らし、かつ入職者を増加させる目的で給与体制の見直しを実施した。

部署の活性化のために9月に動向調査を実施した。退職の理由は、「海外留学」や「他にやりたい看護がある」、「体調不良」などであった。個別に面談を行いキャリアビジョンを共有、法人内や部署異動を提案し退職をとどめることができた。当院は、看護職員の高齢化に伴い離職率が低く出産後も復帰し育児と仕事を両立している職員も多く人材の定着が図れ働きやすい職場環境といえる。

しかし部署異動や入れ替わりがないと新しい発想や変化を恐れ組織風土の停滞が起きがちである。次年度は中堅の能力開発や部署異動を積極的に行い職員一人一人がより一層成長できるよう、そして風通しのよい組織へと醸成していきたい。

3. ホスピタリティの向上

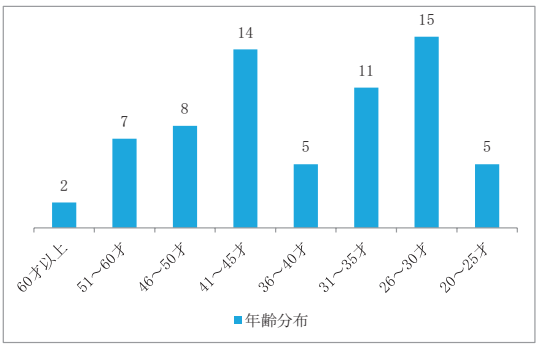
ECT委員会や看護部の教育委員会と協働し振り返りの倫理検討会を3回/年と看護倫理綱領をもとにグループワークを行い臨床現場のジレンマを言語化し患者にとっての最善とは何かを多職種で考える事が出来た。

外来手術室は、アンケート調査結果から外来待ち時間の可視化を提案。各診察室前に時間を表示し待ち時間の工夫から長時間待つ患者のストレス解消につながったと言える。

4. 働きやすい職場環境の構築

「年次有給休暇5日以上取得率」は平均88.3％取得できた。しかし部署によっては、取得できていない職員もあった。残業時間は、平均1人あたり6時間/1ヶ月であった。主に管理職の残業や年次有給休暇取得の低さが目立っており次年度は、一人一人の健康・幸福のために勤務環境改善を行い年次有給休暇の確実な取得と定時で退勤することを意識したい。

看護部職員年齢分布



医療技術部門

記載者：中井登代美

薬　剤　科	部長：中井登代美	科長：古川吏恵美
放射線科	科長：吉川　友晴	主任：恒吉　克也
臨床検査科	主任：山田　浩弓	
栄　養　科	係長：中平　美紀	

［方針］

『安全で質の高い専門技術の提供と支援』

～　専門性を活かそう！　～

［強化項目］

1　専門職としての質の向上

2　他職種と連携し、チーム医療を推進する

3　医療安全体制の強化と業務効率化をめざす

［主な活動内容］

2017年より薬剤部・放射線科・臨床検査科・栄養科を統合し医療技術部としての運営を開始し今年度は三年目となった。

2018年度は日本病院機能評価の受審にむけ、業務改善やマニュアルの整備に取り組んだ。

今年度は医療技術部として医療安全体制の強化を目指した。

薬剤科では病院機能評価受審より開始した回復期病棟の薬剤師業務を充実させた。入院前薬剤情報を確認し、入院時合同評価・初回カンファレンスへの参加、退院時服薬指導を行い、医療安全とチーム医療に取り組むことができた。

検査科では精度管理調査で基準をクリアし質の確保ができた。また医療安全院内ラウンドにも積極的に参加した。

栄養科では産休・育休などによりマンパワー不足もあったが、ミールラウンドを積極的に行い患者の状態を把握し、患者に合わせた美味しい食事の提供ができた。

放射線科では数ヶ月欠員があったが、医療安全面では患者誤認の安全対策を立て、専門分野では次年度の学会発表にむけ準備することができた。

今後も人材育成と専門職として質の高い医療技術の提供につとめ、安全・安心なサービスの提供を目指していく。

薬　剤　科

部　門：医療技術部門
記載者：古川吏恵美

科長：古川吏恵美

[年間目標]

『薬物療法の有効性と安全性を確保し、多職種と連携し最適な医療を提供する』

【勤務体制】

常勤薬剤師4名体制

【2019年度　主要業務実績】

処方箋枚数：内服・外用－16835枚　　注射－5941枚
薬剤管理指導件数：996件（整形外科病棟のみ）
持参薬鑑別件数：948件（老健「がくさい」含む）
持参薬処方枚数：1087枚
老健「がくさい」調剤処方箋枚数：3954枚
薬剤科内勉強会：24回
その他、配薬トレイセットなど

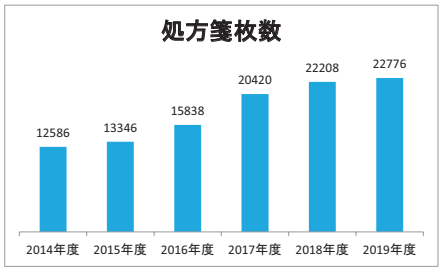
整形外科病棟では、持参薬から院内処方に変更する際の確認や服薬管理指導等を行った。手術患者数増加に伴い、薬剤管理指導件数、持参薬鑑別件数等が増加している。持参薬使用に伴い、処方変更や配薬トレイセットが複雑になっている。

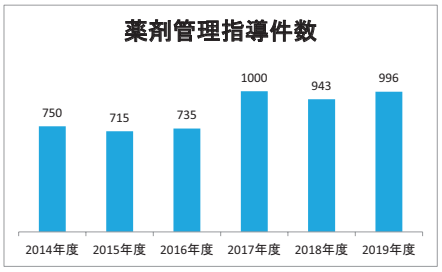
回復期リハビリテーション病棟では、入院判定会議の処方内容や非採用薬の代替薬、疑問点を確認することで入院前の情報共有を行った。また、入院時合同評価や初回カンファレンスへの参加により多職種で情報共有を行い、退院時等服薬指導を充実させ、入院前から退院時までの薬剤管理に貢献できた。

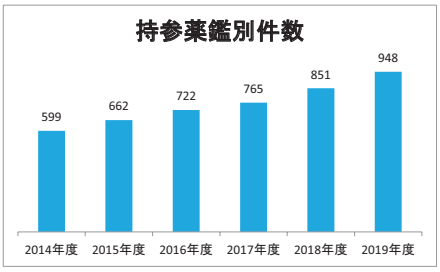
老健「がくさい」で、2020年1月30日から電子カルテシステムが稼動し、処方箋がSSIでの発行になった。これに伴い、前回処方や持参薬処方を確認できるようになったため詳細な疑義照会が可能となり、薬物療法の安全性確保に貢献できた。処方箋枚数も増加している。

今後も多職種で連携して薬物療法の有効性と安全性を確保し、最適な医療を提供できるよう努力していきたい。

[活動データ]







放射線科

部　門：医療技術部門
記載者：吉川　友晴

科長：吉川　友晴　　主任：恒吉　克也

[年間目標]

『専門知識を深め、有用な画像を提供することで、チーム医療に貢献する。』

[主な活動]

【体　　制】

常勤技師3名体制

（2019年12月1名退職、2020年3月常勤技師1名入職）

【業務実績】

2014年度：一般撮影	7559件	MRI 1121件	VF 45件
2015年度：一般撮影	8246件	MRI 1297件	VF 58件
2016年度：一般撮影	10737件	MRI 1503件	VF 60件
2017年度：一般撮影	12377件	MRI 1668件	VF 105件
2018年度：一般撮影	13118件	MRI 1607件	VF 79件
2019年度：一般撮影	14307件	MRI 1474件	VF 76件

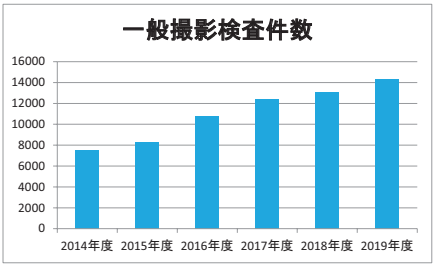
2016年1月　X線TV装置更新

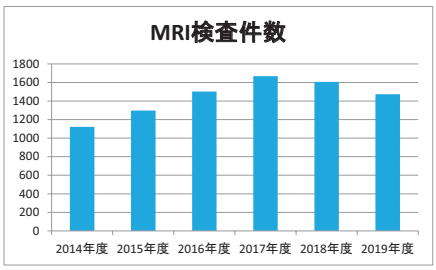
2018年5月　一般撮影装置　CR装置からDR装置に更新

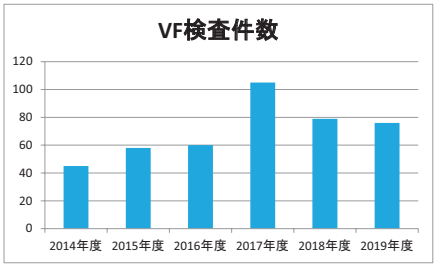
今年度は、12月から2月までの3ケ月間は、技師が2名体制であった為必然的にMRIの検査枠を抑えることになった。そのため、MRIの年間検査数がかなり減少する結果となった。3月からは以前の3名体制に戻ったが、新職員は経験年数が浅く、万全の体制とは言えない。したがって、撮影技術の早期習得を目指し、検査のサポート体制を整える。また、互いに成長し得る職場環境の構築により、検査数の増加につなげることを目標とする。

来年度の4月になるが、『MRIを用いたACL再建術後における大腿骨骨孔評価の検討』を日本放射線技術学会総会学術大会にて発表予定である。

「専門知識を深め、有用な画像を提供することで、チーム医療に貢献する。」をモットーに、日々検査を実施している。今後も患者には丁寧な対応を心がけ、チームの一員としての自覚を再認識し、また撮影技術の向上を目指して放射線科一同、努力していきたい。







臨床検査科

部　門：医療技術部門
記載者：山田　浩弓

主任：山田　浩弓

[年間目標]

『チーム医療の一員として、患者の安全に努め正確な結果を迅速に臨床に報告する。』

[主な活動]

【体　　制】

常勤臨床検査技師2名

【業務実績】

検査総数推移

2016年：検体	1449件	生理 1847件	超音波 723件
2017年：検体	2369件	生理 2096件	超音波 958件
2018年：検体	2521件	生理 2218件	超音波 1059件
2019年：検体	2674件	生理 2481件	超音波 1271件

前年度より引き続いて、臨床検査科の業務の標準化と質・精度の維持を目的とし、実践している取り組みの定着を目標として取り組んだ。

主な活動内容は、検査の質・精度の維持を確認するためとして、6月に「日本臨床検査技師会精度管理調査」、11月には「京都府臨床検査技師会精度管理調査」に参加し、各外部精度管理において共に学会の定めた目標基準をクリアした。

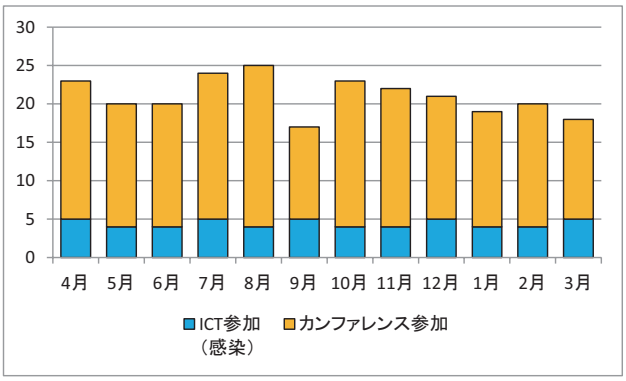
検査機器の精度を維持するためとして、検査機器の点検・保守管理を業務内でルーティン化し、点検から保守・管理・整備対応におけるフローを定着化させた。それにより機器の不具合にいち早く気づき、検査報告に遅れが出ないよう、先回りした対応ができた。

他部署への情報発信として、検査情報の発信・周知だけでなく、検査科から検体取り扱いにおける注意喚起や提案も出すことが出来た。他部署への検査情報の発信については次年度も継続していきたいと考える。

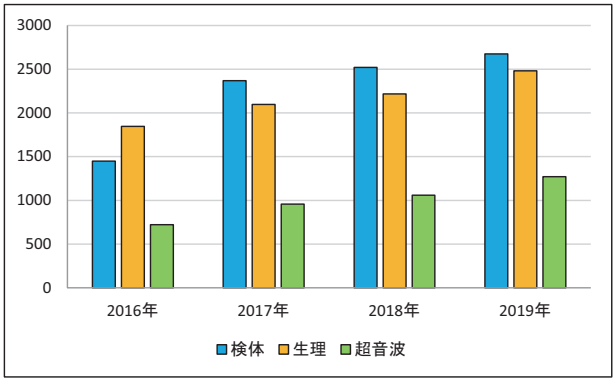
医療安全については、昨年より実施している検査室内の掲示や案内、電子カルテトップページへの掲載情報を随時更新し、情報の滞りが生じないように努めた。引き続き、他部署からの要望や意見を集積・検討し、業務フローチャートの見直しや、新しい情報の発信と既存情報の更新を行っていくよう努める。

各検査種別検査件数

ICT/カンファレンス参加実績(回数)



検査総数



栄養科

部　門：医療技術部門
記載者：中平　美紀

係長：中平　美紀

[年間目標]

『患者の疾患に合わせた安心・安全な食事の提供』

[主な活動]

【体制】

病院スタッフ　管理栄養士3名
給食委託　　京都マルタマ（株）栄養士2名、調理師1名、調理補助4名

【業務実績】

2015年度：	食数	16,945食	特別食	3,495食	栄養指導件数	58件
2016年度：	食数	23,980食	特別食	3,878食	栄養指導件数	80件
2017年度：	食数	26,240食	特別食	3,598食	栄養指導件数	88件
2018年度：	食数	27,495食	特別食	4,459食	栄養指導件数	127件
2019年度：	食数	27,443食	特別食	5,415食	栄養指導件数	44件

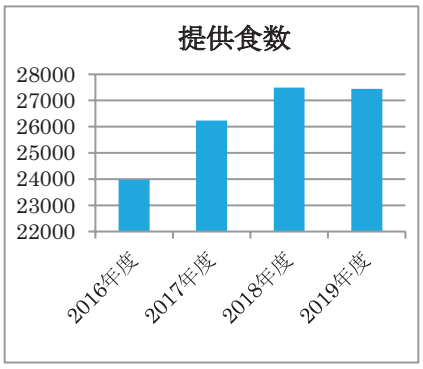
・食数は横ばいだが、特別食は年々増加。指導件数は管理栄養士1名の産休・育休と、人員の入れ替わりにより、実働人数が減ったため、激減。
・回復期リハビリテーション病棟において、リハビリテーション総合実施計画書の栄養項目作成は全員分実施。
・アレルギー対象患者のインシデント0件達成。
・栄養指導の時間が確保できず、件数が激減してしまったが、昼食のミールラウンド・患者への丁寧な対応・スタッフとの情報共有においては、各部署の協力の下、日々実施することができ、個々に合わせた食事の提供が実現できた。今後の課題は、特別食に合わせて栄養指導の件数も上げていくための人材確保と育成だと考える。

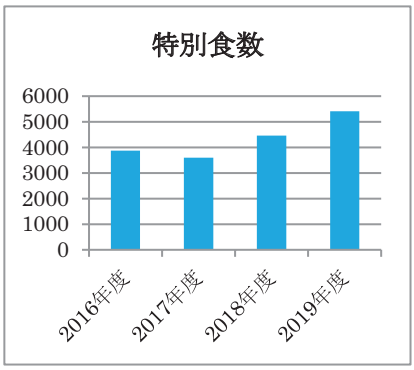
【参加研修】

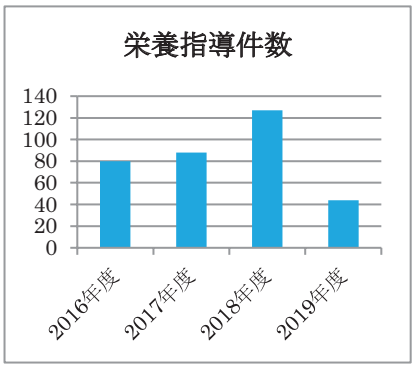
・リハ栄養フォーラム2019
・回復期リハビリテーション栄養士研修会

【その他】

・上記の関連推移







事務部門

記載者：吉田　潤

総務課	課長：新谷　圭由		
医事課	課長：林　亮治	係長：下村　由香里	主任：早川　佳克
システム管理課	課長：髙田　賢悟		
地域医療連携係	係長：鈴鹿　三郎		

［方針］

『病院運営への参画意識を強く持ち、多職種協働への事務的アプローチを図る』

［主な活動］

事務部門の直近3年間の目標は、1年目を「変えることを考える年度」、2年目を「変えたものを充実させる年度」、そして3年目となる2019年度を「充実したものを次々と実践させる年度」と考えて目標を定めてきた。具体的には、まず自らの弱みを知りそれを強みに変えていく（変革）こと、強い「個」を作り、それを繋げていくことで「線」にしていく（構築）こと、積極的にアプローチしていく（参画・実行）ことを意識した。本年度はアプローチの年度であり、各部署がそれぞれに実践すべく目標をもとに活動を行ってきた。総務課においては給与システムの構築とスムーズな運用、病院機能評価での改善項目の提案や院内向けコラムの発信など、医事課においては診療報酬請求に係る対策等の院内伝達や、患者満足度を向上させるためのサービス向上など、システム管理課においては法人全体に向けたシステム構築の提案と実行など、地域医療連携係においては前方支援体制の充実や後方支援の質向上などをメイン課題として活動を行った。

各課人員体制についても見直しを行った。回復期リハビリテーション病棟でのチーム制をより強化するため、MSW（社会福祉士）2名病棟配属とし、地域医療連携課の人員を縮小して回復期病棟との役割分担を行った。またシステム管理課の人員を1名増員し、老健や在宅関連部門を含め、法人全体の管理体制の構築を手掛ける事とした。地域医療連携課の規模縮小による活動については、今後も見直しは必要となるが、これまで行ってきた事務作業を見直し、作業が効率化された部分を前方・後方支援の強化に繋げる事ができた。システム管理課は、老健のHISリプレイスや居宅介護支援事業所の移転、在宅関連部門のPC入れ替えなど、今年度は大きなイベントが続いたが、2名体制により滞る事なく業務遂行ができた。システムネットワークを広げた事により、今後はより一層のセキュリティー管理の必要性が出てくるが、物理的に繋がることで増えた可能性を業務に最大限発揮できるよう提案を行っていきたい。

前年度に受審した病院機能評価で業務やマニュアル等の整理を行い、改善点や継続が必要な業務などが明確化されたので、今年度の取り組みへスムーズに移すことができた。次年度もPDCAを回しながら継続して取り組んでいきたい。

2020年度の診療報酬改定に関しては、COVID-19感染拡大の影響で情報収取には苦労したが、経営への大きな影響なく乗り越えることができた。次年度はCOVID-19との闘いになると予想されるので、環境の変化に対応し、状況を見極めた行動がとれるよう努めたい。

医事課

部　門：事務部門
記載者：林　亮治

課長：林　亮治　　係長：下村　由香里　　主任：早川　佳克

[年間目標]

『地域に密着した病院の顔となる医事課へ』

[主な活動]

今年度も医事課が中心となり、外来患者満足度アンケートを実施した。事務職員の言葉使いや対応について「非常に良い」評価が前年比+18%、全体の約95%において窓口の対応が良いという評価を得ることができた。前年度から重点目標としており、窓口が混雑した時こそ落ち着いて応対し、丁寧さ・挨拶・声掛けなど基本的な接遇を常に意識した。入院患者への面会対応もしっかりと応対できた。来年度も患者に満足してもらえる窓口サービスを継続して心がけていく。

診療報酬請求の精度向上に向けて、前年同様に査定対策を行った。手術手技は、前年と同様の内容であったが、レセプトの査定金額は前年比約50%の減少となった。今後も査定の傾向分析と対策を行っていく。今年度の診療報酬改定説明会は、新型コロナウイルスの影響で軒並み中止となったため、配信されたWEB動画や配布資料をもとに当院に影響する内容を確認し、院内向けの診療報酬改定に関する情報発信を行った。来期は課内の勉強会を開催し、さらなる個々のレベルアップを図りたい。

課内の業務分担とフォロー体制の構築について、診断書依頼や医療費助成制度に係る書類件数が例年より増加したが、クラークとの連携体制を工夫してうまく対応することができた。しかし、予定していた外来・入院業務のフォロー体制が予定よりも遅れてしまった。来期の課題として継続してフォロー体制の整備を行う。

医療安全活動としては、インシデント・アクシデント件数の削減を目指した。インシデント発生傾向から、日常的に繰り返し行う作業でヒューマンエラーが発生しないように意見を出し合い実行した。この結果、インシデント発生件数は前年比42%の減少となった。また、多忙な時間帯での発生が多いことから、保険証確認や紹介状・画像CD読み込みなど、忙しい時ほど念入りに確認作業を行なうことによって、より一層正確な作業を意識していく。

未収金対策の徹底については、発生時点で支払い誓約書の提出を求めるよう、課内で徹底するようにした。また、定期的な電話連絡や督促状の郵送など、未収金回収マニュアルに沿って実行した。未収金管理システムをうまく活用することで、今年度はほぼ未収金は発生しなかった。次年度も継続して未収金対策を徹底していく。

前年と同様の外来・入院患者数となったが、安定した患者対応を行うことができた。重点的に接遇の見直しを行った結果、良い評価となった。年々厳しくなるレセプト査定に対して迅速に対応し、安定した収益確保に貢献できた。来年度は施設基準の管理予測や事務効率の見直しなどに取り組んでいきたい。

地域医療連携係

部　門：事務部門
記載者：鈴鹿　三郎

係長：鈴鹿　三郎

[年間目標]

『入退院支援業務を通じて病院経営に貢献する』

[主な活動]

2019年度は2018年度と比較し3名減の人員体制となり、地域医療連携課から地域医療連携係と部署規模を縮小した活動となった。

年度当初に取り組んだ事として、これまで行なっていた事務作業のあり方を見直し、可能な限り電子カルテ内で集計や作業が行えるように工夫した。システム管理課・医事課の協力も得て地域医療連携係3名が誰でも各種集計が行える様なシステム構築を行なう事ができた。結果、短時間で適宜紹介元データ等の集計を提示できることとなった。

診療情報提供書の管理の中では特に返書管理に力を入れた。整形外科患者の術前検査や回復期リハビリテーション病棟患者の他科受診時など地域医療連携係から先方医療機関に電話をかけ、診療情報等のFAX、郵送を実施。その後、エクセル上で返書管理を行なった。地域医療連携係が関わった返書管理としては2018年度が75件/年であったのに対し、2019年度は208件/年と大幅に増加した。よって医療管理がより適切に行われる一助となったと考える。

回復期リハビリテーション病棟から退院した患者（家族）と介護保険利用者の場合はケアマネジャーにも退院後のフォローアップシート送付を実施した。挙った意見は回復期リハビリテーション病棟役職者を通じて病棟担当者へ周知した。その結果、退院前カンファレンスや家屋評価のあり方を見なすきっかけとなった。

稼働率と施設基準維持に対する取り組みとして、整形外科病棟紹介元データ集計や返書管理、挨拶廻り等を実施した。また、回復期リハビリテーション病棟に関係する地域連携懇話会へ看護部スタッフも交え参加し情報交換を密に行える関係作りを行なった。

入院時支援加算算定に向けては、協力医療機関からの情報提供も得て院内担当者とミーティングを重ね患者にとって（拘束時間の）負担ができるだけ少ない流れで取り組めるようにした。今後はアセスメント能力の向上し成果のある支援を目指したい。

部署の目標としては掲げていなかったが、病院機能評価で指摘を受けた「地域への還元」を実践するべく、地域ケア会議にも参加した。地域の声は事務部の会議や企画広報委員会を通じて吸い上げ、2020年度の病院活動へつなげた。

その他、外部研修参加後に伝達研修を毎回実施した。また、病棟向けに社会資源の勉強会を開催、院内向けに成年後見人制度研修会の企画運営も実施した。

・年間返書管理実施件数　208件（地域医療連携係を通じた件数）昨年対比277％

システム管理課

部　門：事務部門
記載者　髙田　賢悟

課長：髙田　賢悟

[年間目標]

『課内の業務体制の確立・法人全体のシステムに関する提案と責任ある実行』

[主な活動]

2019年度は新規入職者含む2人体制に変更し、法人全体のシステム案件に対する窓口を広げ、速さと確実性を両立した対応の実現に努めた。結果としてシステム案件数は前年度比：159％の1672件、完了率は97.2％となった。また、人員が増加したことにより、法人内の新規システム導入や更新を積極的に行うことができた。

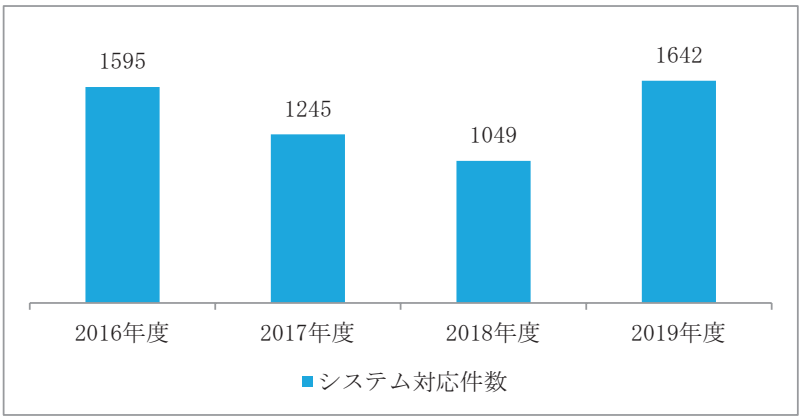
在宅部門では保守期限切れに伴う、介護ソフトのサーバーおよびPCの入れ替えを行った。また居宅介護支援事業所の移転に伴う、ネットワーク環境の構築、PC・周辺機器の設置を行った。業者と調整しながら円滑に導入を行うことができた反面、VPN接続の不具合や回線の不具合について、問題を発見することに時間がかかったことが課題である。今後は、問題発見および解決能力を高め、業務に活かせるように心がけたい。

老人介護保健施設では、病院と同じベンダーの電子カルテシステムを導入した。導入作業を進めるにあたり、現運用の確認や端末配置および部署調整等に苦慮したが、現場スタッフおよびシステムベンダーの協力により、大きな問題もなく稼働することができた。今後も老人保健施設からのシステムに関する案件に対応し、病院と同サーバーで使用している強みを活かして、様々な場面での連携強化に努めたい。

2020年度の診療報酬改定へのシステム対応はCOVID19による説明会等の中止により、情報収集に苦慮したが、例年より能動的に情報を集めることに集中したことで、事前情報からシステム改修の範囲等を早い段階で理解することができた。そしてシステムベンダーからの情報を元に更新作業を行い、大きな問題なくシステム運用ができている。

次年度はCOVID19の影響によって変化する今後の働き方に対して、積極的にICT活用を提案したい。医療だけではなく、様々な分野のITに目を向け、世間から遅れをとらないように視野を広げていきたい。そして、今年度のシステム案件に対するパフォーマンスを維持しながら、より専門性を高めていきたい。

・年間院内依頼案件の推移（件）



総務課

部　門：事務部門
記載者：新谷　圭由

課長：新谷　圭由

[年間目標]

『業務効率、改善を通して業務体制の確立及び安定した部署運営を目指す』

[主な活動]

今年度は昨年からの継続課題として、給与システムの最終調整と病院機能評価での指摘項目の改善をメイン課題としてスタートした。また、社会全体が働き方改革の本格的なスタートの年度でもあった事から、時間外の削減及び有給の取得向上を意識して実践する様にした。

給与システムは、賞与、算定基礎、年末調整、法定調書の調整が昨年から持ち越しとなっていたため、8月頃から毎月1回程度、ベンダーとの調整を行うようにした。最終的に、大きな問題もなく順調に稼働し、給与関係の処理及び申告関係全体の作業効率改善に繋がった。今後も作業効率の向上、的確な管理ができるよう「人事・勤怠・給与」システムの見直しを随時図っていきたい。

病院機能評価の改善項目については、4項目の改善を目標にし、うち1項目（夜間当直事務マニュアル）はほぼ完成し、内1項目（備蓄品）は、医療安全委員会にも意見を伺いながら調整していたが難航し未完となっている。残りの2項目については未着手で終わってしまった。年度をまたぐ結果となってしまったが、残項目については次年度に持ち越して取り組んでいく。

時間外削減については、対昨年77.3％（629/814時間）の削減ができた。これは給与システム変更による作業効率の向上及び給与処理における業務分担の見直しが起因している。また、昨年度ほど課内における変化（イベント毎や人員体制）が少なったことも一因である。

自部署の有給取得については、対昨年149.2％の取得ができた。労務管理を担っている部署として法改正による5日間の取得義務は当然クリアしており、全体と比較しても概ね平均的な取得率となっている（全体平均61.3％、総務課66.8％）。ただし部署間では取得率に偏りがあるので、全体的に取得率が上昇するような環境整備や仕組みを衛生委員会とも情報を共有しながら今後取り入れていく必要がある。

その他の取組みとして、院内への情報発信を年4回行った。内容は労務関係（働き方改革、勤怠）、設備関係（停電）、福利厚生関係（会員優待）で、職員にあまり認知されていない内容を主に発信した。またこれをすることで課内での業務整理にも繋がったため、次年度以降も継続して発信し、院内へも積極的にアプローチしていく。

今年度の目標管理の達成度合いは8割程度であり概ね目標はクリアできた年であった。次年度以降は、管理体制を強化する事を念頭に「人事・勤怠・給与」システムの活用の幅を広げる事、これまで、経理財務に関する目標が無かったので経営管理に活用できる指標の作成を中心に取り組んでいきたい。

訪問リハビリテーション

記載者：森本　雅之

科長補佐：森本　雅之　　主任：小林　剛

[年間目標]

1. 訪問リハビリテーション件数の安定化（年度末までに月200件以上）
2. 訪問リハビリテーション業務の運用の確立（マニュアル改定）
3. カンファレンスおよびサービス担当者会議への参画（参加率80％以上）
4. 介護保険分野における知識技術の向上（研修会への参加）
5. 人材育成（報告会を回復期リハビリテーション病棟の全体会議で実施）
6. 回復期リハビリテーション病棟から訪問リハビリテーションを開始（20名以上）

[主な活動]

2019年は6月からOTスタッフを変更し、平日週5日のうち一日7枠、週35枠体制から一日最大12枠、週60枠に拡大した。

1. 訪問リハビリテーション件数の安定化（年度末までに月200件以上）

年度開始時は100件に満たなかったが、キャンセル率の減少のため振替の徹底、希望や必要に応じて追加訪問を実施し9月以降は100件以上を維持することができた。しかし、目標としていた200件には至らなかった（表1）。要因として回復期リハビリテーション病棟の単位取得援助対応と、同法人内へ人材支援として出向したことで、新規利用者受け入れを控えていたことが挙げられる。

2. 訪問リハビリテーション業務の運用の確立（マニュアル改定）

今年度は安全なサービス提供に重視したマニュアルの改定を実施した。熱中症予防における屋外歩行練習の指標を決め利用者やご家族にも理解を深めてもらえるように案内した。年度末の新型コロナウイルス対策においては緊急事態宣言よりも前にマニュアルを整備し運用することが出来た。このマニュアルは老人保健施設がくさい・訪問看護ステーションがくさいの訪問リハビリテーション部門と連携して、統一した内容で運用した。

3. カンファレンスおよびサービス担当者会議への参画（参加率80％以上）

スケジュール調整や代行業務を実施し参加率は95％であった。

4. 介護保険分野における知識技術の向上（研修会への参加）

全国、地方の研修会に参加した。学会発表（リハビリテーション・ケア合同研究大会，京都リハビリテーション医学会）も実施した。

5. 人材育成（報告会を回復期リハビリテーション病棟の全体会議で実施）

回復期リハビリテーション病棟を退院した訪問リハビリテーションの利用者の経過報告を前年度から継続して病棟会にて実施した。回復期リハビリテーション病棟スタッフが退院患者の生活状況をイメージできるように努め、また、訪問リハビリテーションの必要性に対する理解を深める目的で継続していく。

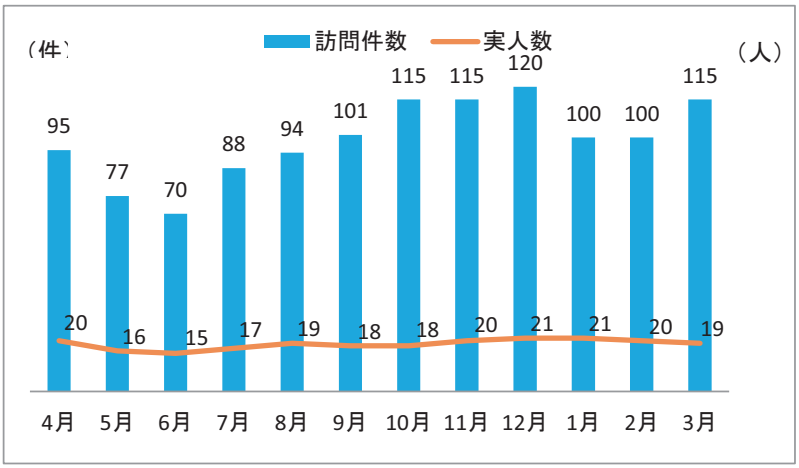
6. 回復期リハビリテーション病棟から訪問リハビリテーションを開始（20名以上）

毎月候補者の選定を回復期リハビリテーション病棟スタッフの協力の下に実施した。回復期病棟からの新規利用者は14名であった。今後も回復期リハビリテーション病棟スタッフに退院後に訪問リハビリテーション新規利用の検討をしてもらえるよう働きかけを継続していく。

訪問リハビリテーション統計

	介護保険				医療保険			合計			
	実人数	新規利用	訪問件数	実施回数	Ave	実人数	訪問件数	実施回数	実人数	訪問件数	実施回数
4月	20	1	95	233	2992.5	0	0	0	20	95	233
5月	16	0	77	164	3251.4	0	0	0	16	77	164
6月	15	0	70	148	3214.7	0	0	0	15	70	148
7月	17	3	88	184	3135.9	0	0	0	17	88	184
8月	19	3	94	199	3279.7	0	0	0	19	94	199
9月	18	4	101	214	3431.4	0	0	0	18	101	214
10月	18	1	115	249	3354.0	0	0	0	18	115	249
11月	20	1	115	252	3284.5	0	0	0	20	115	252
12月	21	1	120	259	3129.6	0	0	0	21	120	259
1月	21	1	100	220	3199.0	0	0	0	21	100	220
2月	20	1	100	243	3000.2	0	0	0	20	100	243
3月	19	0	115	269	2908.0	0	0	0	19	115	269
合計	224	16	1190	2634	3173.4	0	0	0	224	1190	2634
									通年平均	99.2	219.5
									上半期	87.5	190.3
									下半期	110.8	248.7

回復期からの新規開始　16名



医療管理安全部門・医療安全管理委員会

記載者：山田　美香

委員長：上島圭一郎　　副委員長：山田　美香
竹村　淳一、細越万里子、中井登代美（医薬品安全管理者）、吉田　潤、中尾　元美、
新谷　圭由（医療ガス安全管理者）、中谷　道子（医療機器安全管理者）
吉川　友晴、早川　佳克、正生　拓海

[年間目標]

『患者の権利を尊重し安全な医療を提供する』

[主な活動]

インシデント報告書は医療安全活動の土台となり情報収集や早期の院内周知と再発防止に活用している。件数は487件でリハビリスケジュール管理や検体提出に関連した事例が改善した事で前年より報告件数が減少している。一番報告の多かった事例は124件の転倒・転落で、全患者に対し危険度を評価し予防策を立てて援助しているが4件治療を必要とした事例があった。今年度は報告の無かった部署からの報告が増え医局から6件の報告があった事は大きな収穫で今後フィードバックやPDCAサイクルを廻すことで安全文化の活性化につなげていきたい。

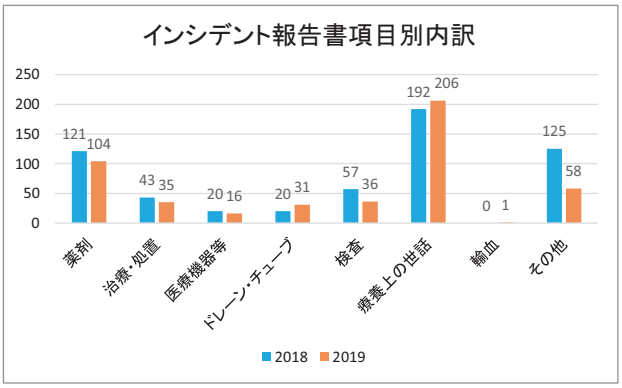
機能評価受審をきっかけに取り組んだ一つに検査結果の報告システムの構築がある。検査結果の報告が遅れた事がきっかけに報告体制の見直し、有所見を認めた時には速やかに主治医へ電子メールを部署には電話で報告するように改善できたことで治療につなげる業務改善ができた。

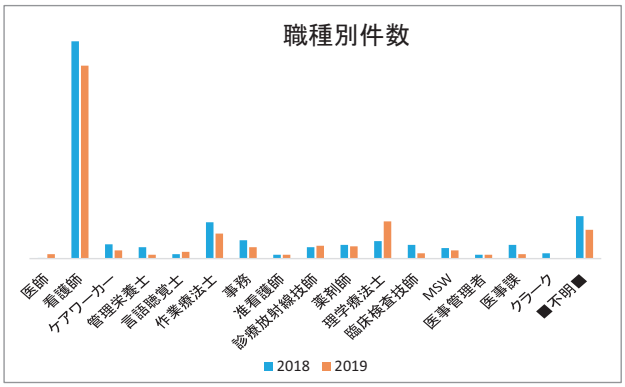
職員研修は『個人情報保護』と『急変対応のためのBLS研修』をテーマに開催した。法令遵守や急変時の対応といった重要なテーマを院内職員が講師となって研修を開催することができた。BLS研修は、急変を体験した職員の情報から自主制作した急変動画を視聴後模擬人形で実技訓練をした。動画は急変場面がイメージできる仕上がりとなった。受講後のアンケートでは平時からの心得がわかったと好評であり、専門職は部署の急変に備えた取り組みや、事務職員などの一般職は一人一人のスキルアップにつながったと期待する。

患者ご意見箱は、感謝の言葉や業務や接遇に対するご意見など76件頂いた。頂いたご意見は、対象部署で対策を検討しそれを委員会、全職員に共有している。このご意見を参考にして今年度は、トイレや浴室の手すりの設置、車いすの患者にも掲示物が見えるよう掲示物をまとめたファイルの設置等の環境改善をすることができた。

院外活動は『京都西部医療安全ネットワーク』に参加し他施設と関われる機会となり医療安全の動向や情報交換をして問題解決に役立てる事ができた。医療安全体制は、京都市立病院から地域連携シートを用いた訪問評価を受け、指摘を受けた改善点は今後の課題としていきたい。

今後も職員一人一人が、安全な医療の提供に向け取り組めるよう各部門の小委員会と協働し、医療安全体制の強化に努めていきたい。





院内感染防止対策委員会

記載者：細越万里子

委員長：上島圭一郎　　副委員長：細越万里子
構成員：久保　元則、谷田砂登美、加藤　友香、津野真奈美、中井登代美、佐々木理恵、
岩永　久乃、鈴木　理恵、上野　有佐、林　亮治、吉田　潤、竹村　淳一

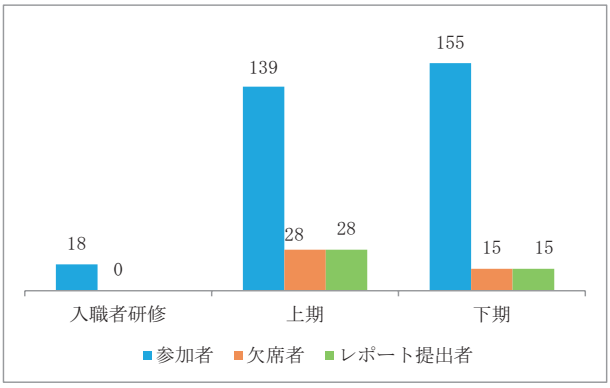
[年間目標]

『部署及び組織と横断的に関わり院内感染の発生防止に務める』

[主な活動]

・ICT活動：毎月委員会を開催し耐性菌の検出状況、院内の感染症発症状況の共有。
・感染ラウンドの実施：毎週月曜日15：30～16：00にICTメンバーの薬剤部、検査科、看護師と部署委員で環境ラウンドを実施した。
ラウンドチェックシートを活用しマニュアル遵守確認やPPEの装着手順、患者ゾーン、医療ゾーンの入退出時のタイミングで手指消毒ができているか観察を行った。改善点は部署で対策を立案し翌週のラウンドで実施の確認を行った。
擦式消毒剤の携帯者数は増加したが、1患者における使用量の増加はインフルエンザ流行期以外みられないため‘5moments‘を意識した手指衛生の遵守は今後も課題である。
・院内職員の教育・指導：4月新入職者研修、全職員対象に6月は「手指衛生ってどのタイミングでするの?」、12月は「こんな時あなたならどうしますか?全職員が正しく処理できる病院」汚物処理方法の計6回（上期3回・下期2回）開催した。参加人数は、グラフの通りであった。勤務の都合で欠席者に対しても課題レポート提出により参加率を上げることができた。
また「委員会便り」を年間4部発行し職員だけでなく患者や当院を利用される方向けに感染情報を掲示し啓蒙活動を実施した。
・ICT委員の知識向上目的の院外研修や学会参加：
2019/4/27日本感染管理ベストプラクティス‘Saizen’研修会第14回セミナー　細越
2019/7、11，1月感染対策担当者のためのセミナー第1～第3　細越
2019/7/13関西感染ファーラム　谷田、新田、岡田
2019/8/27　明日からケアに活かす感染症の基礎知識と看護　細越、津野
2019/11/30第20回インフェクションコントロールセミナーお悩み解決感染対策　細越
2020/1/22～1/23　2019年院内感染対策講習会：加藤・新田
2020/2/15～16第35回日本環境感染学会　谷田
・地域カンファレンスの参加：全4回
10/29「自院における環境ラウンドのありかた」を発表した。
・感染対策のためのサーベイランス：院内有熱者発生状況の推移や擦式消毒剤の使用量をサーベイランスした。次年度は抗生剤の使用状況を感染症発症状況と共にサーベイランスしていきたい。
・職員の安全管理と感染対策：HBワクチン接種は計17名に実施した。
全職員に対して麻疹・風疹抗体値のチェック、11月～12月にインフルエンザワクチン接種を実施した。
針刺し事故は、2件で医師のみであった。
2019年12月～2月のインフルエンザ罹患数は、計10名（職員、入院患者合わせて）であった。入院患者はそのうちの2名で昨年と比べ非常に少なく職員一人一人の感染防止に対する意識的な取り組みの成果と言える。
2020年2月よりCOVID-19の影響で衛生材料の購入数を増やし職員の出勤前体温測定及び健康観察を実施し院内感染防止に努めた。

院内研修開催件数と参加者数



院内教育委員会

記載者：竹村　淳一

委員長：前田　博士　　副委員長：竹村　淳一
構成員：細越　万里子、今井　千賀子、角田　公啓、相馬　寛人、森本　雅之、
山田　浩弓、新谷　圭由、沢田　光思郎（外部委員）

［主な活動］

院内教育委員会は、職員の知識・技術の向上を目的に活動をしており、部門横断型の研修を企画・開催をしている。各委員会とも連携し、必要な教育テーマを共有するように心掛けている。各委員会の研修計画を把握し、年間研修計画が適切になるようにスケジュールを管理し、職員が出来るだけ参加しやすい研修計画を策定することも院内教育委員会の役割となる（下記、2019年度に実施した部門横断型研修一覧を参照）。前年度から委員会メンバーは大きな変更がなかったため、研修方針やスケジュールを大きく変更することなく、前年度に実施したものをより充実した形で開催することができた。

2019年度は、指導職（主任・係長）の育成を強化する目的でコーチング・ティーチング研修を開催した。この研修は上期・下期に1回ずつ開催しており、上期研修で学んだことを下期研修までに、日常業務の中で実践し、その成果を研修参加者で共有するようにした。単発的な研修にならず、長期的な視点で取り組むことでより実践に活用できる内容になったと考える。

この他に、職員からの発案により『英会話サークル』を開催している。これは職員の語学力と交流を目的として企画し、初回は初級英会話講座として外部講師を招いて開催された（3ヶ月1クール、30名程度の職員が希望参加）。教育委員会としてはサークル活動までの事前準備として開催ルール策定や外部講師の選定・契約手続きなどで関わっている。また同じように、職員からの発案で法人合同の『業績発表会』も企画された。これは法人内の各事業所・部門における当該年度の活動と研究成果などを発表・共有するものである。残念ながら、業績発表会についてはCOVID-19の影響により中止となったが、今後も、職員からの「こんなのあったらいいのに」というアイデアを委員会では実現していきたいと考えている。

2020年度以降はCOVID-19影響が本格化している。普段の業務提供体制を維持することは最優先事項であるが、一方で職員の教育・育成環境を維持することは大きな課題である。集合研修やオンライン研修などの方法を再検討していくことになるだろう。院内教育委員会として、今後も職員のモチベーションに繋がる教育環境を整備していく。

2019年度　院内研修活動（部門横断型研修）

研修名	テーマ/目的	開催月	参加数	主催
新採用者研修	がくさい病院職員として，基礎的な知識を習得する	4月	18名	院内教育委員会
合同指導職研修（上期）	コーチング・ティーチング①	5月	29名	院内教育委員会 法人事務局
英会話サークル	初級英会話/職員の語学力と職員交流を目的として開催	6～9月	30名	院内教育委員会 サークル世話人会
新採用者フォローアップ研修	より良い病院にするために ～自分達ができること～	7月	17名	院内教育委員会
医療安全管理研修	個人情報保護法について	7月	138名	医療安全管理委員会
院内感染防止対策研修	感染管理の基本	8月	175名	院内感染防止対策委員会
合同管理職研修	ES調査結果からみる求められる上司の態度	9月	30名	院内教育委員会 法人事務局
中途採用者研修	がくさい病院職員として，必要な知識やスキルを養う	10月	5名	院内教育委員会
合同指導職研修（下期）	コーチング・ティーチング②	10月	29名	院内教育委員会 法人事務局
院内感染防止対策研修	汚物処理：こんな時、あなたならどうしますか？ ～全職員が正しく処理できる病院へ～	11月	142名	院内感染防止対策委員会
医療安全管理研修	BLS研修	2月	132名	医療安全管理委員会
合同管理職研修	目標管理について （COVID-19の影響により開催中止）	3月 予定	－	院内教育委員会 法人事務局
業績発表会	各部署，部門における当年度の事業活動や研究活動などを発表 （COVID-19の影響により開催中止）	3月 予定	－	院内教育委員会 法人事務局

※部門横断型研修で比較的規模の大きな研修を抜粋している

栄養管理委員会

記載者：中平　美紀

委員長：上島圭一郎　　副委員長：中平　美紀
構成員：吉田　幸世、山岸　理穂
　　給食委託責任者1名、給食委託栄養士1名

［年間目標］

『患者の栄養管理計画、給食に関することを討議・検討し、その効率的な推進を図る』

［活動内容］

多職種を構成員とし、栄養介入件数の確認、行事食の確認、嗜好調査等を参考にした献立の検討、各現場からの報告・提案・検討を行い、患者にとってより良い食事提供と環境改善に努めている。

【業務実績】

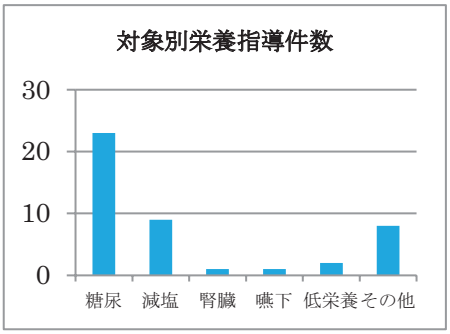
栄養指導実績

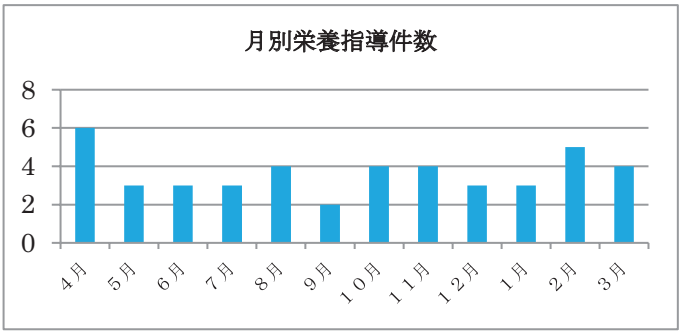
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	小計
糖　尿	4	1	2	3		2	2	2	1	1	4	1	23
減　塩	1	1	1		1		1	1	1	1	1		9
腎　臓							1						1
嚥　下									1				1
低栄養	1									1			2
その他		1			3			1				3	8
累　計	6	3	3	3	4	2	4	4	3	3	5	4	44

行事食：18回／年

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
松花堂弁当	新緑メニュー	水無月	七夕 祇園祭弁当 土用の丑の日	送り火	敬老の日	ハロウィン	紅葉弁当	冬至 クリスマス 大晦日	正月 開院記念日	節分 バレンタイン	ひなまつり

嗜好調査3回／年





褥瘡防止対策委員会

記載者：吉田　幸世

委員長：久保　元則　　副委員長：吉田　幸世
構成員：山岸　理穂、中平　美紀、馬淵　拓実、皮膚科非常勤医師

［年間目標］

『院内の褥瘡発生状況の把握・報告を行い褥瘡管理対策を実施する』

【活動内容】

前年度に担当頂いた根本医師に変わり、本年度から久保医師が委員長となった。また、前年度に引き続きオブザーバーとして三笑堂担当者の参加も継続した。

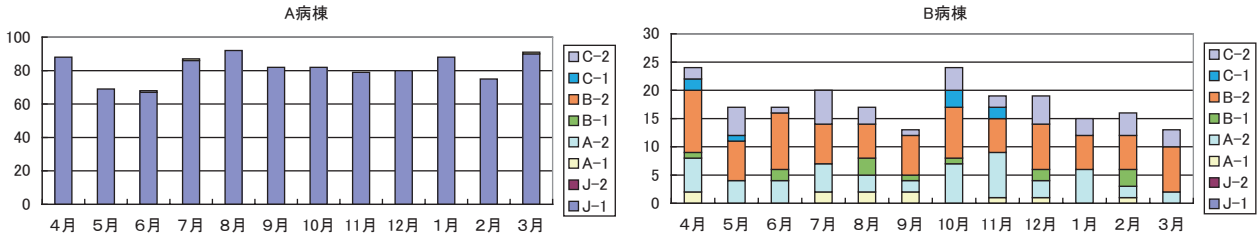
月1回の定例会議では、月毎集計の入院時褥瘡診療計画書作成および評価者の報告、褥瘡の発生状況と褥瘡患者の状況報告、栄養士からの栄養管理患者の報告を実施。入院時の褥瘡リスク判定スケールとしての《OHスケール》運用を本年度より開始し、入院時の看護記録として各病棟に周知した。運用は継続的に行なえており大きな混乱なく記載されている。

勉強会としては、毎年業者に依頼して開催していたオムツの勉強会が、日程調整が行いきれずに実施できなかったが、ポジショニングクッションの勉強回や栄養補助食品の勉強会などは予定通りに実施できた。

【課題】

勉強会の内容としては、現状の当院で必要となる項目をもう一度見直していく事も必要。オムツやポジショニングクッションについては、回復期病棟としては必要な知識であるが、例年整形病棟からの参加が少人数であり、興味や知識を深める機会となっていない。両病棟ともに業務に活かせる内容を再度考え、提案していく必要があると考えている。

病棟別　月別の入院患者における自立度B1 ～ C2の割合



診療録管理委員会 兼 システム委員会

記載者　髙田　賢悟

委員長：上島圭一郎　　副委員長：髙田　賢悟
構成員：日野　学、吉田　純、光岡　麻里、岡田　尚子、中尾　元美、礒島　梓、
公文代真由子、恒吉　克也、吉田　潤、下村由香里、石田　尚己、
中川　裕子、平河　雄太

[年間目標]

『診療録の適切な管理・電子カルテオーダリングシステムの適正運用とシステム活用』

[主な活動]

診療録管理・システム委員会は、診療録および同意書等の文書類の適切な管理、電子カルテシステム・インターネットPC環境等の適正な運用・管理・活用を目的に活動している。

今年度は、電子カルテシステムを通じた取組みが主体となった。

まずは、患者に関わる文書類の新規追加・同意書の控えのあり方についての見直し。

他医療機関に送付する診察申込用紙や検査依頼書において患者情報が自動的に反映されるように変更を行った。以前まではすべて患者情報含め、すべて手書きを行っていたが、その手間を省くことができた。また同意書の控えについては、患者に渡すものと、電子カルテシステム内に原本を取り込むものを整理した。新しく追加した文書や同意書についても控えを患者に渡すように運用を整理して実行した。

また、同法人内の老人保健施設が、病院内設置のサーバーを使用して電子カルテシステムを稼働した。法人内での情報共有や伝達などが同ネットワークのパソコンで行えるようになり便利になった反面、病院の電子カルテシステムへ、少なからず影響を及ぼした。具体的には、従来は画面に出ていなかった施設名の表示、メールの宛先（グループ）が増えて戸惑うなど、ある程度の影響は想定していたものの、予期せぬ事象が起こった。これに対して、委員会を問題集約の場として活用し、解決することができた。

さらに、新入職員の入職時研修で行う電子カルテおよび院内システムの説明について内容の更新を行った。今年度は電子カルテシステムを現場で使用している職員の意見等を集め、長期署名システムの説明・電子カルテシステムの操作説明を追加した。システムの更新や運用の変更などが行われるごとに変えていかなければならないものなので、今後も定期的な見直しを図るようにしていく。

次年度は委員会を通じて積極的にICTの活用や電子カルテシステムの使い方等を発信していきたい。また個人情報保護やセキュリティについても積極的に周知を行っていきたい。

＜新規文書＞
食事訓練代行表
PT申し送りシート
検査申込書兼診療情報提供書
訪問リハ依頼票
紹介患者様事前予約申込FAX用紙
事前診察申込書（初診）
嚥下造影検査同意書
MRI検査依頼書
CT検査依頼書
退院に向けての整理リスト
退院前カンファレンス用紙
日整会症例レジストリ同意書
差額室料同意書
個室減免用紙

企画広報委員会

記載者：鈴鹿　三郎

委員長：吉田　潤　　副委員長：鈴鹿　三郎
道場　雅世、下村　由香里、福田　素江、下谷　聡、浦田　雄史、川口　菜々子
向坂　亜友美、中村　美樹子、平河　雄太、水谷　幸奈

[年間目標]

『がくさい病院の活動を地域に広報する』

[主な活動]

◆広報誌発刊について

今年度は内容量を12ページから、6ページ冊子へと変更した。その結果、手に取って頂きやすくなり、外来患者が診察待ちに閲覧する機会が増え、「読みやすい」「持ち帰りやすい」と好評を得ることができた。また、これまで広報誌を配布、郵送していた配布先を拡大し、在宅サービス関係機関へも配布することとした。広報誌の発刊は、年2回を目標として行っている。日常業務の傍らでの編集作業は、委員にもなかなか負担のかかるものではあるが、少しでも病院活動が様々な場所に伝わるよう工夫して継続していきたい。

◆公益事業の開催について

本年度の『がくさい健康塾』は、京都府立医科大学大学院医学研究科リハビリテーション医学　三上靖夫教授を講師に招き、「いつまでも元気で暮らすために～宇宙飛行士から学ぶ秘訣～」というテーマで開催し、150名の参加を得た。参加者へのアンケート調査結果から、「開催回数を増やして欲しい」などというご希望もいただいており、今後の課題でもあると捉えている。

◆新規取組み活動について

本年度より、がくさい病院の取り組みが、近隣地域にもより伝わるよう、地域連携係職員による地域ケア会議参加活動を開始した。

活動の中、がくさい病院の取り組みがまだまだ紹介し切れていない現状を知ることができ、また、近隣地域向けの健康講座の開催依頼の声を聞くことができた。近隣地域向けの広報は、病院全体としての課題として捉え、次年度へ申し送ることとなった。

◆SNSによる広報活動について

Facebookは、学会参加記事、研修会開催記事、クラブ活動記事を中心に、年間34件の記事を掲載し、平均リーチ数は356件となった。

広報委員会がFacebookに新規投稿した際は、リアルタイムに職員へ情報が伝わるよう、全職員へ向けてメール連絡を行うようにした。その結果、学会等に参加する職員は、積極的にFacebook用の記事作成に取り組んでくれるという効果も現れた。

Facebookやホームページへのアクセス解析からみると、当院へリクルート活動する学生の大半が閲覧しているという結果が現れている。SNSやホームページでの広報活動は、今後より一層委員会での取り組みを充実させる必要があると感じている。

・年間Facebook掲載件数34件（平均リーチ件数356件）

◆病院広報誌『がくさいWatch』2019年度の発刊分は以下の通り

Volume.04（2019.05）

Volume.05（2019.10）

衛生管理委員会

記載者：竹村　淳一

委員長：竹村　淳一
委　員：上島圭一郎（病院長）、松橋　寛子、田邊千菜美、新川　義憲、山岸　ゆかり、野田　宏子、森島　正樹医師（産業医）

[主な活動]

衛生管理委員会は、一般財団法人京都地域医療学際研究所 衛生管理規程第5条に基づき設置し、職員の健康管理の適正並びに職場環境に関する調査改善を図ることを目的として活動している。主な活動内容として、①職員の健康障害を防止するための基本となるべき対策に関すること、②職員の健康の保持増進を図るための基本となるべき対策に関すること、③労働災害の原因及び再発防止対策で衛生に係るものに関すること、④衛生に関する規程の作成に関することである。

2019年度の大きな取り組みとして『職員時間外意識調査アンケート』を9月に実施した（アンケート結果抜粋は次頁参照）。このアンケートにより、様々な職員意識が確認されたが、特に時間外申請をせずに病院内で居残り若しくは業務をしている職員がいることが課題として浮き彫りになった。原因は、職員自身の意識や時間外を申請したくてもできないような因習など様々であるが、委員会としてはアンケート結果を法人運営会議へ報告するとともに、各部署長へアンケート結果を公表し、フレックスタイム制度などを提案するなどをして改善の働き掛けをした。36協定に違反するような時間外業務をしている職員はほとんど居ないものの、職員一人ひとり或いは部署ごと（職種ごと）で時間外業務に対する意識に違いがあることから継続して啓蒙活動をしていく。

職員から職場環境と患者サービス改善の意見を募集している『職員意見箱』には年間12件の意見が投函された。意見されたもののなかで職場環境に関わるものについては出来るだけ改善をしている。前年度よりも投函された意見が減少しているので、意見を出しやすい工夫が必要と考えている。

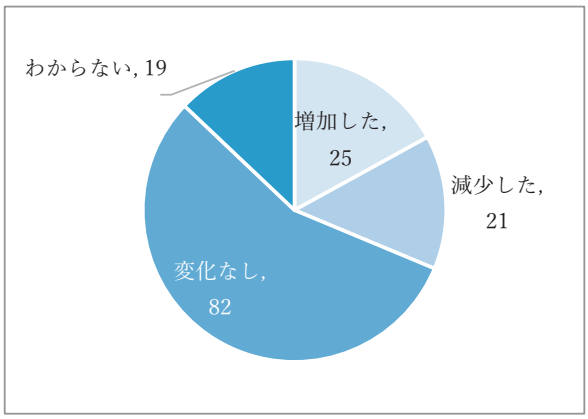
2020年度はCOVID-19の影響が本格化している。現時点では、職員や患者に陽性者は発生していない（7月20日現在）が、職員における感染防止対応のストレスは相当溜まっていると推測する。衛生管理員会としては、過度なストレスを抱え込んでしまう職員がいた場合の対応を検討することが2020年度の大きな課題となっている。

職員時間外意識調査アンケート集計【病院全体】

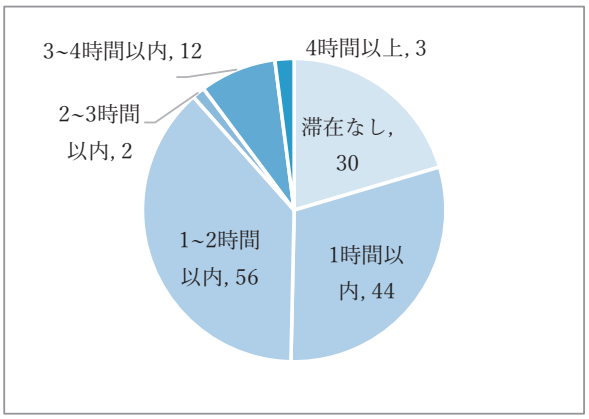
2019年9月4日（アンケート提出期限9月14日）

	配布数	回収数	回収率
がくさい病院	150	147	98.0%

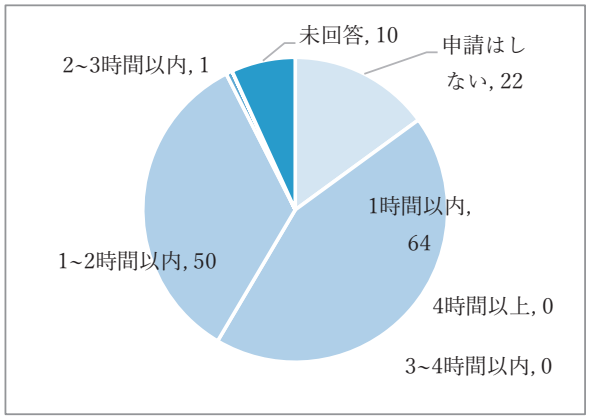
① この半年間における時間外の変化について



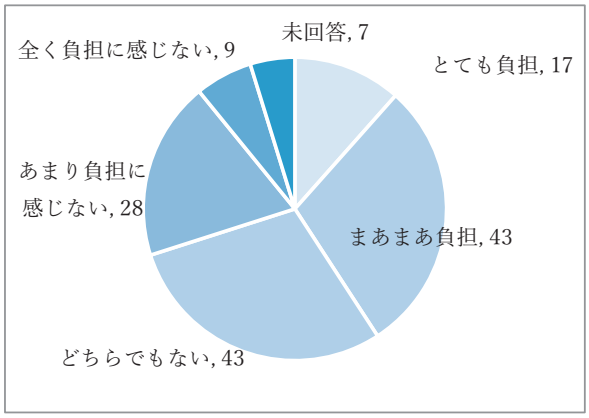
② 就業時間終了後の職場滞在時間について



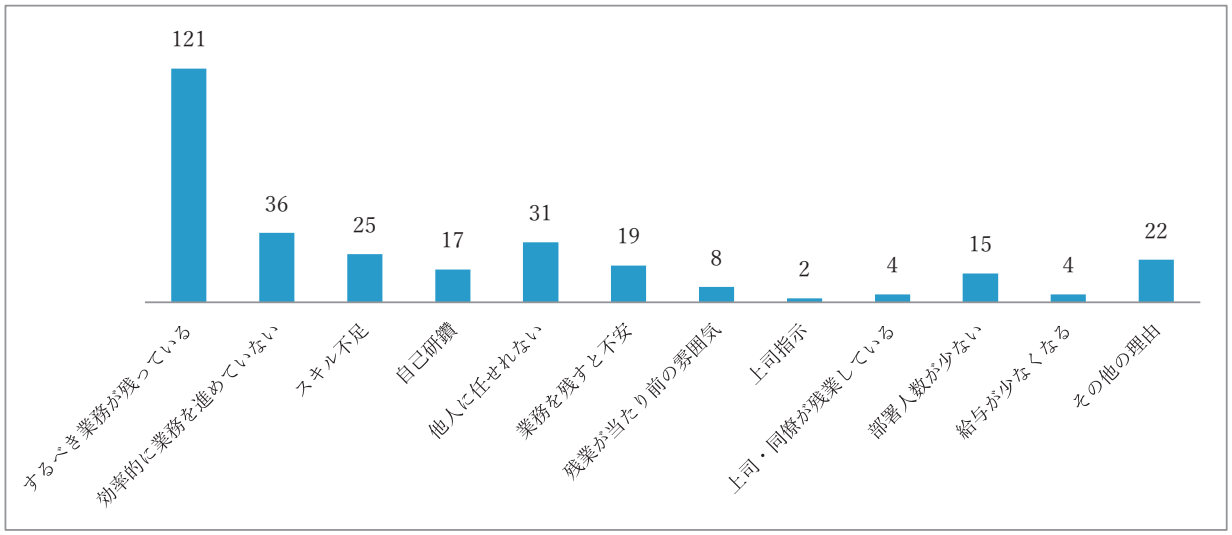
③　②のうち残業申請時間について



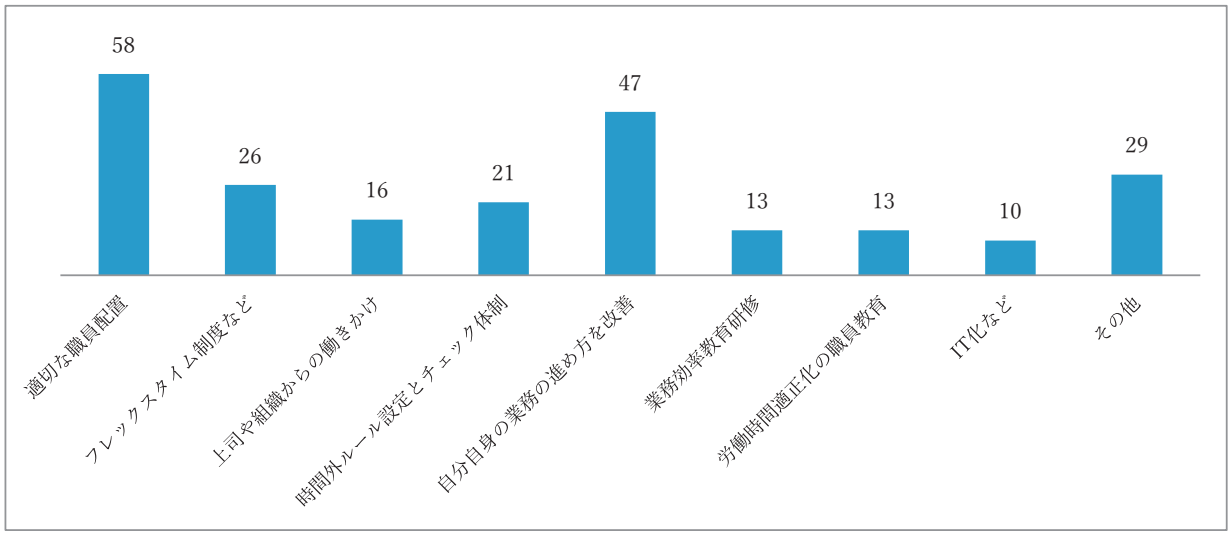
④　残業の負担感について



⑤　残業の理由について



⑥　時間外解消の対策案



倫理コンサルテーションチーム

記載者　細越万里子

委員長：細越万里子
構成員：角田　公啓、中尾　元美、吉田　幸世、今井千賀子、鈴木貴美子、谷田砂登美、
山田　美香、岩永　久乃、竹村　淳一、沢田光思郎（外部委員）、
松村　優子（外部委員）

［主な活動］

現場における臨床倫理について体制強化のため2019年より臨床倫理コンサルテーションチーム（以下ECT）を発足した。

2ヶ月毎の奇数月に検討会を開催し、偶数月は委員会員と事例の振り返りを行った。

京都市立病院がん認定看護師の松村優子先生を外部委員として、事例検討会の指導・助言を頂いた。

構成員は、倫理的な課題を考える機会が多い看護職、療法士で構成した。

検討方法は、臨床でモヤモヤする事を一人で抱えこまず多職種で定型的なツールを使って行った。医療者の間で立場の違いや価値観の違いから様々な問題が発生することに気づき，それを分析して、関係者が納得できる解決策を模索し患者ケアの向上に努め組織の倫理観を高める機会となった。

2019年度は、3回開催した。

倫理事例検討会一覧

●2019/7/18　17：30～18：30　テーマ：治療選択後における患者の迷い
参加者：吉川（放）、上島・下村（医師）、竹村、外来入江（看護師）、Ａ病棟 今井（看護師）、
Ｂ病棟 中尾（看護師）、馬渕（作業療法士）、ファシリテーター松村、沢田、鈴木、細越

●2019/9/19　17：30～18：30　テーマ：意思決定の表出が曖昧な患者に対してミトン装着行為の選択の妥当性
参加者：阿部（看護師）、大久保（看護師）、向坂（ＭＳＷ）、前田（医師）、佐織（理学療法士）三好（言語聴覚士）、沢田、細越、松村

●2019/1/16　17：30～18：30　テーマ：病状による混乱や物盗られ妄想に伴い、治療拒否から衰弱死に至ったケース
参加者：上島、久保（医師）、四方（作業療法士）、太田垣（理学療法士）、東（言語聴覚士）長野（看護師）、佐野（ＭＳＷ）松村、鈴木、細越（看護師）

■2019/12/23　17：30～18：00 「倫理って何？」
参加者：看護教育委員会共同企画　Ａ・Ｂ・外来手術室看護職対象　14名参加

院外研修・学会参加

第31回日本生命倫理学会「病院と地域との交流を促す倫理カンファレンスへの誘い」

日本看護倫理学会第12回「格差社会の中で看護倫理を考える」

病院機能評価委員会

記載者：竹村　淳一

委員長：上島圭一郎　　副委員長：竹村　淳一
構成員：相馬　寛人、鈴木貴美子、山岸　理穂、入江　麻衣、中尾　元美、吉田　幸世、長野　匡洋、浦田　雄史、馬淵　拓実、山田　浩弓、髙田　賢悟

［主な活動］

当院は、2019年6月に公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価（リハビリテーション病院3rdG:Ver2.0及び付加機能評価リハビリテーション機能（回復期）V3.0）の認定を取得した。これは当院の提供する医療機能が第三者機関により一定の水準を満たしていると認められたものである。

当該委員会は、医療機関に必要とされる機能の維持・向上のために、部門横断的な業務改善を促進させることと、病院機能評価項目（以下、評価項目）の内容や考え方を職員に広く周知することを目的として設置された（2019年10月）。当院が更に良い病院となるためには、現在の上層部が指示するトップダウン型の業務改善提案のほかに、今後は職員からボトムアップする業務改善提案が必要であり、当該委員会は、より現場目線での業務改善を提案する窓口でありたいと考えている。

当該委員会発足以降の活動は、委員会メンバーが評価項目とその考え方を知ることから始めることにした。病院機能評価受審の際は、1年前からワーキンググループ（以下、WG）を組織し受審準備をしたが、WGに所属しなかった職員は、評価項目の内容や考え方の周知が不十分であったためである。次に、評価項目の知識を得たうえで、委員会メンバーが自身の目線で、各部署・委員会の業務について考察し改善点を提案してもらった。その提案内容が適切であるかを当該委員会と部長会で協議し、必要な改善提案は対象部署・委員会へ通知された。WGでは気付くことができなかった具体的な新しい改善提案がなされたと考えている。

次年度以降の委員会活動として、院内ラウンドチェックや模擬サーベイ（survey）など業務チェック体制を構築したいと考えている。特に各種委員会機能が適切に機能しているかを客観的な視点で評価する仕組みが必要である。病院機能評価委員会は、そのような仕組みを支える委員会として病院機能の維持・向上を目指したいと考えている。

学会発表実績

業績集　学会発表（医師）

演者名	演題名	学会名	場所	開催日
○前田　博士、伊藤　慎英、井元　大介、村岡　慶裕、横関　恵美、大橋　鈴世、沢田光思郎、根本　玲、久保　元則、三上　靖夫、久保　俊一	回復期脳卒中片麻痺患者に対して病棟自主訓練に随意運動介助電気刺激装具を使用した経験	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会	兵庫県	6月
○小牧伸太郎、菅　寛之、日野　学	SPEEDTRAPを用いた前十字靭帯（ACL）再建術の検討	JOSKAS第11回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会	北海道	6月
○横関　恵美、前田　博士、久保　元則、根本　玲、沢田光思郎	骨折を契機に回復期リハビリテーション病棟に入院した後期高齢者の認知機能の経過	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会	兵庫県	6月
○上島圭一郎、後藤　毅、齊藤　正純、石田　雅史、林　成樹、山本　治基、藤岡　幹浩、久保　俊一	特発性大腿骨頭壊死症の病態と予防法の開発	第46回日本股関節学会学術集会	宮崎県	10月
○下村　征史、後藤　毅、齊藤　正純、上島圭一郎、林　成樹、大石　久雄、鎌田陽一郎、久保　俊一	Accolade TMZFとAccolade 2のステムの設置状態と術後中期成績の比較検討	第46回日本股関節学会学術集会	宮崎県	10月
○久保　元則、前田　博士、横関　恵美、沢田光思郎、三上　靖夫、久保　俊一	強直性脊椎増殖症による嚥下障害に対して嚥下機能改善手術とリハビリテーション治療よって改善した1例	第3回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会	静岡県	11月
○池田　巧、○前田　博士、榎本　卓真、西田　朋子、山﨑　泰志、菱川　法和、中川　恵介、蛭子　拓真、大橋　鈴世、奥田　求己、高橋　考多、清水　直人、宮本　啓江、三上　靖夫	ウェルウォークWW1000を用いた他施設間での共同研究	第6回京都リハビリテーション医学会学術集会	京都府	2月

業績集　学会発表（医師以外）

演者名	演題名	学会名	場所	開催日
○蛭子　拓真、尾崎　翼、山﨑　泰志、久保　元則、横関　恵美、菱川　法和、前田　博士	麻痺側膝関節伸展制限を有した脳卒中患者に対する振動刺激を併用した持続性伸長運動の効果	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会	兵庫県	6月
○森本　雅之、角田　公啓、中西　文彦、菱川　法和、前田　博士	実績指数向上に関わった因子についての検討	リハビリテーション・ケア合同研究会 金沢2019	石川県	11月

業績集　執筆

職員名	掲載雑誌	タイトル
○日野　学、菅　寛之、小牧伸太郎、市丸　昌平	JOSKAS日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会雑誌 Vol.44 No.1 2019	TKAの脛骨コンポーネント設置における新しい足関節中心の指標の検討
○吉田　昌平、金村　朋直	臨床スポーツ医学 2019.9号	足部・足関節の下肢スポーツ障害に対するテーピング

外部研修参加実績

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
医局	上島圭一郎	医師	学会等	2019年度　定時社員総会・第92回日本整形外科学会学術総会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	第132回　中部日本整形外科災害外科学会・学術集会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	第50回　日本人工関節学会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	第56回　日本リハビリテーション医学会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	日本股関節学会　教育研修セミナー「アドバンスコース」
医局	上島圭一郎	医師	学会等	日本股関節学会第5回教育研修セミナー・第46回日本股関節学会学術集会
医局	上島圭一郎	医師	学会等	日本整形外科学会役員・代議員懇談会・第34回日本整形外学会基礎学術集会
整形外科部門	日野　　学	医師	学会等	KNEE　symposium　TOKYO2019
整形外科部門	菅　　寛之	医師	学会等	第11回　日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	学会等	第11回　日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	日野　　学	医師	学会等	第11回　日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	吉田　昌平	理学療法士	学会等	第11回　日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会
整形外科部門	下村　征史	医師	学会等	第46回　スポーツ医学研修会
整形外科部門	菅　　寛之	医師	学会等	第50回　日本人工関節学会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	学会等	第50回　日本人工関節学会
整形外科部門	下村　征史	医師	学会等	第50回　日本人工関節学会
整形外科部門	日野　　学	医師	学会等	第50回　日本人工関節学会
整形外科部門	下村　征史	医師	学会等	日本股関節学会第5回教育研修セミナー・第46回日本股関節学会学術集会
整形外科部門	吉田　昌平	理学療法士	学会等	第30回　日本臨床スポーツ医学会学術集会
整形外科部門	金村　朋直	理学療法士	学会等	第6回　日本予防理学療法学会学術大会
整形外科部門	吉田　昌平	理学療法士	学会等	第6回　日本予防理学療法学会学術大会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	第13回　国際リハビリテーション医学会世界会議 ISPRM2019
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	第25回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	第3回　日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	第3回　日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	学会等	第3回　日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	第56回　日本リハビリテーション医学会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	第56回　日本リハビリテーション医学会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	学会等	第56回　日本リハビリテーション医学会
回復期リハビリテーション部門	蛭子　拓真	理学療法士	学会等	第56回　日本リハビリテーション医学会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	第60回　日本神経学会学術大会
回復期リハビリテーション部門	太田　絢野	理学療法士	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会　第35回研究大会IN札幌
回復期リハビリテーション部門	林　　博子	理学療法士	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会　第35回研究大会IN札幌
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会　第35回研究大会IN札幌
回復期リハビリテーション部門	礒島　大志	作業療法士	学会等	京都府リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	川原　七海	作業療法士	学会等	第39回　近畿作業療法学会
回復期リハビリテーション部門	島田　紗季	作業療法士	学会等	第39回　近畿作業療法学会
回復期リハビリテーション部門	塚田　　徹	作業療法士	学会等	第39回　近畿作業療法学会

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	横関　恵美	医師	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	井上　歩美	言語聴覚士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	岩永　久乃	言語聴覚士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	蛭子　拓真	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	太田　絢野	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	太田垣沙和	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	小林　　剛	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	林　　博子	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	菱川　法和	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	馬淵　拓実	作業療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	三好　歩美	言語聴覚士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	矢守　郁子	言語聴覚士	学会等	第6回　京都リハビリテーション医学会学術集会
回復期リハビリテーション部門	森本　雅之	作業療法士	学会等	リハビリテーションケア合同研究大会　金沢　2019
看護部	角田　公啓	看護師	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会　地域包括ケア病棟協会　合同シンポジウム
看護部	水谷　幸奈	看護師	学会等	関西感染症フォーラム
看護部	谷田砂登美	看護師	学会等	第23回　関西感染症フォーラム
看護部	新田　彩貴	看護師	学会等	第23回　関西感染症フォーラム
看護部	細越万里子	看護師	学会等	第31回　日本生命倫理学会年次大会
看護部	進士　香織	看護師	学会等	第6回　日本手術看護学会近畿地区大会
看護部	谷田砂登美	看護師	学会等	第6回　日本手術看護学会近畿地区大会
看護部	谷田砂登美	看護師	学会等	日本環境感染学会総会・学術集会
看護部	川島　純子	准看護師	学会等	日本手術看護学会近畿地区　京都ブロックセミナー
看護部	矢守　笑子	准看護師	学会等	日本手術看護学会近畿地区　京都ブロックセミナー
看護部	細越万里子	看護師	学会等	日本臨床倫理学会
医療技術部門	佐々木理恵	臨床検査技師	学会等	第44回　日本超音波検査学会学術集会
医療技術部門	古川吏恵美	薬剤師	学会等	第41回　日本病院薬剤師会　近畿学術大会
医療技術部門	中平　美紀	管理栄養士	学会等	リハ栄養フォーラム　2019 in大阪
事務局	竹村　淳一	事務職員	学会等	第69回　日本病院学会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	学会等	回復期リハビリテーション病棟協会　第35回研究大会IN札幌
事務部門	中川　裕子	事務職員	学会等	第45回　日本診療情報管理学会学術大会
その他	清水　真弓	理学療法士	学会等	全国地域リハビリテーション合同研修大会　Inひょうご2019
医局	上島圭一郎	医師	研修等	2019年度　回復期リハビリテーション病棟専従医師研修会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修等	Bicompartmental Knee Arthroplasty Cadaver Traininng Course
整形外科部門	菅　　寛之	医師	研修等	Osteotomies Aroundo The Knee Education Course
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修等	PS－Mobile　Seminar
整形外科部門	日野　　学	医師	研修等	PS－Mobile　Seminar
整形外科部門	下村　征史	医師	研修等	SuperPath　CADAVER　TRAINING
整形外科部門	金村　朋直	理学療法士	研修等	オリ・パラ事前研修会
整形外科部門	下村　征史	医師	研修等	第22回　HIPスタンダードコース・第22回KNEEスタンダードコース

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
整形外科部門	相馬　寛人	理学療法士	研修等	第22回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	吉田　　純	理学療法士	研修等	第23回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	下谷　　聡	理学療法士	研修等	第24回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	鈴木　理恵	理学療法士	研修等	第25回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	正生　拓海	理学療法士	研修等	第26回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	西村竜太郎	理学療法士	研修等	第27回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	田原　亜美	理学療法士	研修等	第28回　全体研修会　FTEXアプローチを科学する
整形外科部門	日野　　学	医師	研修等	第32回　日整会リウマチ医研修会
整形外科部門	小牧伸太郎	医師	研修等	第36回　膝関節フォーラム
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	研修等	2019年度　ウエルウォーク研究会
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	研修等	2019年度　ウエルウォーク研究会
回復期リハビリテーション部門	岩永　久乃	言語聴覚士	研修等	2019年度　実務者講習会（応用編）
回復期リハビリテーション部門	礒島　大志	作業療法士	研修等	CVA時期別OT研修会　知覚運動アプローチコース
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	研修等	The 6th time AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	前田　博士	医師	研修等	The 6th time AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	山砥　　泉	作業療法士	研修等	圧迫骨折の病態の理解とそのアプローチ
回復期リハビリテーション部門	中川　恵介	理学療法士	研修等	ウェルウォークリーダー研修会
回復期リハビリテーション部門	馬淵　拓実	作業療法士	研修等	オルフィット社製スプリント　ベーシック勉強会
回復期リハビリテーション部門	川原　七海	作業療法士	研修等	学習理論を基盤とした積極的上肢訓練
回復期リハビリテーション部門	石川　　航	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	礒島　大志	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	岩永　久乃	言語聴覚士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	岩本　　舞	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	太田　絢野	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	太田垣沙和	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	川原　七海	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	小林　　剛	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	四方　佳歩	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	髙平　茉侑	言語聴覚士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	田口　理紗	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	田崎亜友美	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	塚田　　徹	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	中川　恵介	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	林　　博子	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	馬淵　拓実	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	宮田　　梓	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	森本　雅之	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	山砥　　泉	作業療法士	研修等	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
回復期リハビリテーション部門	加古山　悟	理学療法士	研修等	高次脳機能障害夏研修会Ｂコース
回復期リハビリテーション部門	馬淵　拓実	作業療法士	研修等	厚生労働省指定　臨床実習指導者講習会
回復期リハビリテーション部門	四方　佳歩	作業療法士	研修等	住宅で学ぶ！家屋評価をイチから学ぶセミナー
回復期リハビリテーション部門	片山　佳栄	理学療法士	研修等	新人症例発表会
回復期リハビリテーション部門	西尾　大智	理学療法士	研修等	新人症例発表会
回復期リハビリテーション部門	加古山　悟	作業療法士	研修等	第120回　全職種研修会

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
回復期リハビリテーション部門	原　　永望	言語聴覚士	研修等	第120回　全職種研修会
回復期リハビリテーション部門	宮田　　梓	理学療法士	研修等	第120回　全職種研修会
回復期リハビリテーション部門	井上　歩美	言語聴覚士	研修等	第122回　全職種研修会
回復期リハビリテーション部門	四方　佳歩	作業療法士	研修等	第122回　全職種研修会
回復期リハビリテーション部門	髙平　茉侑	言語聴覚士	研修等	第122回　全職種研修会
回復期リハビリテーション部門	畳谷　季恵	理学療法士	研修等	第122回　全職種研修会
回復期リハビリテーション部門	小林　　剛	理学療法士	研修等	第16回　京都訪問リハビリテーション実務者研修会
回復期リハビリテーション部門	森本　雅之	理学療法士	研修等	第16回　京都訪問リハビリテーション実務者研修会
回復期リハビリテーション部門	久保　元則	医師	研修等	第22回　臨床筋電図・電気診断学入門講習会
回復期リハビリテーション部門	井上　歩美	言語聴覚士	研修等	第2回　実務者講習会：基礎
回復期リハビリテーション部門	中川　恵介	理学療法士	研修等	第3回　ウェルウォーク研究会
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	研修等	第3回　京都府臨床実習指導者講習会
回復期リハビリテーション部門	石川　　航	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	蛭子　拓真	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	片山　佳栄	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	田崎亜友美	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	西尾　大智	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	宮城　真穂	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	森　　直樹	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	研修等	第6回　AIJINKAI脳卒中セミナー
回復期リハビリテーション部門	田口　理紗	作業療法士	研修等	人間作業モデル講習会　評価法の実際編
回復期リハビリテーション部門	山砥　　泉	作業療法士	研修等	人間作業モデル講習会　評価法の実際編
回復期リハビリテーション部門	加古山　悟	作業療法士	研修等	人間の理解からリハビリテーションへ
回復期リハビリテーション部門	足立奈津季	作業療法士	研修等	認知神経リハビリテーション・ベーシックコース
回復期リハビリテーション部門	蛭子　拓真	理学療法士	研修等	脳卒中片麻痺患者の歩行向上に必要な知識と実践～理論、実技編～
回復期リハビリテーション部門	菅森　将弥	作業療法士	研修等	評価・治療に活かせる脳画像の見方と機能解剖in大阪
回復期リハビリテーション部門	菅森　将弥	作業療法士	研修等	藤田リハADL講習会　応用・経験者コース
回復期リハビリテーション部門	阿原　悠真	作業療法士	研修等	藤田リハADL講習会ベーシックコース
回復期リハビリテーション部門	井上　歩美	言語聴覚士	研修等	よくわかる失語症講習会　基礎編・応用編
回復期リハビリテーション部門	太田　綾野	理学療法士	研修等	理学療法士講習会　回復期～慢性期における中枢神経疾患後遺症患者に対する評価と治療
回復期リハビリテーション部門	髙平　茉侑	言語聴覚士	研修等	リハビリテーション計画の立案に役立つ脳画像と高次機能の知識
回復期リハビリテーション部門	畳谷　季恵	理学療法士	研修等	リハビリテーション計画の立案に役立つ脳画像と高次機能の知識
回復期リハビリテーション部門	岩本　　舞	作業療法士	研修等	臨床に活かす肩関節の機能解剖評価・アプローチセミナーIn大阪
看護部門	進士　香織	看護師	研修等	「今どきナース」のほめ方・しかり方
看護部門	中谷　道子	看護師	研修等	「思い込み」「勘違い」「注意不足」防止の具体策
看護部門	松下　歩惟	看護師	研修等	「思い込み」「勘違い」「注意不足」防止の具体策
看護部門	細越万里子	看護師	研修等	「こんな時どうする」看護現場の労務管理トラブル解決策コース
看護部門	中谷　道子	看護師	研修等	2019年度　医療機器安全基礎講習会
看護部門	今井千賀子	看護師	研修等	2019年度　看護中間管理者研修Ⅱ（師長コース）
看護部門	吉川　美稀	看護師	研修等	2019年度　京滋地区　心電図・モニタ講習会
看護部門	蒲田　景斗	看護師	研修等	2019年度　重症度・医療・看護必要度評価者院内指導者研修

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
看護部門	細越万里子	看護師	研修等	明日からケアに活かす感染症の基本知識と看護
看護部門	水谷　幸奈	看護師	研修等	明日からケアに活かす感染症の基本知識と看護
看護部門	福田　素江	看護師	研修等	忙しい現場を変える！外来看護の質向上を目指した業務改善とスタッフ教育
看護部門	鈴木貴美子	看護師	研修等	お悩み解決感染対策
看護部門	細越万里子	看護師	研修等	お悩み解決感染対策
看護部門	西田　英子	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	介護・福祉移設における観戦対策の基礎ち実践
看護部門	藤原ゆかり	事務職員	研修等	介護・福祉移設における観戦対策の基礎ち実践
看護部門	榊原久見子	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	介護記録研修（記録全般の質）
看護部門	中山　　泰	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	介護記録研修（記録全般の質）
看護部門	川島　純子	看護師	研修等	看護師が行う入退院支援と困難事例への対応セミナー
看護部門	田邉千菜美	看護師	研修等	看護師が行う入退院支援と困難事例への対応セミナー
看護部門	増田　紀代	看護師	研修等	看護師が行う入退院支援と困難事例への対応セミナー
看護部門	東山　昌子	看護師	研修等	看護実践キャリア開発センター　公開講座　教育インストラクター育成
看護部門	岡田　尚子	看護師	研修等	看護実践キャリア開発センター中堅達人キャリアアップ研修
看護部門	柴山　美穂	看護師	研修等	看護塾　呼吸困難を訴えているときのアセスメントのこつ
看護部門	細越万里子	看護師	研修等	看護部長会4月相互研究「労務管理について」
看護部門	西田　英子	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	看護補助者研修
看護部門	津野真奈美	看護師	研修等	看護リーダーシップ研修（中堅コース）
看護部門	津野真奈美	看護師	研修等	感染症の基本知識と看護
看護部門	細越万里子	看護師	研修等	感染対策担当者のためのセミナー
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修等	感染リンクナースになったらお願いいたし5つのこと
看護部門	新川　義憲	看護師	研修等	急変させない患者観察テクニック
看護部門	入江　麻衣	看護師	研修等	急変予兆を見抜くフィジカルアセスメント
看護部門	水谷　幸奈	看護師	研修等	京滋地区心電図・モニター講習会　　初級
看護部門	大井　和枝	看護師	研修等	高齢者のフットケア～足・爪のフットケアを学ぶ
看護部門	蒲田　景斗	看護師	研修等	骨折の治療・合併症・ケアのきほん
看護部門	原田　有莉	看護師	研修等	骨折の治療・合併症・ケアのきほん
看護部門	水谷　幸奈	看護師	研修等	骨折の治療・合併症・ケアのきほん
看護部門	柴山　美穂	看護師	研修等	在宅療養支援能力向上セミナー
看護部門	岡田　尚子	看護師	研修等	周術期における手術室看護師の役割とやりがり
看護部門	進士　香織	看護師	研修等	周術期における手術室看護師の役割とやりがり
看護部門	谷田砂登美	看護師	研修等	周術期における手術室看護師の役割とやりがり
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修等	周術期における手術室看護師の役割とやりがり
看護部門	鈴木貴美子	看護師	研修等	主任・リーダーの役割・判断・調整法とチームマネージメント
看護部門	田邉千奈美	看護師	研修等	主任・リーダーの役割・判断・調整法とチームマネージメント
看護部門	中山　　泰	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	主任・リーダーの役割・判断・調整法とチームマネージメント
看護部門	松田　亜弓	看護師	研修等	整形外科疾患の術前・術後のケアとリハビリ・退院指導
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	せん妄の早期発見と対応
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	第120回　全職種研修会
看護部門	阿部　哲也	看護師	研修等	第122回　全職種研修会
看護部門	柴山　美穂	看護師	研修等	第122回　全職種研修会
看護部門	松下　美里	看護師	研修等	第122回　全職種研修会

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
看護部門	田中　美帆	看護師	研修等	第126回　全職種研修会
看護部門	鈴木美希子	看護師	研修等	第127回　全職種研修会
看護部門	岸村　茉美	看護師	研修等	第129回　全職種研修会
看護部門	後藤　茉衣	看護師	研修等	第129回　全職種研修会
看護部門	藤原ゆかり	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	第12回　介護研修
看護部門	中尾　元美	看護師	研修等	第12回　病棟師長研修会
看護部門	近藤三保子	看護師	研修等	第32弾　呼吸療法プチセミナー
看護部門	鈴木美希子	看護師	研修等	第40回　看護・介護研修会（初任者研修）
看護部門	田中　美帆	看護師	研修等	第5回　看護リーダー・主任研修会
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	第5回　チームアプローチ研修会
看護部門	小林　依子	ｹｱﾜｰｶｰ	研修等	第5回　チームアプローチ研修会
看護部門	岡田　尚子	看護師	研修等	中央材料室・内視鏡室・手術室・感染管理・医療安全セミナー
看護部門	近藤三保子	看護師	研修等	出直し看護塾　アセスメントシリーズ　呼吸困難を訴えているとき編
看護部門	細越万里子	看護師	研修等	日本感染管理ベストプラクティス”Saizen"研究会第14回セミナー
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	認知症患者へのコミュニケーションと療養環境の調整
看護部門	新川　義憲	看護師	研修等	認知症サポートナース養成研修終了者アドバンス研修
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	脳梗塞と脳出血の看護～注意すべき予測を立て適切なケアに活かそう
看護部門	蒲田　景斗	看護師	研修等	日々の看護実践を行なう上での臨床判断について考えてみよう
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	病院医療従事者認知症対応向上研修
看護部門	浦田　雄史	看護師	研修等	病棟看護師のたの認知症ケア講座
看護部門	長野　匡洋	看護師	研修等	病棟看護師のための在宅療養支援セミナー
看護部門	鈴木貴美子	看護師	研修等	ファーストレベル実践報告会
看護部門	後藤　真衣	看護師	研修等	藤田リハADL講習会（FIMを中心に）
看護部門	鈴木美希子	看護師	研修等	藤田リハADL講習会（FIMを中心に）
看護部門	長野　匡洋	看護師	研修等	藤田リハADL講習会（FIMを中心に）
看護部門	大井　和枝	看護師	研修等	ベーシックシリーズ　胸部X線・CT読影の基本
看護部門	田邉千奈美	看護師	研修等	リーダーシップ研修
看護部門	加藤　友香	看護師	研修等	2019年度　院内感染対策講習会
看護部門	新田　彩貴	看護師	研修等	2019年度　院内感染対策講習会
看護部門	公文代真由子	看護師	研修等	2019年度　排尿機能回復のための治療とケア講座
看護部門	松下　歩惟	看護師	研修等	老年期看護セミナー
看護部門	松田　亜弓	看護師	研修等	老年期看護セミナー
看護部門	山口　有莉	看護師	研修等	老年期看護セミナー
看護部門	吉川　美稀	看護師	研修等	老年期看護セミナー
医療技術部門	山田　浩弓	臨床検査技師	研修等	Heart　Valve　Conference
医療技術部門	山田　浩弓	臨床検査技師	研修等	The　Echo　Live
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修等	第15回　医療安全研修
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	研修等	日本感染管理ベストプラクティスSaizen研究会　第14回セミナー
医療技術部門	山田　浩弓	臨床検査技師	研修等	日本心エコー図学会第24回冬期講習会
医療技術部門	古川吏恵美	薬剤師	研修等	2019年度　院内感染対策講習会
医療安全管理部門	山田　美香	看護師	研修等	VTE医療安全セミナー病院全体で取り組むVTE予防
医療安全管理部門	山田　美香	看護師	研修等	第14回　医療の質・安全学会学術集会

部　　門	氏　　名	職　　種	区分	学会研修名等
医療安全管理部門	山田　美香	看護師	研修等	日本医療機能評価機構　医療安全マスター養成プログラム
医療安全管理部門	山田　美香	看護師	研修等	日総研「思い込み」「勘違い」「注意不足」防止の具体策
事務局	竹村　淳一	事務職員	研修等	医療クオリティーマネジャー養成セミナー
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	研修等	2019年度　身寄りがない患者受け入れマニュアル作成に資する研修
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	研修等	アデクションにおけるソーシャルワーク実践研修
事務部門	平河　雄太	事務職員	研修等	医事業務研修会
事務部門	上野　有佐	事務職員	研修等	一日で学ぶ年末調整の基礎実務
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修等	医療ガス安全管理者講習会
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修等	医療勤務環境改善推進室からの通知に基づく研修会
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修等	医療勤務環境改善推進室からの通知に基づく研修会
事務部門	早川　佳克	事務職員	研修等	管理者・リーダーのための問題解決力養成講座
事務部門	林　　亮治	事務職員	研修等	ケーエムエー　経営セミナー　民法改正の医療機関への影響
事務部門	田村早奈美	社会福祉士	研修等	高次機能障害のある方の再出発にむけて
事務部門	佐野　綾子	社会福祉士	研修等	高次脳機能障害専門研修
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修等	高齢者の権利擁護と「高齢者虐待防止法」を理解する
事務部門	平河　雄太	事務職員	研修等	自賠責研修会
事務部門	林　　亮治	事務職員	研修等	事務職員によるデータ分析と実践力強化講座
事務部門	林　　亮治	事務職員	研修等	診療報酬改定セミナー 2020
事務部門	佐野　綾子	社会福祉士	研修等	ソーシャルワークにおける臨床倫理
事務部門	佐野　綾子	社会福祉士	研修等	ソーシャルワークによる退院支援実践の自己評価とプログラム評価
事務部門	佐野　綾子	社会福祉士	研修等	第27回　ソーシャルワーカー研修会（アドバンス研修）
事務部門	早川　佳克	事務職員	研修等	第3回　京都府医療相談窓口担当者研修会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修等	中京区在宅医療・介護連携支援センター第2回研修会
事務部門	鈴鹿　三郎	社会福祉士	研修等	病院医療ソーシャルワーカー研修会
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修等	病院経営管理士通信教育2年次後期スクーリング
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修等	病院経営管理士通信教育2年次前期スクーリング
事務部門	新谷　圭由	事務職員	研修等	病院中堅職員育成研修
事務部門	髙田　賢悟	事務職員	研修等	病院中堅職員育成研修
事務部門	向坂亜友美	社会福祉士	研修等	2019年度　高次脳機能障害専門研修
事務部門	林　　亮治	事務職員	研修等	私病協事務部長会研修「2020年診療報酬改定について」
事務部門	吉田　　潤	事務職員	研修等	私病協事務部長会研修「2020年診療報酬改定について」
回復期リハビリテーション部門	中西　文彦	作業療法士	その他	京都府地域リハビリテーション支援センターコーディネーター会議
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	その他	京都理学療法士新人発表会
回復期リハビリテーション部門	山﨑　泰志	理学療法士	その他	2019年度　新人症例発表会
回復期リハビリテーション部門	原　　永望	言語聴覚士	その他	臨床実習指導者会議
看護部門	中尾　元美	看護師	その他	2020年度　診療報酬改定説明会（回復期リハビリテーション病棟協会）
看護部門	細越万里子	看護師	その他	継続教育担当者会議
看護部門	細越万里子	看護師	その他	第1回　施設看護職代表者会議
医療技術部門	中井登代美	薬剤師	その他	診療報酬改定勉強会
事務部門	林　　亮治	事務職員	その他	2020年度　診療報酬改定説明会（回復期リハビリテーション病棟協会）
事務部門	松橋　寛子	事務職員	その他	法人税・消費税・源泉所得税「決算説明会」「消費税軽減税率制度説明会」
医療安全管理部門	山田　美香	看護師	その他	認定看護管理者教育課程ファーストレベル平成30年度修了者看護管理実践報告会

実習生受入状況

記載者：細越　万里子（看護）

2019年度の実習生は，以下の教育機関から受入れし各部門の実習担当指導者が実習生の臨地教育に対応した。看護部では，例年と同様に京都看護大医学4回生と京都府立医師会看護専門学校3年生の2校を受け入れた。

課題探求Ⅰ・Ⅱは，回復期病棟で学生が抽出した課題研究に沿って実習を計画・実践・評価した。成人看護学実習Ⅲは，整形外科病棟で周術期にある患者と家族を対象とする実習を支援した。老年看護学実習Ⅲでは，回復期病棟で健康上の問題を持つ老年期の対象を理解し，個別的な看護実践を支援した。また今年度は新たに西京極中学校の「生き方探求・チャレンジ体験」を受け入れた。参加した2名の中学生は3日間の体験を通して卒後の進路や将来について考える機会になった。

今後も看護職の後輩を育てていくためにも実習生やチャレンジ体験を支援していきたい。

学校名	受入部門	職種	実習内容	実習期間	実習生人数
京都看護大学	看護部	看護師	課題探究	5/13 ～ 5/16	5名
京都医師会看護専門学校	看護部	看護師	老年看護学実習Ⅲ	5/27 ～ 6/14	6名
京都医師会看護専門学校	看護部	看護師	成人看護学実習Ⅲ	6/17 ～ 7/5	3名
京都医師会看護専門学校	看護部	看護師	老年看護学実習Ⅲ	7/8 ～ 7/26	3名
西京極中学校	看護部	看護（中学生）	チャレンジ体験	9/3 ～ 9/6	2名
京都看護大学	看護部	看護師	課題研究Ⅱ	9/24 ～ 9/25	1名
日本福祉大学	整形外科部	理学療法士	総合実習Ⅱ	4/8 ～ 6/2	1名
甲南大学	整形外科部	理学療法士	臨床実習Ⅱ	2/3 ～ 2/19	1名
佛教大学	回復期リハ部	理学療法士	総合実習	4/2 ～ 5/30	1名
京都橘大学	回復期リハ部	理学療法士	総合実習	5/7 ～ 7/5	1名
佛教大学	回復期リハ部	作業療法士	総合実習	6/10 ～ 8/2	1名
京都光華大学	回復期リハ部	言語聴覚士	総合実習	7/8 ～ 8/30	1名
京都医健専門学校	回復期リハ部	作業療法士	総合実習	7/22 ～ 9/14	1名
森ノ宮医療大学	回復期リハ部	理学療法士	総合実習	9/2 ～ 10/25	1名
佛教大学	回復期リハ部	理学療法士	見学実習	9/9 ～ 9/14	1名
京都医健専門学校	回復期リハ部	言語聴覚士	総合実習	10/16 ～ 11/27	1名
				合　　計	22名

京都府立医科大学　クリニカルクラークシップ

【整形外科】

医学部（5.6回生）

［実施日］

4月 9日　～　4月9日	1名
4月23日　～　4月23日	1名
5月28日　～　5月28日	1名
6月11日　～　6月11日	1名
7月 9日　～　7月9日	1名
10月15日　～　10月15日	2名
11月12日　～　11月12日	1名
2月17日　～　2月21日，27日	1名

合計8名

［内容］
1.外来診察見学
2.リハビリ見学
3.手術見学

【リハビリテーション科】

医学部（5.6回生）

［実施日］

4月9日　～　4月12日，25日	1名
5月13日　～　5月17日，30日	1名
6月17日　～　6月19日，21日，27日	1名
6月26日　～　6月27日	1名
7月8日　～　7月12日	1名
7月8日　～　7月12日	1名
9月9日　～　9月13日，26日	1名
2月17日　～　2月21日，27日	1名

合計8名

［内　容］
1.診察・リハビリテーション医療の見学
2.合同カンファレンスの見学
3.カンファレンスの見学
4.チームアプローチについて学ぶ
5.嚥下造影検査の見学
6.装具診察の見学

医師・研修医

［実施日］

4月17日　～　4月17日	1名
8月20日　～　8月23日	1名
12月12日　～　12月12日	1名
12月18日　～　12月20日	1名
12月25日　～　12月26日	1名
2月26日　～　2月28日	1名

合計6名

［内　容］
1.診察・リハビリテーション医療の見学
2.合同カンファレンスの見学
3.カンファレンスの見学
4.チームアプローチについて学ぶ
5.嚥下造影検査の見学
6.装具診察の見学

【その他】

京都府リハビリテーション教育センター実地研修　→　2020年3月開催予定でしたが、中止になりました。

地域活動［がくさい健康塾］

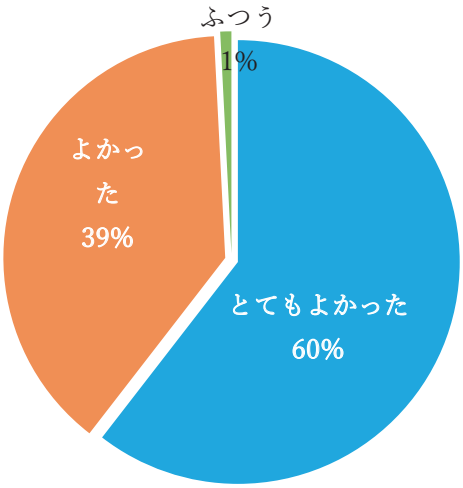
当院では，地域の高齢者対策事業として地域住民の方をお招きして健康講座を開催しています。2019年度に開催した健康講座は以下の通りです。

中高齢者のための「がくさい健康塾」の開催

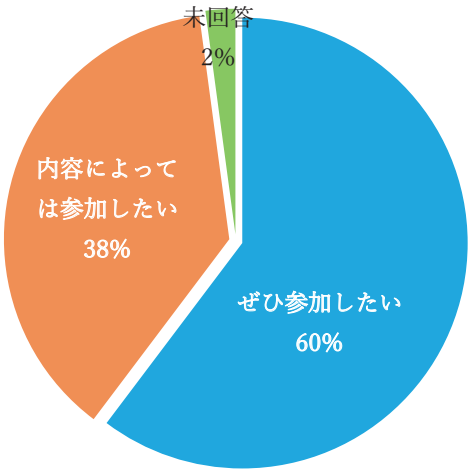
開 催 日：2019年6月28日（金）13時30分～15時00
講　　師：京都府立医科大学大学院医学研究科リハビリテーション医学教室教授 三上靖夫先生
テ ー マ：『いつまでも元気で暮らすために～宇宙飛行士から学ぶ秘訣～』
場　　所：京都府医師会館3階310会議室
参加人数：152名

参加者アンケート（抜粋）

Q健康塾の内容について
（n=141）



Q次回も健康塾に参加したいですか？
（n=141）



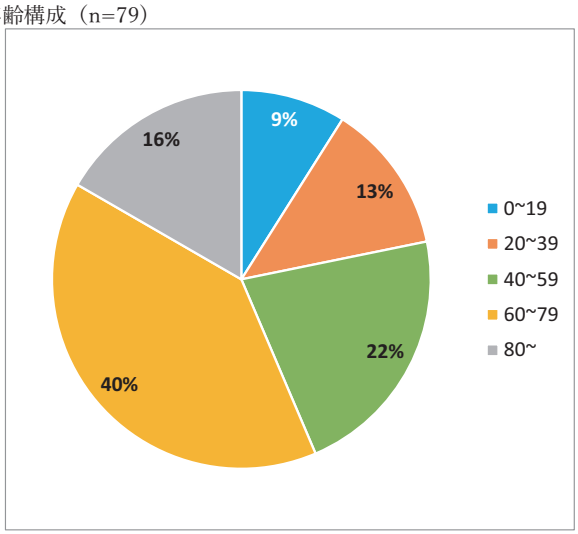
［開催の広報ポスター］

［講演中風景］

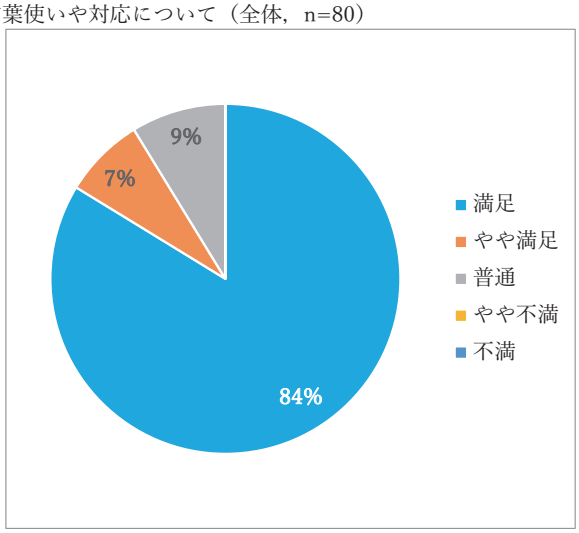
患者アンケート調査結果（入院）

3階病棟	男性：26名	女性：35名	合計：61名			
4階病棟	男性：11名	女性：8名	合計：19名			
合計	男性：37名	女性：43名	合計：80名	配布枚数：190枚	回収枚数：80枚	回収率：約42%

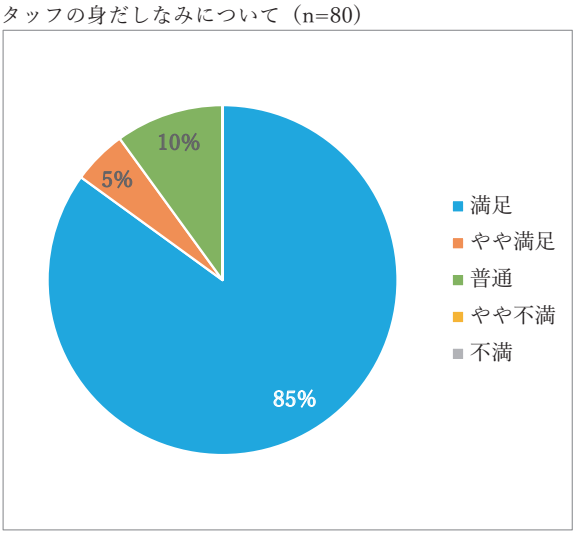
年齢構成（n=79）



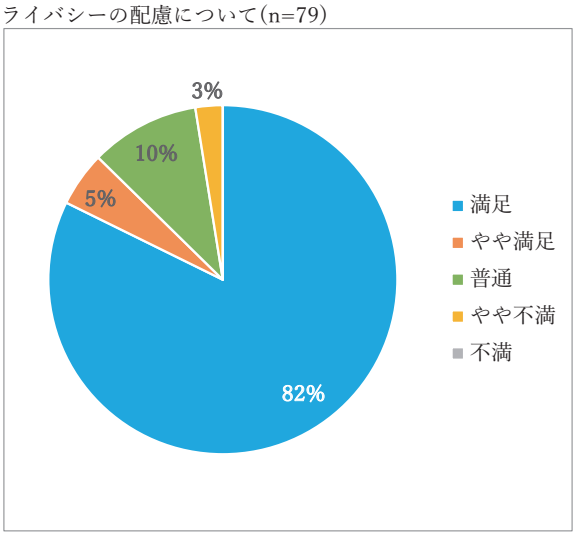
言葉使いや対応について（全体，n=80）



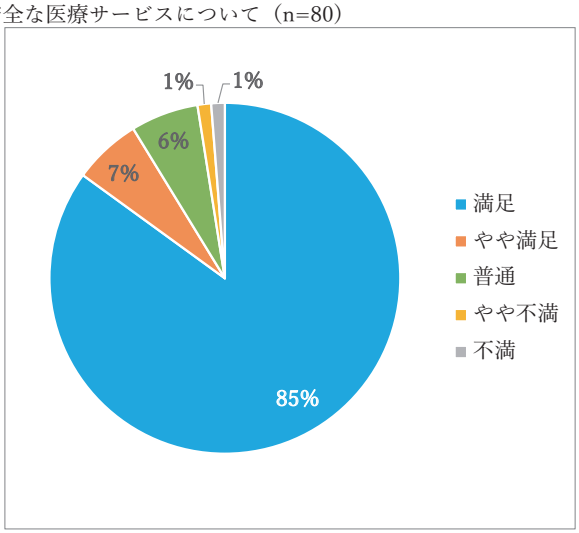
スタッフの身だしなみについて（n=80）



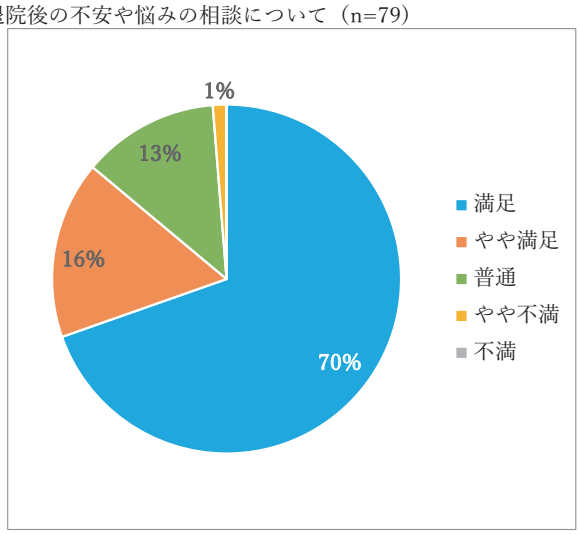
プライバシーの配慮について(n=79)



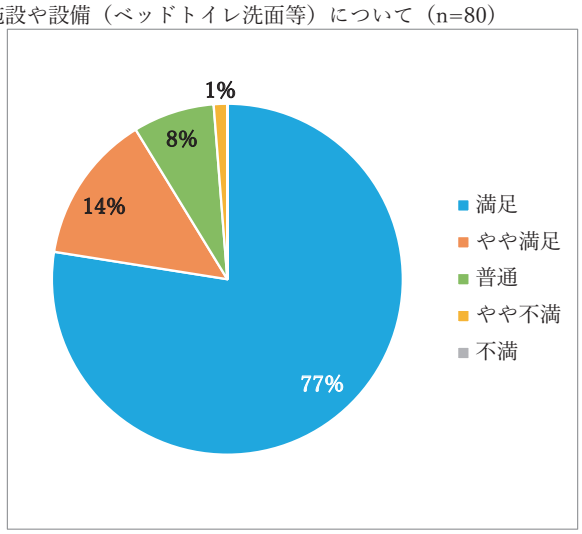
安全な医療サービスについて（n=80）



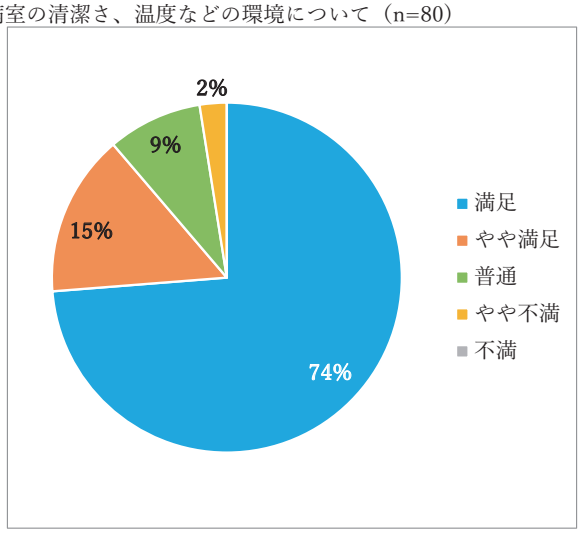
退院後の不安や悩みの相談について（n=79）



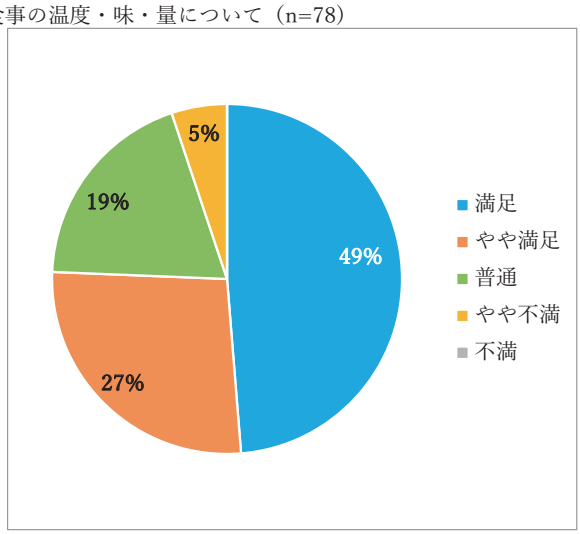
施設や設備（ベッドトイレ洗面等）について（n=80）



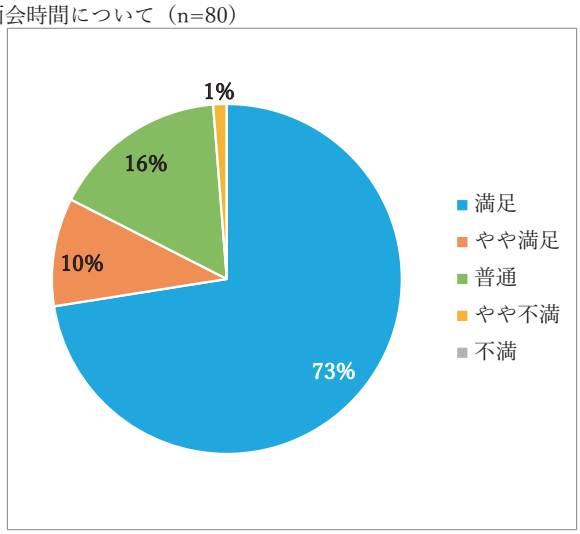
病室の清潔さ、温度などの環境について（n=80）



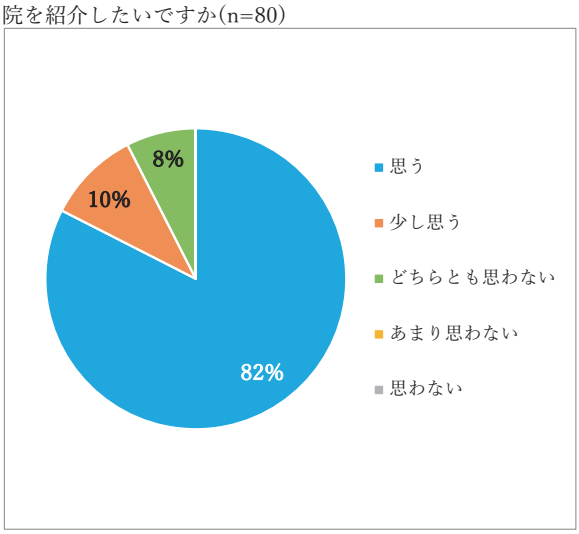
食事の温度・味・量について（n=78）



面会時間について（n=80）



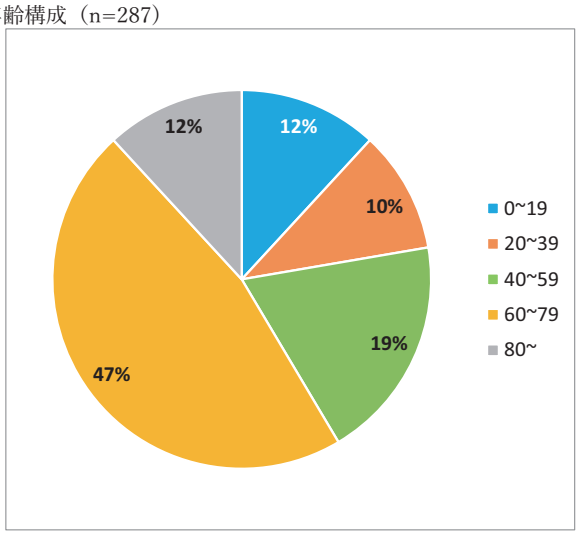
当院を紹介したいですか(n=80)



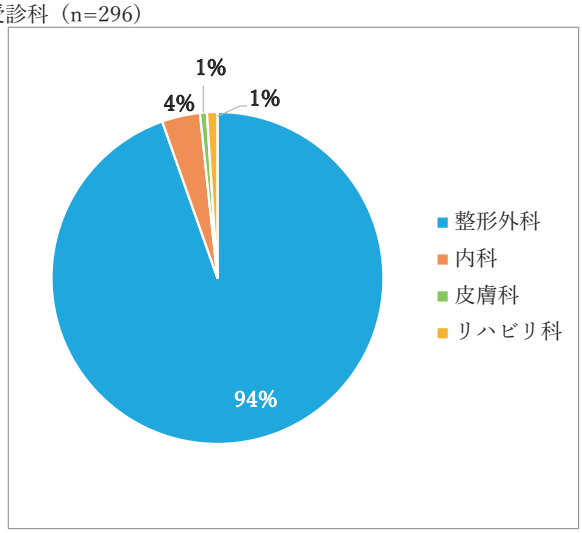
患者アンケート調査結果（外来）

男性：91名　　女性：201名　　無回答：7名　　合計：299名
配布枚数：403枚　　回収枚数：299枚　　回収率：約74%

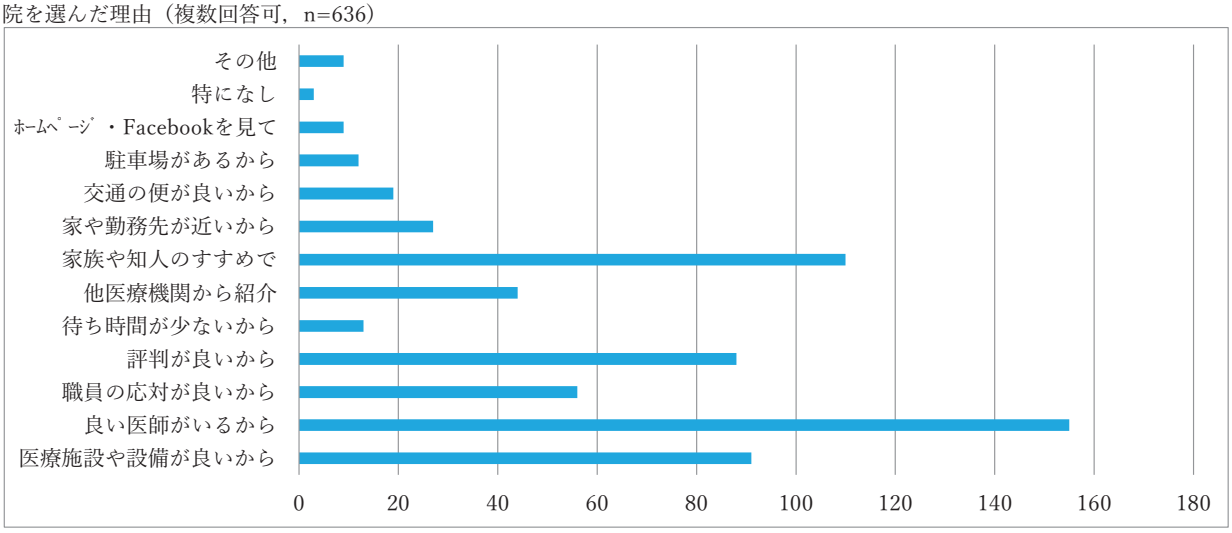
年齢構成（n=287）



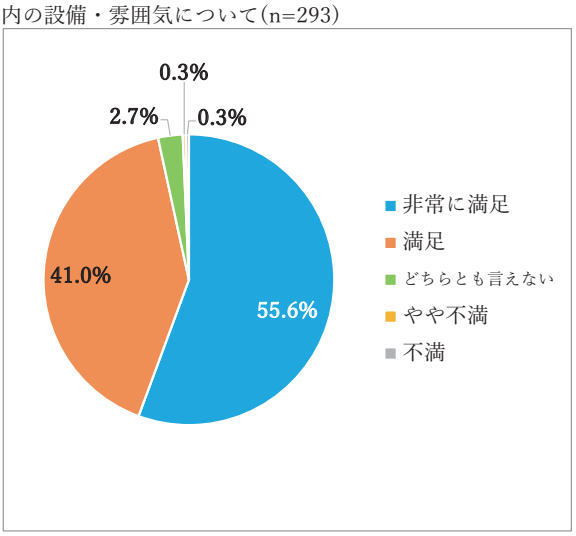
受診科（n=296）



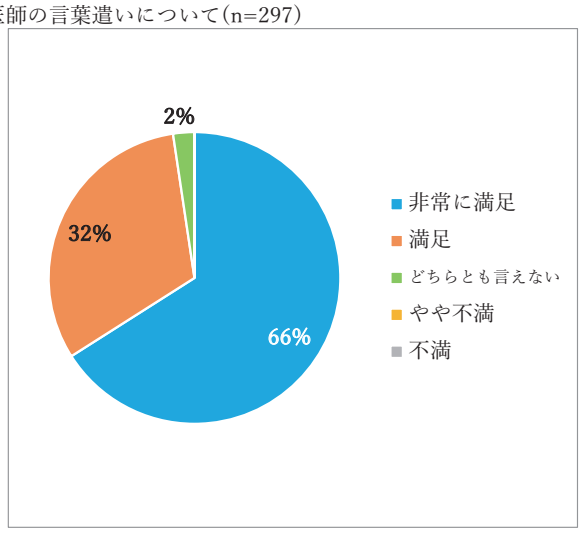
当院を選んだ理由（複数回答可，n=636）



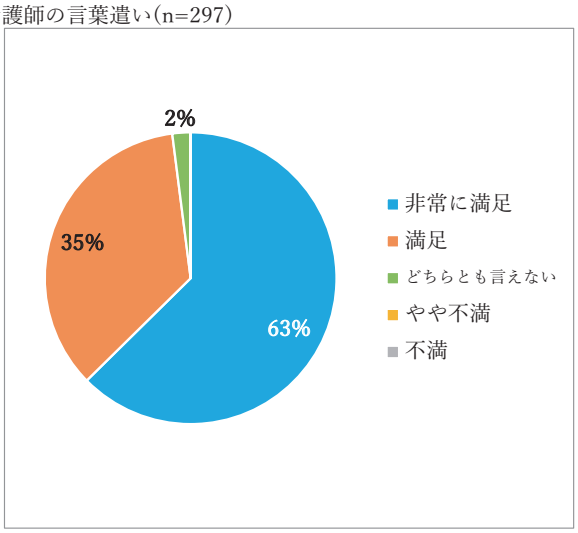
院内の設備・雰囲気について(n=293)



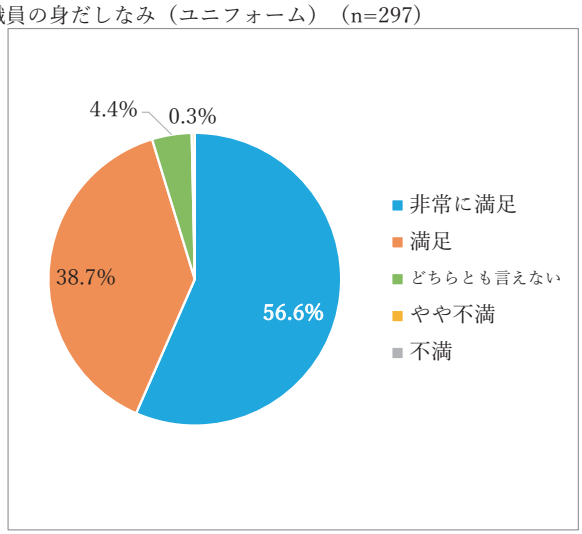
医師の言葉遣いについて(n=297)



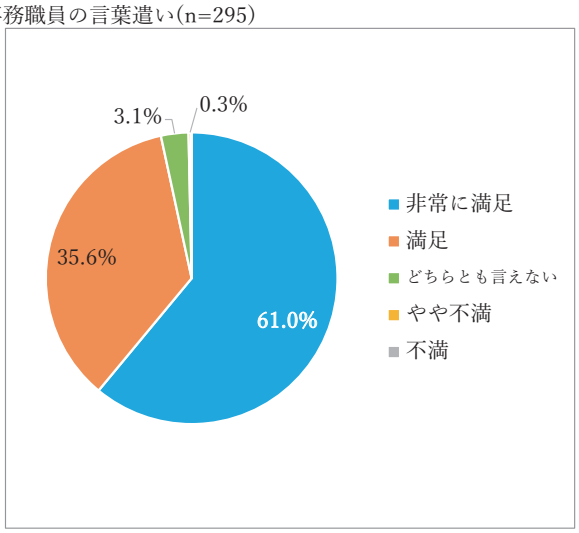
看護師の言葉遣い(n=297)



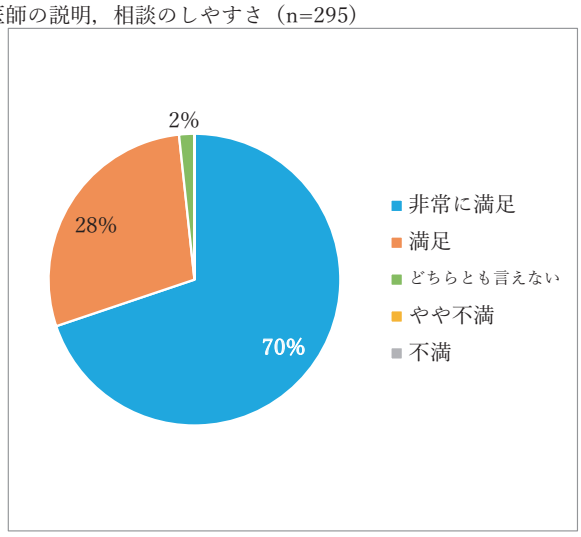
職員の身だしなみ（ユニフォーム）（n=297）



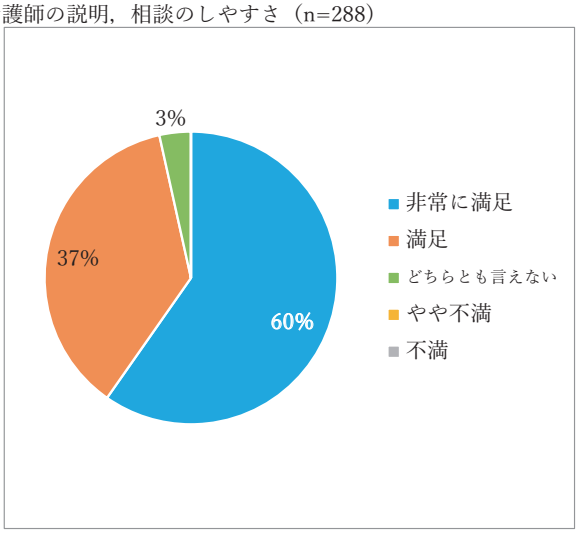
事務職員の言葉遣い(n=295)



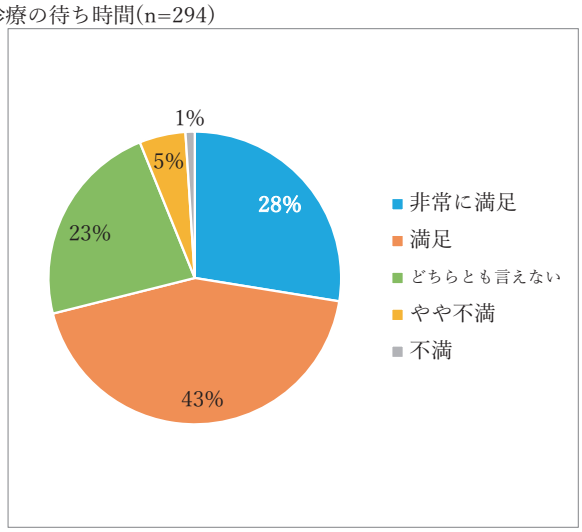
医師の説明，相談のしやすさ（n=295）



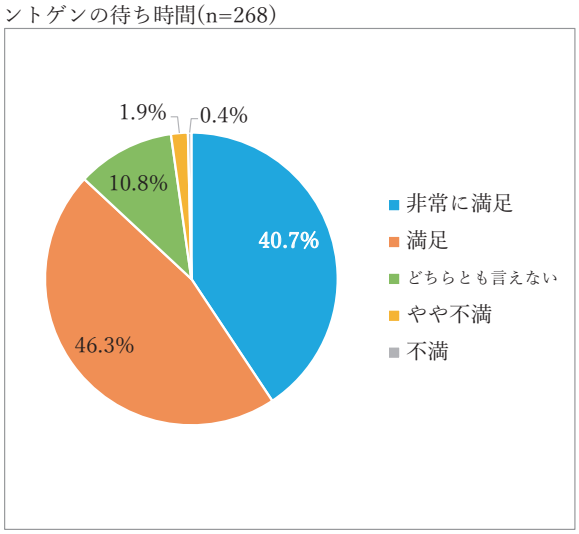
看護師の説明，相談のしやすさ（n=288）



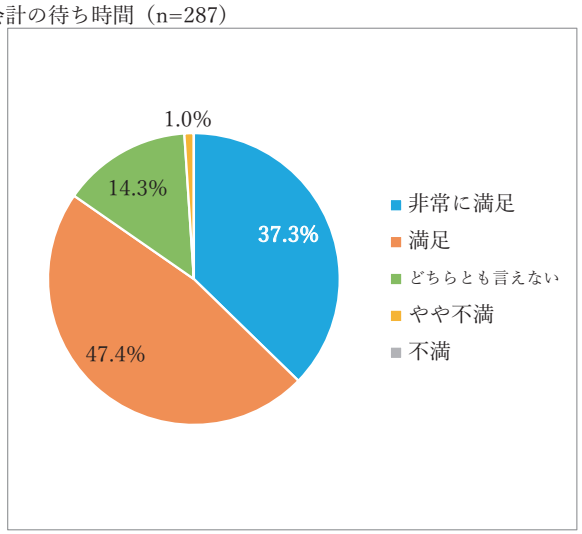
診療の待ち時間(n=294)



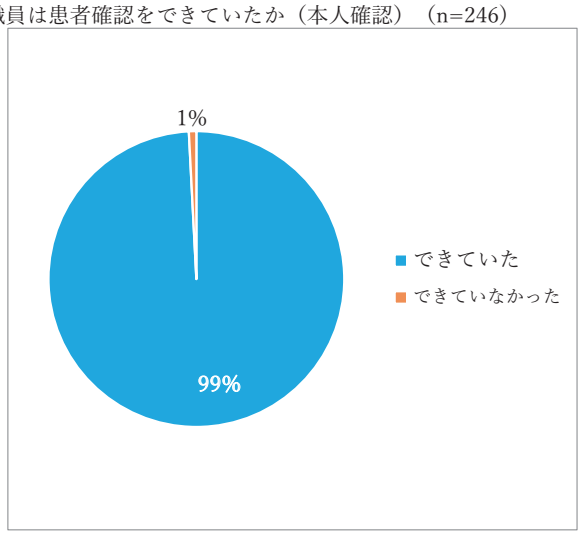
レントゲンの待ち時間(n=268)



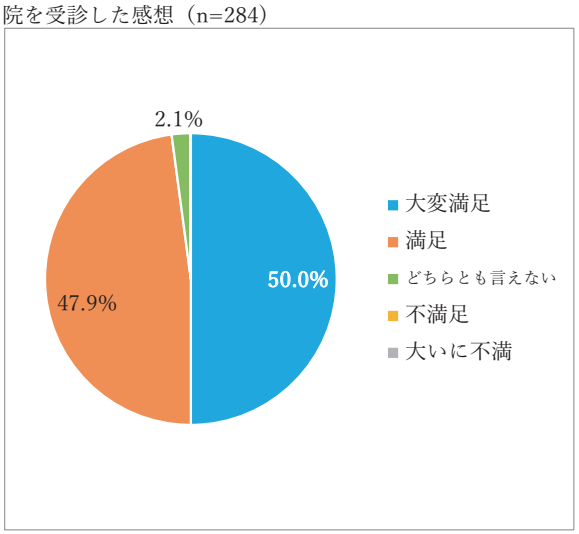
会計の待ち時間（n=287）



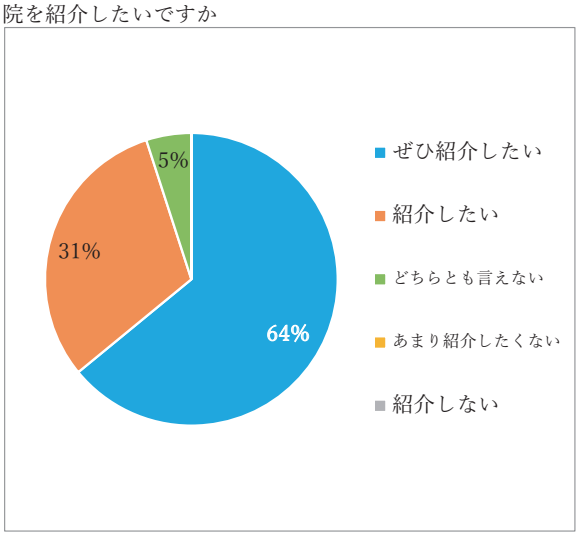
職員は患者確認をできていたか（本人確認）（n=246）



当院を受診した感想（n=284）



当院を紹介したいですか



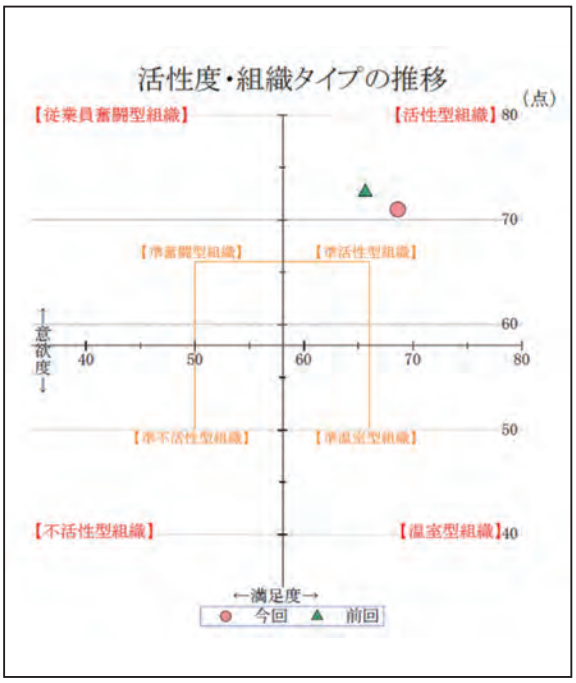
2019年度　職員満足度調査

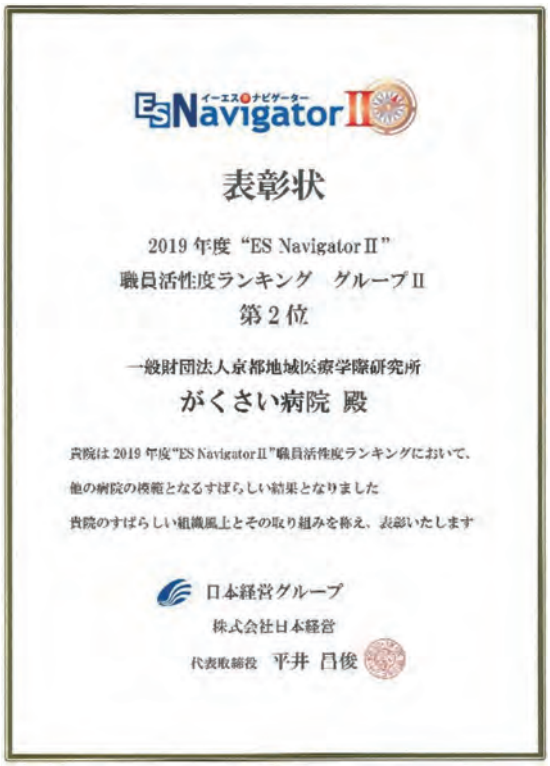
職員満足度調査について

当法人では，毎年7月に職員の働く意欲度と満足度を調査するために職員満足度調査（職員アンケート調査）を実施している。2019年度はアンケート結果において全国の医療機関（200床未満の部）の中から職員活性度ランキングで第2位として表彰された。

職員満足度調査企業　：株式会社日本経営
アンケート名　：ES navigator Ⅱ
調査概要　：2019年7月実施，職員配布枚数177名（回答率85.3％）
調査結果（組織タイプ分類）：活性型組織（意欲度70.9点，満足度68.6点）

［組織タイプ分類］





ES Navigator Ⅱ

表彰状

2019年度“ES Navigator Ⅱ”
職員活性度ランキング　グループⅡ
第2位

一般財団法人京都地域医療学際研究所
がくさい病院 殿

貴院は2019年度“ES Navigator Ⅱ”職員活性度ランキングにおいて、
他の病院の模範となるすばらしい結果となりました
貴院のすばらしい組織風土とその取り組みを称え、表彰いたします

日本経営グループ
株式会社日本経営
代表取締役　平井 昌俊

京都市域京都府地域リハビリテーション支援センター

記載者：清水　真弓

センター長：上島圭一郎（院長）
副センター長：清水　真弓（主任／コーディネーター／理学療法士）
サブコーディネーター：中西　文彦（作業療法士）

[年間目標]

『圏域内でのリハビリテーションの啓発とネットワークの構築、連携活動の強化』

[主な活動]

I. 京都府リハビリテーションコーディネート事業（委託）、その他事業（補助金）

1. 圏域連絡会等

開催日　2020年2月6日（木）
参加者数　15名（京都市・京都府・京都市域地域リハビリテーション支援センター）
内容
・京都府における地域支援事業等への取組
・京都市域京都府地域リハビリテーション支援センターにおける地域支援事業等への取組
・京都市におけるリハビリテーション専門職活用状況について
・意見交換（課題と今後の方向性について）
構成団体　医療機関：がくさい病院
行政機関：京都市健康長寿企画課　介護予防推進担当、京都市健康長寿企画課　地域包括ケア担当、介護ケア推進課　認定給付係、京都府健康福祉部リハビリテーション支援センター、京都府健康福祉部高齢者支援課

2. 地域包括支援センター等に対するリハビリテーションに関する助言・相談対応

件数　75件
内容
・京都市との地域リハビリテーション支援
〈京都市介護予防ケアマネジメント支援事業〉27か所
〈京都市介護予防推進センター 情報交換会〉、〈京都市認知症関連事業〉
〈京都市高次脳機能障害者支援ネットワーク 情報交換会〉等
・圏域内のローカルコミュニティでのネットワーク
〈在宅リハ連絡会〉7地域、計10回
北区／上京区、中京区、西京区／右京区、伏見区（伏見）、左京区、山科区／伏見（醍醐・深草）、下京区／南区／東山区
〈行政区に関連する連携〉
北区：地域包括支援センター連絡会、健康長寿のまちづくり推進会議
伏見区：向島暮らし安心ワーキング
〈在宅医療連携〉中京区、西京区、右京区、北区／上京区、山科区 医療・介護連携支援センター
〈事業者連絡会〉北区介護保険事業者連絡会・右京区ケアマネ交流会・上京区ささえ愛の会での研修会
〈地域包括支援センター〉北区／上京区／左京区合同保健師看護師部会　研修会、紫竹地域包括支援

センター 圏域内研修会 等

・認知症関連のネットワーク

〈北区・上京区認知症サポートネットワーク連絡会〉〈左京区SOSサポートネットワーク〉

〈認知症カフェ〉おれんじ庵金閣（北区、金閣学区）、にこにこカフェ（左京区、岩倉）

〈認知症サポーター養成講座〉京都市交通局、小学校・中学校 等

・介護予防に関する事業

〈京都市介護自主グループ支援モデル事業（東山区）〉10グループ

〈介護予防推進センター〉上京区健康講座（4･5月）、上京区体力測定会

〈自主活動グループ〉楽々会（北区）等

・地域の支援者への支援事業

〈高齢者の居場所づくり〉はなカフェ / よろづ相談カフェ / つながるキッチン（左京南地域包括支援センター）、光徳いきいきサロン（下京区 光徳学区）、安養寺なつみかんの会（上京区 小川地位包括支援センター）、金閣すこやか学級（北区 金閣学区）、原谷金閣すこやか教室（北区 原谷学区）、まちの保健室にしお（訪問看護ステーションにしお）、レインボーカフェ（中京区 日彰学区）、おたっしゃサロン（久世地域包括支援センター）、お楽しみサロン（下京区 豊園学区）、コーヒー男団（上京区 支え合い創出活動事業）等

・その他（事業所支援等、研修・講習会等）

〈機能訓練指導員への研修会〉京都市社会福祉協議会 通所介護事業所研修会

〈ポジショニングの研修会〉京都生協ヘルパー事業所、柊野福祉会 施設系職員研修会 等

3. 事業者支援のための訪問・相談

件数　50ケース（1ケースの平均訪問相談回数：2.5回、総訪問回数：124回）

内容　特養・小規模多機能・グループホーム等への施設6ヵ所等

4. リハサービス窓口担当者との定期的な事例検討会の開催

	開催日	参加者	事例提供者
1	2019年6月18日（火）／7月16日（火） 8月20日（火）／9月17日（火）／10月15日（火） 11月19日（火）／12月17日（火） 2020年2月18日（火）／3月17日（火）	9～10名	岩倉地域包括支援センター
2	2019年 6月.20日（木）	20名	左京区地域包括支援センター プランナー部会
3	2019年 7月25日（木）／9月26日（木） 11月28日（木）／2020年1月30日（木）	30名	御池・西ノ京地域包括支援センター合同事例検討会（気づきの事例検討会）
4	2019年7月26日（金）	15名	勧修地域包括支援センター
5	2019年8月2日（金）	30名	粟田・高野・ 修学院地域包括支援センター合同
6	2019年8月23日（金）	15名	醍醐北部地域包括支援センター
7	2019年8月26日（月）／10月28日（月） 2020年1月27日（月）／3月23日（月）	4～7名	下京東部地域包括支援センター
8	2019年10月3日（木）／12月4（日（水） 2020年2月4日（火）	10～15名	小川地域包括支援センター
9	2019年10月23日（水）	12名	大原地域包括支援センター
10	2019年12月4日（水）	15名	嵐山地域包括支援センター

11	2019年12月13日（金）	40名	東山地域包括支援センター
12	2019年12月20日（金）	10名	粟田地域包括支援センター 事例検討会（気づきの事例検討会）
13	2020年1月23日（木）	9名	桂川地域包括支援センター
14	2020年2月27日（木）	18名	西京北部地域包括支援センター

内容：地域包括支援センターとの介護予防ケアマネジメント支援に関する事例検討会
協力リハ専門職：計23名

5. 全般的な事業

(1) 情報発信・研修、高次脳・障害児者、その他の取組

・ホームページの適時更新
・事業所調査（訪問リハ、通所リハ事業所一覧作成・配布）
・リハ専門職に対する研修会
〈受入研修（基礎コース）受入〉計2名　　期間：10/7（月）～11（金）、11/18（月）～22（金）
〈勉強会〉 リハビリテーション従事者向け研修（リハ勉強会）
第10回「最先端リハビリテーションの未来～リハロボットを生活行為に応用する～」

(2) 看護職・介護職リハビリテーションステップアップ研修会の開催

・第8回リハロボ体験研修会（「リハビリテーション福祉用具体験研修会」より名称変更）
開催日：11/2（土）～3（日）　　場所：杉浦地域医療研究センター

II. 京都市域リハビリテーション協力病院支援事業

1. 開催日　2019年6月18日（火）　参加者 44名

〈第1部〉2019年度事業報告、、2019年度事業計画
〈第2部〉
(1) 研修会・グループ検討会
①「地域資源としての回復期リハ病棟を持つ医療機関への期待～地域課題解決に向けた回復期リハ病棟の可能性を考える～」
千葉県千葉リハビリテーションセンター
地域リハビリテーション推進部　部長　田中康之（PT）
②「リハビリテーション専門職等と連携した地域の介護予防活動について」
京都市健康長寿企画課　介護予防推進担当　野村直史
③「京都府リハビリテーション三療法士会協議会における人材育成の取り組みについて」
京都府リハビリテーション三療法士会協議会　副会長　麻田博之（PT）
(2) グループワーク「京都市域における協力病院の役割」
(3) まとめ・講評

2. 開催日　2020年3月25日（水）　参加者 24名

※新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、「京都市域地域リハビリテーション協力病院連絡会」と位置づけ、参加可能な協力病院及び地域包括支援センター等で開催する形式とした。
〈第1部〉報告　京都市域リハビリテーション協力病院支援事業2019年年度事業報告
〈第2部〉実践報告会・グループ検討会　　テーマ「京都市域内の地域リハビリテーションに関する地域課題」
課題①　回復期リハ病棟を持つ医療機関等は、地域の活動にどのように協力すればいいのか？

課題②　介護予防や地域の居場所づくりで、リハ専門職はどのようなことができるのか？

〈各課題に対する実践報告〉

実践報告①　西京区在宅医療介護連携支援センタ-での取組と協力病院事業との連携

西京区在宅医療介護連携支援センター　コーディネーター小泉こずえ

洛西シミズ病院 リハビリテーション科　石田　俊介（PT）

実践報告②　介護予防での自主体操グループへの支援とリハ専門職協力の実際（資料参照）

京都市健康長寿企画課 介護予防推進担当　野村　直史

結ノ歩訪問看護ステーション　上田　将吾（PT）

構成機関

協力病院	京都博愛会病院／京都警察病院／京都大原記念病院／脳神経リハビリ北大路病院／京都民医連あすかい病院／近衛リハビリテーション病院／京都民医連中央病院／京都久野病院／洛和会音羽リハビリテーション病院／京都武田病院／十条武田リハビリテーション病院／宇多野病院／洛西シミズ病院／蘇生会総合病院／京都リハビリテーション病院
行政機関	京都府リハビリテーション支援センター

3. 各協力病院の取り組み

・相談窓口の設置：電話相談

・研修会・事例検討会の開催

・地域包括支援センター等に対するリハサービスに関する助言・相談

・関係機関への発信、その他広報

新入職員について

2019年4月　がくさい病院では16名の新入職員が入職した。

	氏　名	部　門	配　属	職　種
1	西村　竜太郎	整形外科部門	スポーツリハビリテーション科	理学療法士
2	田原　亜美	整形外科部門	スポーツリハビリテーション科	理学療法士
3	石川　航	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
4	佐織　歩	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
5	森　直樹	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
6	淺井　真奈美	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
7	片山　佳栄	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
8	西尾　大智	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
9	宮城　真穂	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	理学療法士
10	島田　紗希	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	作業療法士
11	川原　七海	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	作業療法士
12	塚田　徹	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	作業療法士
13	三好　歩美	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	言語聴覚士
14	村田　裕香里	回復期リハビリテーション部門	リハビリテーション科	言語聴覚士
15	森下　さなえ	看護部門	B病棟	看護師
16	平河　雄太	事務部門	システム管理課	事務員

第3章

介護老人保健施設「がくさい」

介護老人保健施設「がくさい」

基本理念

その人らしい暮らしの実現を目的に、保健・医療・福祉など各種専門分野の知識を結集、即ち学際的な視野で地域福祉に貢献し、利用者の尊厳を大切に『そっと寄り添った』介護を行います。

基本方針

1. 利用される方々の尊厳を第一に考え、その人らしく暮らすことが出来るよう『そっと寄り添った』サービスの提供を行います。
2. 利用される方々の残された力を最大限引き出すよう努力し、自律した生きがいのある生活が出来るようサポートします。
3. 利用される方々に充分な説明を行い、納得いただいた上でサービスを提供します。
4. 地域福祉に貢献するため、他の福祉機関や医療・保健システムとの連携を密にして介護を行うとともに、地域の一員として可能な限り施設を開放します。
5. 人の和を大切にし、助け合いの精神で高齢者福祉を推進するとともに、明るく楽しい職場環境をつくります。
6. 日々進歩する高齢者福祉に対し自己研鑽を怠ることなく、知識の習得と技術の向上に努め、最新で最良の信頼される介護を目指します。

介護老人保健施設「がくさい」　中期vision

（策定　2018年4月1日）

利用者の尊厳を大切にし、家族を支援し、在宅生活の維持と安寧を目標にして、各部門・部署の連携により、施設を挙げて「そっと寄り添った介護」を目指す。

1. 職員の能力を高め、知識と技術・技芸によって、安全で質の高いケアを確立する
   - ・職員の一人一人が利用者の理解を深め、利用者の尊厳を守る
   - ・催し・事業の計画・実施・評価にあたっては、部門・部署間の連携や協力関係を確認する
   - ・認知症、嚥下障害、高い医療ニーズのケア、看取りのケア等への対応を強化する
   - ・安全で質の高いケアを恒常的に追求し、モニターして評価する仕組みを構築する
   - ・地域に根差した事業を発展させ、地域の特色を活かした体制を構築する

2. 人財育成と職員の働きがいの醸成を一致させる
   - ・部門ごとの職員研修システムを構築し、現任訓練（OJT）を組み込む
   - ・人財育成を充実させる。管理職養成、事務職員の育成にも取り組む
   - ・人事評価制度を定着させると共に、労働環境をモニターし改善する

3. 地域での実績を拠り所に、地域の組織づくりに協力し、地域包括ケアの一翼を担う
   - ・利用者の在宅復帰を促進し、在宅支援に貢献する。さらに社会参加を目指す利用者増を図る
   - ・生活期リハビリテーションを発展・充実させると共に、在宅支援組織やサービスとの連携を強化する。また、診療所・病院等と連携して在宅医療・施設サービスの向上に役立てる
   - ・地域包括ケアの一翼を担う施設として、地域の団体、施設、機関等と協力し、地域のネットワークの一員の役割を果たし、地域に貢献する

4. 安定した経営と財務管理を確立する
   - ・施設目標の達成を目指し、部門・部署方針を確実に実行する
   - ・施設・機器の老朽化に対しては年次計画的な対応を行う
   - ・持続可能な経営基盤を確立する

2019年度の活動

施設長　土井　渉

施設開設来の「そっと寄り添った介護」を目指し、基本理念・基本方針や中期ビジョンに基づいて事業を進めた。

方針を推進するに当たり、引き続き部門間、部署間の連携が第一と考えた。運営会議、部門代表者会議、各委員会等を有機的に連動させて、施設全体のパフォーマンスを高めることに努めると共に、昨年に続いて委員会機能の強化を掲げた。総じて事業内容の向上につながったと考えている。

介護老人保健施設がもつ在宅復帰・在宅生活支援機能を推進し、さらにステップをあげて7月には「超強化型の老健」への類上げが叶い、年度末時点においてもそれを維持することができた。

1. 入所サービスについては、在宅復帰に向けて利用者個人にあった介護ケアとリハビリを、利用内容と利用期間を踏まえて計画的に提供することができた。
   認知症ケア、ターミナルケア、肺炎等の感染症、種々の疾患・事故への対応、並びに医療と健康管理に適切に対処することができた。
   利用者の高齢化と介護の重度化、ニーズの多様化に対応するため、関係する部門・部署・関係者が連携して取り組んだ。また必要に応じて他病院・施設・機関との協力を行うことができた。
   通所サービスは、デイケアにおいて短時間型の割合を増やしたことで在宅サービスの選択肢を拡げると共に、一日型の介護報酬上の不利を補うこととなった。8月から訪問リハビリを開設したが、今後はサービスの拡大を目指していく。
2. 超強化型取得は経営の安定に寄与した。介護・リハビリ職員の確保と質の確保が前提であり、その上で超強化型を維持し、平均稼働率を維持するためには、各部署間の調整と協力と共に、職員の意識の向上が不可欠であることを実感した。
   2月に、電子カルテの導入と介護報酬システムの切り替えに、時間を要したが、まずは円滑な移行を実現できた。今後はその利便性を活かして、同時に進める働き方改革につなげるため、引き続き検討していく。
   施設の老朽化への対応については、空調設備の更新など計画的に進めることができた。
3. 新型コロナウイルス感染症に対して、利用者と職員を守り、施設にウイルスを入れない、感染者を出さないという決意のもとに、職員一丸となって取り組んだ。今後長く対策を継続しなければならないが、国・京都府市の指導の下に、地域の団体と協力しながら、体制の強化を図り、予防対策を充実させていく。

当施設が開設して15周年を迎えた。地域に根付き、地域の方々に感謝し披露する場を用意していたが、世界規模のコロナの発生で実現できなかった。残念である。

施設概要

名　　称　一般財団法人京都地域医療学際研究所　介護老人保健施設「がくさい」
所 在 地　〒603-8465　京都府京都市北区鷹峯土天井町54番地
U R L　https://gakusai-rouken.net/
開 設 日　2005年1月11日
管 理 者　施設長　土井　渉
事業内容　介護老人保健施設
（予防）短期入所療養介護
（予防）通所リハビリテーション
（予防）訪問リハビリテーション
併　　設　京都市北区地域介護予防推進センター
施設形態　超強化型
入所定員　100人（うち認知症専門棟定員40人）
通所定員　50人
敷地面積　3,304㎡
床 面 積　4,285㎡

沿　　革　2003年11月　介護老人保健施設「がくさい」起工
2004年12月　介護老人保健施設「がくさい」竣工
2005年　1月　介護老人保健施設「がくさい」開設
2005年　5月　通所リハビリテーション開設
2006年　4月　京都市北区地域介護予防推進センター開設
2013年10月　きょうと福祉人材育成認証事業所認定
2019年　8月　訪問リハビリテーション開設

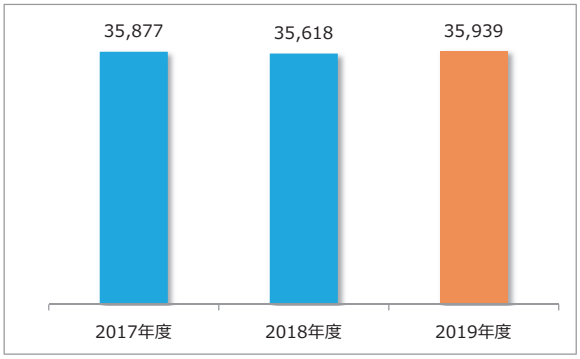
職種別職員数

2020年3月31日現在

区　分	職員数（実人数）		
	合　計	常　勤	非常勤
医　師	1	1	0
介護職員	59	49	10
看護職員	14	6	8
理学療法士	9	3	6
作業療法士	6	5	1
支援相談員	3	3	0
介護支援専門員	2	2	0
薬剤師	2	0	2
管理栄養士	1	1	0
事務員	5	4	1
その他職員	3	0	3
合　計	105	74	31

事業統計

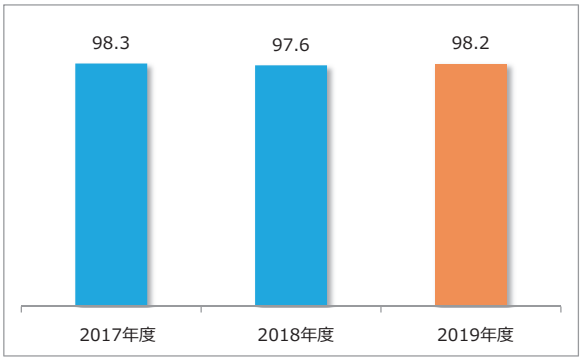
① 入所延利用者数



（単位：人）

	2017年度	2018年度	2019年度
入所延利用者数	35,877	35,618	35,939

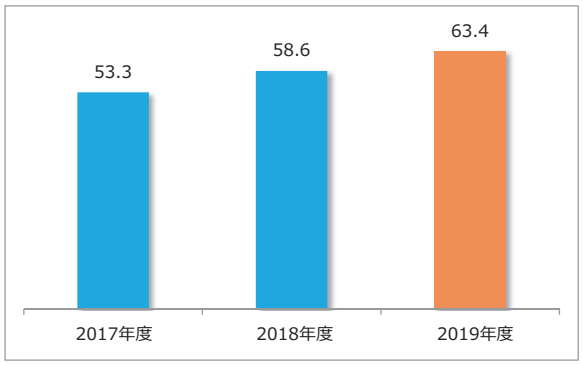
② 入所稼働率【ショートステイ含む】



（単位：%）

	2017年度	2018年度	2019年度
入所稼働率【ショートステイ含む】	98.3	97.6	98.2

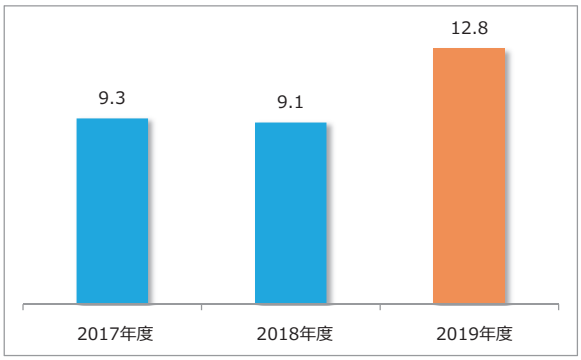
③ 在宅復帰率



（単位：%）

	2017年度	2018年度	2019年度
在宅復帰率	53.3	58.6	63.4

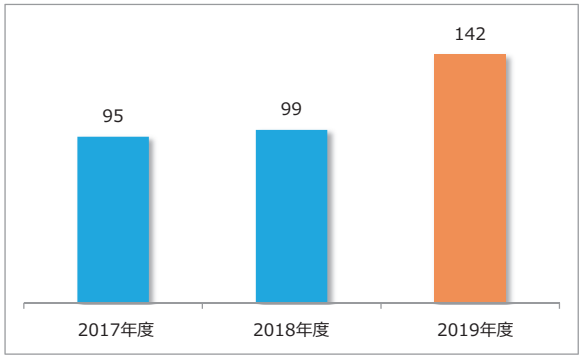
④ ベッド回転率



（単位：%）

	2017年度	2018年度	2019年度
ベッド回転率	9.3	9.1	12.8

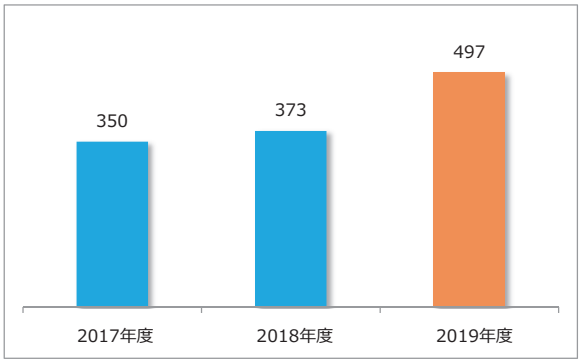
⑤ 新規利用者数【ショートステイ除く】



（単位：人）

	2017年度	2018年度	2019年度
新規利用者数【ショートステイ除く】	95	99	142

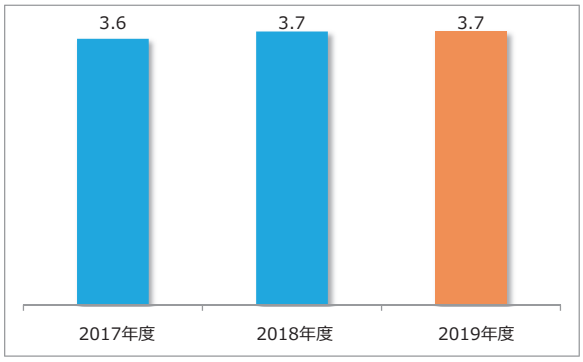
⑥ 新規利用者数【ショートステイ】



（単位：件）

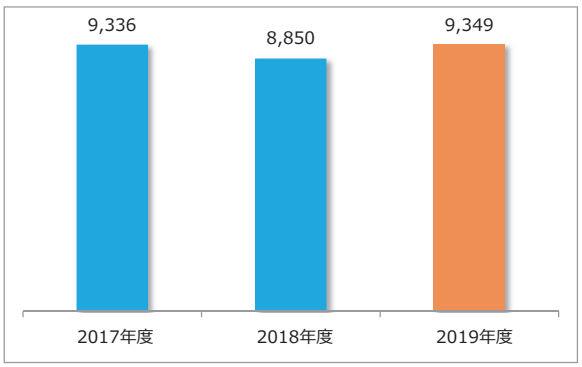
	2017年度	2018年度	2019年度
新規利用者数【ショートステイ】	350	373	497

⑦ 入所利用者 平均介護度



	2017年度	2018年度	2019年度
入所利用者 平均介護度	3.6	3.7	3.7

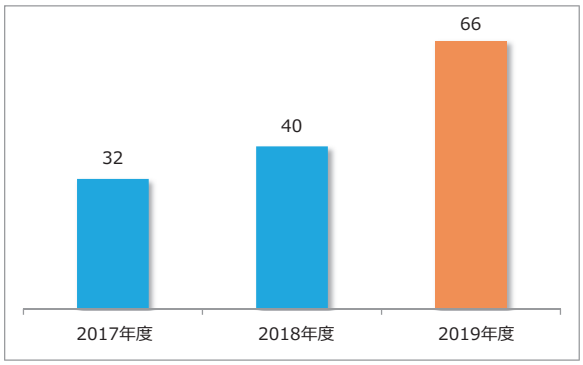
⑧ 通所リハビリ 利用者延数



（単位：人）

	2017年度	2018年度	2019年度
通所リハビリ 利用者延数	9,336	8,850	9,349

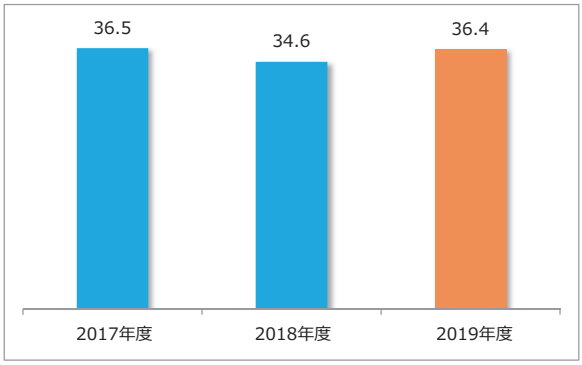
⑨ 通所リハビリ 新規利用者数



（単位：件）

	2017年度	2018年度	2019年度
通所リハビリ 新規利用者数	32	40	66

⑩ 通所リハビリ 1日平均利用者数



（単位：人）

	2017年度	2018年度	2019年度
通所リハビリ 1日平均利用者	36.5	34.6	36.4

生活支援部門

記載者：丹羽智佳子

生活支援部長：丹羽智佳子
入所療養科　　科長：中島由希子　　係長：土谷　幸絵
　　主任：岩村　隆史、岡崎　清子、長尾真理子、森　　篤史

[年間目標]

『質の高い多様なニーズに即したケアの先に超強化型老健を求め、利用者満足と職務満足を充足させる』

【強化項目】

1. 職員間の連携を図り、利用者に応じた個別的なケアを提供する。
2. 在宅復帰をめざし、入所から退所に向けての他職種連携を強化する。
3. 認知症ケア、ターミナルケアの充実に取り組む
4. キャリアに応じた職員のスキル、人間力の向上を図る

[主な活動]

2019年度は強化型老健から超強化型老健をめざし取り組んだ。2018年の介護報酬改定で強化型老健をめざしての取り組みでは、算定要件の指標である数値目標に意識が偏ってしまい、煩雑な業務に追われ、業務改善等に取り組んだものの、利用者主体としたケアが見失われがちになった傾向が伺えた。

2019年度は基本である利用者主体でのあるべき本来のケアに重点を置き、超強化型を目指せるように取り組んだ。その為には職員の職務を通じてのモチベーションも向上させ、従来以上の力も発揮できることが重要となる。超強化型取得において、在宅復帰・在宅療養支援がキーワードとなり、生活主体の老健施設の中で看護介護職員が行える生活リハビリに視点を当て、その人に応じた個人プログラムの作成や評価を他職種とも連携し取り組んだ。

また、ターミナルケアや施設での医療提供、重度介護者など多様なニーズに対応することも超強化型老健での必要要件であり、看取りに関しては16名であった。退所後のカンファレンスの充実を図るように目標を立てたが、今後はカンファレンスの充実と家族のグリーフケアに関しても退所後までしっかりとケアしたい。

医療的な事に関しては96名の医療機関への受診があり、その内34名が入院（消化器感染症5名、消化管出血延べ8名、肺炎1名、脳卒中6名、心不全3名、大腿骨頚部骨折1名、その他10名）、緊急時治療管理を3名算定（ショック1名、急性呼吸不全2名）、所定疾患施設療養費を24名算定（肺炎12名、尿路感染症9名。帯状疱疹3名）した。

医師や看護師といった医療従事者が常勤する老健では、医療的処置も極力施設内で対応することが求められ、2019年度も実行できたと考える。

結果、稼働率は目標値98％に対して98.19％、在宅復帰率は目標値50％に対して63.43％となった。この数値目標に関しては他部署との連携や協力が必要であり、2020年度もチームとして目標達成を目指したい。

利用者主体という専門職としての信念を忘れずに煩雑な業務となる中にも成功体験を積み重ね、モチベーションの向上と職員ひとり一人に応じたスキルアップを目指せるような体制作りも今後は検討していきたい。

入所療養科

部　門：生活支援部門
記載者：中島由希子

科長：中島由希子　　係長：土谷　幸絵
主任：岩村　隆史、岡崎　清子、長尾真理子、森　篤史
リーダー：上田明日香、進藤　一樹、田中　光穂、松野　彰太

［年間目標］

『質の高い多様なニーズに即したケアの先に超強化型老健を求め、利用者満足と職務満足を充足させる』

［主な活動］

質の高い多様なニーズに即したケアを提供しつつ、強化型老健として継続することが、安定した経営状態を維持することに繋がり、その先に利用者満足と職務満足の充足に繋がると考えた。そのためには、やはり安定した入所コントロールを戦略目標とし、入所稼働率および在宅復帰率の維持向上の継続は必須と捉えた。2018年度と同様にショートステイについては、2階の一般棟の利用者を主に対象として展開し、2019年度末にはCOVID-19の影響があったものの、入所療養科の全職員の尽力および相談課の協力、多職種の協働があり目標値達成となった。

また、在宅復帰率の維持向上については、全ユニットを対象に取り組み、生活リハビリの提供を指標にした。特に2階の一般棟では入退所への対応が多い状況での生活リハビリの提供は、大げさに表現すれば、まるで急性期病棟に類似するかのような状況下で可能な範囲で努力した。さらに3階の認知症専門棟においては、生活リハビリの提供が難しい利用者が多い中で取り組み、結果、目標値週2回以上を越えて、実績値週2.6回を達成することが出来た。利用者に対する日常生活支援は、365日・終日提供が必要であり、生活リハビリを提供することは、利用者の生活を維持改善するのに重要な要因と考えられることから、今後、多様なニーズに即した内容で継続して行きたい。

転倒転落件数については、月平均10件以下を目標とし、実績値は月平均8.91件であった。目標は達成したが、2018年度が月平均7.8件であったことからは増えている。件数が増えないように、2020年度も取り組んでいく。

職員満足に関わる目標として、外部研修への参加を1人1件で年10人以上の目標値に対して、年11人以上を達成した。今後も介護サービスの直接的な担い手として、介護職および看護師のレベルアップは継続して行わなければならず、レベルアップが職務満足、職員満足に繋がるように取り組んで行きたいが、2020年度は、COVID-19の影響を考慮した指標で取り組んでいく。

最後に、利用者満足に関わる新たな戦略目標として、利用者もしくはご家族からの（看護介護に対する）クレーム件数については、目標は1件で、実績値は月平均0.1件であり、実数としては1件であった。クレームについては、今後の課題を提示してもらったと考えて、内容を吟味しながら、有効に業務に活かしていく。

リハビリテーション部門

記載者：岡　　徹

リハビリテーション部長：岡　　徹
リハビリテーション科　　科長：岡　　徹（兼務）　　主任：古塩　博史
通所リハビリテーション科　　科長：井上　淳子　　主任：肥田　瑞穂

[部門方針]

『利用者個人に合わせた質の高いリハビリとケアを提供する』

[主な活動]

2019年度のリハビリテーション部として掲げた方針に沿ってリハビリテーション科及び通所リハビリテーション科ともに新規事業への挑戦により利用者の満足度向上と収益の増大へとつながった。

リハビリテーション科は理学療法士9名、作業療法士5名と下半期より常勤、非常勤ともにセラピストが充足され組織として安定したことにより、入所および通所利用者へのリハビリテーションは質と量も向上した。入所においては超強化型施設への基準取得のために、個別リハビリテーションや加算リハビリテーション回数の増大、在宅生活を意識した新たな家屋環境評価表の作成をおこなった。また、入所スタッフとのコミュニケーションを強化するため連携ボードを導入した。これにより在宅復帰への多種職連携が強化された。新規事業への取り組みとしては、8月より老健施設からの訪問リハビリテーションを開始した。これにより在宅生活でのリハビリテーションの提供を目的に、セラピストが実際の生活の場で指導できるようになり、利用者や家族および地域への貢献にもつながっていると考える。

通所リハビリテーション科も介護士12名、支援相談員1名、看護師1名のスタッフが連携と効率化を考えつつ、利用者の在宅を意識しながらの心身機能の向上とレスパイト機能や医療的な対応を積極的に取り組んだ。特に力を入れた取り組みとしては、利用者のニーズを考慮した短時間デイケアの時間枠の拡大により、開始時間や滞在時間の違う3コースの中から選択できるようにした。これにより利用者や家族ともに希望に合わせたリハビリテーション内容や時間設定および生活内容などにお答えすることが可能になったと考える。また。通所リハビリテーションスタッフの育成、リハビリテーション科との連携体制の強化など積極的に取り組めた。これらによりリハビリテーション部として良質な連携が行えるようになり、利用者へのリハビリテーションサービスは向上した。

〈強化項目〉

①　個人の生活と在宅復帰を意識したリハビリテーションを実施する
- 入所スタッフとの連携強化のために、連絡ボードの使用を開始した
- 通所リハビリテーション利用者様の生活時間を考慮した選択コースの増大
- 入退所時の家屋評価による在宅生活を考慮したリハビリテーションの実施

②　積極的なリハビリの提供と加算取得を推進する
- 個別リハビリや集団リハビリとニーズに合わせたリハビリテーションの提供
- 年末年始、祝日の入所リハビリテーションサービスの提供
- 通所リハビリテーションへのセラピスト配置の実施

③　職員の技術向上をおこなう
- 全国老健学会、近畿学会への参加発表
- 研修会への参加による技術向上
- 臨床研究の実施：リハビリテーション最新機器を導入した臨床研究

④　地域住民へ提供できるリハビリサービスを構築する
- 老健施設周囲の利用者様への訪問リハビリテーションの利用開始

リハビリテーション科

部　門：リハビリテーション部門
記載者：岡　　徹

科長：岡　徹　　主任：古塩　博史

[年間目標]

『ご利用者の在宅支援に対応した入所、通所、および訪問リハビリテーションの充実』

[体制]

2019年9月より非常勤理学療法士を2名追加し、以降セラピスト14名体制（理学療法士9名、作業療法士5名）でリハビリテーション業務を実施した。

[実績]

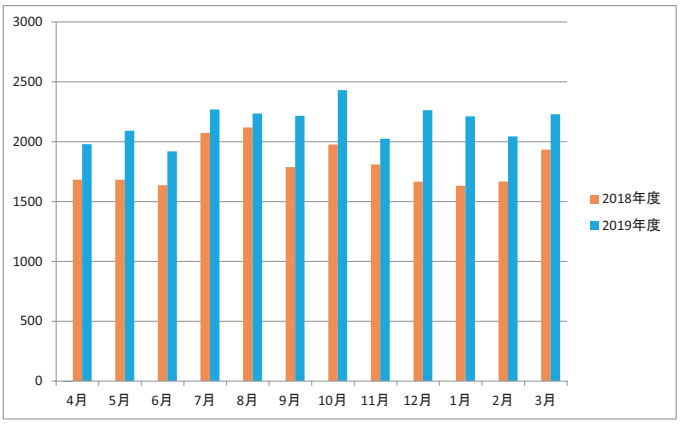
老健リハビリテーション科の業務は入所リハビリテーション、短期入所リハビリテーション、在宅訪問指導、通所リハビリテーションおよび新たに加わった訪問リハビリテーション業務がある。

入所、短期入所リハビリテーションは超強化型老健施設として入所利用者に対し個別リハビリテーションを週3回から週5回以上実施した。また、在宅復帰の見込みのある方に対して集中してリハビリを行えるよう、入所後まもなく、短期集中リハビリテーション加算と認知症短期集中リハビリテーション加算の提供をした。これにより2019年度のリハビリテーション実施総単位数は月平均2234単位と2018年度と比較して月平均430単位増加し、2017年度から継続した単位数増加を達成できた。

通所リハビリテーションに対しては常時セラピストを2名以上配置をするリハビリテーション提供体制加算を継続して算定した。これによりセラピストと介護士、介護福祉士および看護師との連携が取れるようになり利用者へのサービス向上につながったと考える。　また、4月より短時間デイサービスのコース拡大に向けリハビリテーション部としてリハビリテーション機器の導入や、短時間用リハビリテーションプログラムなどを作成した。また、新たに訪問リハビリテーションの開設を行ったことにより実生活に即したリハビリテーションの提供や通所リハビリテーションに来られない利用者への対応などが行えるようになった。

今後も在宅生活を意識した生活期リハビリテーションサービスを提供できるようにセラピスト個々の能力向上と共に、多職種との連携はもちろん、すべての部署との関わりがあるため柔軟な対応が可能な組織としても成熟させていきたい。

年間リハビリ実施総単位数の推移



通所リハビリテーション科

部　門：リハビリテーション部門
記載者：井上　淳子

科長：井上　淳子　　主任：肥田　瑞穂　　リーダー：石塚　敦子

［年間目標］

『多様化する利用者に合わせたサービスの提供と職員の働き方改革』

【業務実績】

超高齢社会に迫る勢いの日本では利用者も多様化、低年齢化の傾向がある。介護保険ではそういった背景を踏まえた制度改正が3年に1度のペースで行われている。その一翼を担っている当施設の通所リハビリテーションでも、利用者のニーズを汲み取り、2019年度は短時間利用枠を大幅にリニューアルした。

従来の1日型デイケアに加え、月曜日から金曜日に午前2時間枠と午後3時間枠を新設した。これにより利用者が3コースから選択できるようになり新規や増回、1日型からの移行を含め23名と好調にスタートすることができた。その後も利用者数は増え2019年度末には50名を超える登録者となった。短時間事業だけで無く1日型に於いても利用の依頼が多く、落ち込みのあった2018年度と比べ1日の平均利用者数は1.8名増の36.4名と回復を遂げた。

また、職員の働き方改革については利用者の増加に伴い完全とは言えないが、ノー残業デイを設定し年間34回実施することができた。

【活動内容】

短時間デイのリニューアルに伴い、広報として既存の利用者へ案内文を配布した。また、居宅や包括など、普段から利用者の案内をしていただく関係機関へもその都度細やかな事業説明を行った。実働後は利用者自身からの口コミもあり、順調に増加の推移をした。リハビリ内容についてもリハビリテーション科と協同し利用者の目的に合わせたメニュー作成に取り組んだ。その結果1日の平均利用者数は実績で4.2名と実数は1日10名を越える日もあり目標を上回る結果となった。正午からの送迎についても今までに経験のない業務であったが、回を重ねる毎に知恵と工夫を重ねスムーズに稼働することができた。また、短時間事業では男性に限り入浴の希望も受け入れ、様々な個別のニーズに対応した。

今後は更に幅広い視野で、利用者やその家族の希望に応じた支援を行っていきたい。

事務部門

記載者：矢田　圭吾

事務部長：矢田　圭吾
相談課　　課長：井上　洋一
総務課　　係長：遠藤　良太

[方針]

『施設内外の環境変化に対応し,経営の安定と人材育成に貢献する部門となる』

[主な活動]

2019年度は下記5項目を強化項目に掲げ取り組んだ。

1. 超強化型老健に向けた、指標の点数管理を行い、推移を把握し維持させる。
2. 中期設備投資計画及び災害対応マニュアル等を整備し、多角的リスクマネジメントの強化を図る。
3. 働く環境と人材育成の提案を行い、魅力ある職場環境を創造することでマンパワーの安定化を図る。
4. 地域との交流機会を持ち、施設の存在意義を地域に発信する。
5. 施設内外の関係各所と連携を図り、在宅支援体制を強化し、利用者・御家族を支援する。

上記1については、老健の役割としての在宅復帰・在宅療養支援機能を2018年度よりも推進したことで、「在宅復帰・在宅療養支援等指標」の値を合計70以上とすることができ、7月に超強化型老健へ移行した。さらに指標管理及び推移把握を継続し、2019年度末においても超強化型老健を維持することができた。超強化型老健への移行は、利用者満足度を向上させるとともに経営改善に繋がったと考える。

上記2の中期設備投資計画については、竣工後15年を迎え設備の老朽化が著しいため、優先順位を検討し計画的に設備更新を行った。特に、夏場の故障が利用者の生命に関わる空調設備の更新を行えたことが良かった。

上記3は、各部署の定数を決め計画的な採用を行うことでマンパワーの安定化を図った。2018年度同様スムーズな人材確保が課題として残ったが、定数の人材採用を行うことができた。引き続き、魅力ある職場作りに努めていく。

上記4については、2019年度も地域との交流機会を多数持つことが出来た。地域の祭りである「鷹峯ふれあいまつり」や施設主催の「夏まつり」は多くの地域住民と交流することができたイベントであるが、その他にも毎月1日と15日に実施している「あいさつ運動」（鷹峯小学校へ登校する子どもたちの見守りと挨拶を実施）を事務部中心に継続することができた。これらの機会を通し地域と施設がコミュニケーションを図りやすい関係を築くことができ、今後も継続していきたいと考える。

上記5については、住み慣れた地域で長く生活をしたいという思いを実現するため、施設内各部署と連携し利用者の在宅復帰を目標に取り組んだ。入所前、入所中、退所後を見据えたアプローチを行うことで在宅復帰への強化を図ることができた。

総務課

部　門：事務部門
記載者：遠藤　良太

係長：遠藤　良太

[年間目標]

『環境変化に対応できる的確な情報収集を行い、職員・利用者・地域への情報発信の起点となる』

[主な活動]

2019年度は様々な環境変化に対して、情報の収集・発信の起点となる部署であるということを念頭に置き、課員それぞれが役割と責任を持ち施設運営の基盤となる業務に携わることを目標とした。また、災害や設備の故障などに対して、多角的にリスクマネジメント強化をはかれるよう、施設の現状把握と問題点の改善に取り組んだ。

超強化型老健とは？という基本的なことからわかりやすく職員全体に発信するため、大判の模造紙にイラストを添えるなどわかりやすく記載し、職員の目に触れる場所に掲示した。以降月に一度、様々なテーマで情報を発信し、職員からは大変好評であった。

また、開設後15年が経過した建物や各種設備の老朽化に対し、場当たり的な対応ではなく定期的に巡回を実施して修繕箇所を予測し、計画的に修理・修繕に取り組めるよう中期設備投資計画書の作成を手掛けた。

管理栄養士分野では「学会分類2013」の導入に向けて、外部研修会への参加と課内での勉強会で周知をはかり、給食業者と協力をして食事形態の当てはめなどを行った。

そのほかでは各課員の担当業務をマニュアル化し、互いにカバーしあえる態勢を整えた。

さらに課内で月に1回勉強会を開催し互いの業務への理解を深めた。また、連絡日誌を作成し業務内外で得た情報を共有できるツールとして活用した。

6月には施設内の全館で空調設備の入替工事を行った。15年の使用の中で不具合も多く見られ、本格的に気温が上昇する前に工事を完了し、利用者の皆様に安心して過ごしていただく環境を提供できたことは一つの大きな成果であったといえる。さらに最新の空調機器の導入によりエネルギーやコストの削減にも役立った。

また、介護請求ソフト「福祉見聞録」の契約満了にあわせ、新たにソフトウェアサービス社の介護請求システム「楓シリーズ」を導入し、業務の効率化をはかった。導入にあたっては病院システム課の協力を得て、各部署と連携をとり、当初の予定通り2020年1月30日から稼動することができた。

今年度は昇任人事等により課内の態勢も大きく変わり、新たな総務課としてスタートをした。紆余曲折しながらではあるがその分話し合いを重ね、これまで以上により良い施設運営の基盤となれるような役割を担っていける部署としたい。

相談課

部　門：事務部門
記載者：井上　洋一

課長：井上　洋一

[年間目標]

『地域交流と経営安定のための収入確保を意識する』

[主な活動]

稼働率の維持・向上と収益確保のため、2018年度の（在宅復帰）強化型老健の基準から5分類最上の超強化型老健の基準取得を目指して、さらに数字のコントロールを強化した年間計画を立てた。

また指標取得のための入所前後訪問については、リハビリ職員と協働し実施していたが、件数の増加によるリハビリ職員への負担感増加と維持するべき数値目標のバランスを見ながら、より最適で安定した数字となるように、負担軽減を意識してコントロールした。

稼働率の維持・向上への工夫として、短期入所療養介護の送迎から入所受け業務をほぼ全般的に相談課職員で対応したことで、より円滑な案内、調整を実現し、新規入所者数が2018年度373件に対して、33％増の497件となり、病床ロスの少ない入退所調整につなげた。

さらにベッド稼働予定を見越した空床状況の案内を、毎月定期で各事業所にFAXし情報発信することで、入所相談の増加を図った。

入所後に利用者・家族への在宅復帰スケジュールの概要説明を行うことや、利用者・家族の在宅復帰への不安感の除去や想定していた目標までの回復が見込めない利用者に対しての目標の再設定などを行う『中間カンファレンス』を実施するなど、利用者・家族支援の体制を強化する取り組みを始めたことで、在宅復帰率は63.4％と前年比4.8％の向上につながった。

年々増加傾向（前年11件から45％増の16件）の看取りに対しては、ターミナルケアの前段階のACP（アクティブケアプランニング）に着目し、早い段階から終末期を見据えたケアについて、医師、看護師等から家族への説明を実施する機会を設けることにより、看取りケアの体制を充実させた。

以上の取り組みにより、支援相談員と介護支援専門員がそれぞれの業務を円滑に連携させることで、よりスムーズな各数字のコントロールに至り、予算計画で当初予定していた10月よりも、3ヶ月早めた7月より超強化型老健の施設基準の取得となった。

合わせて請求稼働率は2018年度比較で年間平均0.61％も向上させ、施設の収益向上に大幅に貢献できた。

2019年度から目を向けていた地域貢献に向けては、地域への感謝状贈呈の機会と合同実施を企画した家族会が、コロナウィルス蔓延により実施目前で急遽中止となったことや、数少ない地域行事への積極的な関わりをうまく持てなかったことで、目標達成できなかったため、今後の課題として、相談課として施設の窓口機能を広げていきたい。

褥瘡・感染対策委員会

記載者：藤原　京代、中島由希子

統　括：中島由希子　　委員長：藤原　京代　　副委員長：上田明日香
構成員：土井　　渉、星野　康子、小林　崇宏、塩野　紗智、平田　望、小林　憲司、
三浦　香織、肥田　瑞穂、湯浅真希子、里深　琴恵

[年間目標]

1）感染対策委員会

『感染対策マニュアルの改訂、および、アウトブレイクを来し得る感染症に対して適切な対応を行う』

2）褥瘡委員会

『褥瘡が発生しないよう医療看護介護の提供、発生時には適切なケアを提供し速やかに改善させる』

[主な活動]

1）感染対策委員会

(1) マニュアルの見直しと改訂

①ノロウイルス初期対応手順：既存のマニュアルに訂正、追加をした。

②感染性廃棄物の処理方法をマニュアルに追加した。

(2) 感染症の発生防止

高齢者施設としてアウトブレイクを来し得る感染症として、感染性胃腸炎、インフルエンザおよびCOVID-19への対策を行った。感染性胃腸炎の流行期前には全職員対象に感染の基礎知識についての研修とノロウイルスを想定した嘔吐時の初期対応練習を行った。

COVID-19の流行により11月から継続して、例年は1日1回施設内の手すりやドアノブ等の環境面の消毒を各部署で実施するところを、1日3回とした。また、職員自身の感染、外部からの感染防止のため、インフルエンザ予防策の徹底に加え、入館前の手指消毒、始業前後の手洗いとうがい、通勤時からのマスク着用、定期的な換気等の徹底を呼びかけた。利用者への面会は2月末から制限した。

インフルエンザについては、入所者および職員対象に11月からインフルエンザワクチン接種を実施した。

(3) 研修

5月　「感染対策について」
講師：西陣病院　感染認定看護師　伊藤良子氏

9月　「高齢者施設で注意すべき感染症」「ノロウイルス嘔吐時初期対応実践」
講師：藤原京代看護師

インフルエンザワクチン接種状況

全職員数	105名	接種者数	101名	接種率	99%
入所者数	85名	接種者数	73名	接種率	86%

入所者は短期入所を除く。

2）褥瘡委員会

(1)「褥瘡に対するケア計画書」の取り扱い

長期入所者に対し、入所中褥瘡が発生した場合は、2週間おきの皮膚科往診時に褥瘡評価を医師が行い、看護師が「褥瘡に対するケア計画書」を見直し、治癒まで続けることとした。治癒の後は介護職員に引き継ぎ、3ヶ月ごとの評価とした。褥瘡発生時に、当該者の情報が共有でき、悪化させない、つくらないように各専門職が密に連携を取れるよう、褥瘡計画書に関するフローチャートを作成し、マニュアルに載せた。

(2) 褥瘡予防

前年と同様に、入所者に対して、ADL状況・栄養状態やスキンチェック・在宅での情報を踏まえ、状態に応じた体圧分散マットを選定し提供した。

(3) 研修

6月　「褥瘡予防について」講師：丹羽智佳子　生活支援部長

1月　「フットケア」講師：西陣病院　皮膚排泄ケア認定看護師　多氣真弓氏

身体拘束人権委員会

記載者：岩村　隆史

統　括：岡崎　清子、岩村　隆史
委員長：田中　光穂　　副委員長：山下　由夏
構成員：矢戸みゆき、山田　遼香、人見　佳代、西井　基樹、森川　純子、神谷はる野、田中　月乃、川東　望

[年間目標]

『身体拘束がなぜ禁止されているのかということを施設内に周知し、やむをえない事情で実施する場合は適正な実施、見直しされているか確認する。利用者、家族の目線に立った接遇を行い、利用者だけでなく職員一人一人の人権にも配慮できるようにめざす』

[主な活動]

身体拘束：「これって身体拘束？」をテーマに職員アンケートを実施し、日頃から感じている疑問などについて集計を行った。またそのアンケート結果を基に、ディスカッションを中心とした身体拘束の職員研修を行い、職員内での意思統一を図った。また毎月の委員会で身体拘束解除に向けての状況を確認し、各ユニットでカンファレンスの忘れがないかのチェックを行った。

人権：毎月人権目標を設定し、それぞれ振り返りのアンケートを実施した。人権目標については施設内で問題があった事や、職員が気になった事、研修で勉強した事などをすぐに人権目標に反映する事で、職員一人一人がしっかりと考えられ、意識して取り組めるように工夫した。そして昨年度の反省を活かし、目標はより具体的に・わかりやすい文言を使用するように行った。また外部講師を招いての人権の研修を開催し、利用者・家族の立場に立って振り返る機会を設け、気持ちの良い接遇・正しい表現を考える機会となった。

[2019年度人権目標]

4月　入室する時は合図をしましょう
5月　挨拶は基本！
6月　真心がこもった挨拶を交わしていますか？
7月　個人情報を伏せていますか？～カウンター・ＰＣ・机の上まで
8月　利用者や家族にも分かる言葉づかいをしましょう
9月　親しき仲にも礼儀あり　～馴れ馴れしい言葉・態度で接していませんか？～
10月　大丈夫？その身だしなみ
11月　・入所・デイ【カーテン 閉めていますか？】
　　・事務所・リハ・推進【利用者の情報を伝える時は 周囲の状況に気を配りましょう！】
12月　利用者と関わる前に、顔を見て声をかけていますか？
1月　ちょっと待って！その一言で終わっていませんか？
2月　利用者が気持ち良く過ごせる環境作りが出来ていますか？
3月　そっと寄り添ったケアができていますか？

安全対策・リスク管理委員会

記載者：進藤　一樹

統　括：井上　洋一、土谷　幸絵
委員長：進藤　一樹
構成員：土井　　渉、石塚　敦子、太田侑以子、坪井　公子、内山　浩一、石村　優佳、
吉田　麻里、大字　倫子、岡本　孝爾、矢田　圭吾、樫本　俊兵

［年間目標］

『過去の事故をみつめ、同様の事故を繰り返さぬようにする』

［主な活動］

1）リスク管理委員会

2018年度から引き続き、月間単位で、インシデント・アクシデント報告及び事故報告のデータ化によって分析を行った。

インシデント・アクシデント報告及び事故報告から見えてくる内容については、年間を通して同様の報告が多数寄せられていることが分析の結果判明しており、より具体的な対策が求められたため、2019年度の当委員会では業務内のシステム改変について提案・実施を行った。

具体的な方法としては、記載された報告書内の対策が抽象的であり、今後同様の対策としては不十分であると委員会が判断した場合、発生部署にフィードバックもしくは再検討を要請した。

また、発生した事故に対し業務改善に踏み込んでシステムの改革を行い、提案と実施を進めた。利用終了時の忘れ物対策として、日用品のリースシステムを導入したことで、持ち込み品を減らし、管理業務を軽減させた。

さらに、年度末から年度初めに事故件数が増加する理由が、職員のユニット異動直後である点に着目し、各ユニットでのリスクをまとめてもらい、改めて部署内で確認し、新年度に備える取り組みを進めた。

2）安全衛生委員会

安全衛生委員会では、快適な職場環境の形成と職場における労働者の安全と健康を確保することを目的に活動をしており、2019年度は定期健康診断結果状況の確認や季節特有の健康問題等について協議した。また、その情報を部門代表者会議で全職員へ周知し、タイムリーな情報共有を図った。

各回のテーマは以下のとおりである。

4月　安全衛生委員会について
5月　食事と生活習慣で疲れ目・かすみ予防！
6月　梅雨の時期の過ごし方について
7月　スタミナがつく食事・疲労回復を促す食事について
8月　長時間労働の防止と健康障害対策
9月　秋の健康管理について
10月　腰痛について
11月　ヒートショック
12月　怒りのコントロール～アンガーマネジメント～
1月　花粉症
2月　質の良い睡眠と効果
3月　自律神経とは

行事・ボランティア委員会

記載者：森　篤史

統　括：森　篤史
委員長：久永　知広　　副委員長：平岡　良
構成員：遠藤　良太、大野木　茜、宅間　奈美、藤林　通代、前田　真大、加賀山隆二、人見　清美、玉記沙也香、西井　基樹、井深　竹則、古塩　博史

[年間目標]

『施設内業務予定との調整を図り、利用者の楽しみに繋ぐ年間行事計画を立案し実施する』

[主な活動]

行事・ボランティア委員会の活動としては、2018年度と同様に、構成員を3グループ（①夏祭り、②施設行事、③外部交流）に分け、各グループで事前に企画検討し、その後委員会で運営に繋げていった。

施設内最大の行事である夏祭りは、開催当日が雨天だった為、急遽屋外から屋内にレイアウトを変更し開催した。屋外で行う予定だったゲームが行えなかったり、雨対策などで慌ただしい部分もあったが、例年通り事前に雨天時の対策も考えていたので、迅速な指示が行えたことや職員・ボランティアの協力のおかげで滞りなく実施できた。

施設行事は、新たに企画したものとして墓参りレクレーションレク（9月）を行った。事前に希望者を募り、そのうち自立度が比較的高い方で、歩行や車の乗降が可能な利用者を選び実施した。また、実施までには職員による現地の下見も行い事故等が発生しないよう配慮した。当日は人員や安全面も考慮し、利用者1名のみの実施なり、規模は小さかったが参加者には大変喜んでいただき満足の出来る行事となった。また、例年行っている動物園レクは雨天のため、今年度は予定した2日間ともに中止となった。

その他、通年施設行事として雛人形飾り（3月）や、五月人形飾り（4月～5月）、敬老会（9月）や豆まきレクレーション（2月）を行った。

外部交流は、例年、近隣小学校や保育園との交流を行っている。

鷹峯小学校との交流を行うキラキラ学習については、例年施設見学と質疑応答、交流会という内容を全4回で行っているが、2019年度は小学校の都合もあり施設見学と質疑応答の2回のみで終了となった。

妙秀保育園との七夕交流会と餅つき交流会は、インフルエンザなどの感染症の影響もあり中止となった。（餅つきは園児との交流は無かったが施設のみで実施）。

鷹峯こども園との交流会は、9月にデイルームにて通所及び入所利用者を集め行った。

その他、定期ボランティアとしてシャンソン、ウクレレ演奏、ピアノ演奏を不定期に実施した。

2019年度は例年に比べ天候や感染症などの影響を受け満足に行事を行えない事や変更を余儀なくする部分も多々あった。しかし、今後も起こりうる事なので今後の対策も含め委員会として良い経験を積んだ1年だったと思われる。

生活向上委員会

記載者：松野　彰太

統　括：長尾真理子
委員長：松野　彰太　　副委員長：海東記久子
構成員：湯浅真希子、坂倉　吏江、秦　由見子、永井　千真、池村　雅美、國分　慶子、後藤　　円、森口　遥加、井上　淳子、塩見　泰基

[年間目標]

『利用者の生活に寄り添い快適に過ごしてもらうためにできることは何か考える』

[主な活動]

生活向上委員会は食事、入浴、排泄、口腔ケア等、日常生活で必要な介助方法について自立支援の観点から適切な方法・頻度を検討し活動を行った。

食事面では、委託給食業者にも会議に参加して頂き、日々の食生活の中で咀嚼・嚥下面はもちろん、嗜好などに関しての現状の問題点を抽出し、改善に繋げた。また、人手不足からユニットでの食事レクの企画が立てにくい現状を踏まえ委員会として定期的に食事レクリエーションを企画し開催した。利用者にとって食事は生活の中での楽しみの一つであるため、レクによって日常生活の充実に繋げる活動を行うことができた。普段の食事やおやつとは違ったイベントとしてのレクを企画し利用者に楽しんで頂くことができた。釜飯レクでは釜飯が炊きあがる香りを感じ五感も刺激される食事レクとなり好評であった。ケーキバイキングでは何度もおかわりする利用者もおられ喜ばれている姿を多く見る事ができた。

今年度実施した食事レクリエーション

食事レクリエーション		変わり湯	
6月	和菓子	6月	新茶湯
8月	マンゴーパフェ	8月	ラベンダー湯
11月	松茸釜飯	10月	ジャスミン湯
12月	クリスマスケーキバイキング	12月	ゆず湯
2月	握り寿司	2月	さくら湯
4月	筍釜飯		

入浴面では、2018年度に続き、安全面を考慮しながら快適に入浴を行ってもらう為に検討を行った。具体的な活動では、季節毎に変わり湯の提供を行ったり、定期的に器具確認を行い、不具合があれば速やかに修理や取り替えを行ったりと入浴環境を整えた。

排泄面では、6月にオムツ業者による排泄の勉強会を実施した。新採用職員を対象に行い、介護経験がある職員でも初めて知る事があり、根拠のあるパッドやオムツの選定及びケアに繋げることができた。また、オムツのコスト削減に向けた分析や呼びかけを行い、使用していたパッド及びオムツ等の種類を変更した。

学会発表実績

演者名	演題名	学会名	場所	開催日
矢戸みゆき	～老健での人生の終い支度～ＡＣＰを通して、その人らしいエンディングを考える	全国老人保健施設記念大会	大分	2019年11月20～22日
岡　徹	認知症高齢女性に対するネイルセラピーの効果―精神面に着目して―	全国老人保健施設記念大会	大分	2019年11月20～22日
岡　徹	介護老人保健施設入所中の片麻痺者に対する装着型随意運動介助電気刺激装具の使用経験	第59回近畿理学療法学術大会	京都	2020年3月29日（中止）

外部研修参加実績

部　門	職　種	氏　名	区分	学会研修名等
事務部門	事務職	矢戸みゆき	学会	全国老人保健施設記念大会
リハビリテーション部門	理学療法士	岡　　徹	学会	全国老人保健施設記念大会
リハビリテーション部門	理学療法士	岡　　徹	学会	第59回近畿理学療法学術大会（中止）
施設長	医師	土井　　渉	研修	介護老人保健施設経営セミナー
施設長	医師	土井　　渉	研修	医師研修会
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	介護交流会　老健を上手く活用しよう
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	京都市介護認定給付事務センター開設に係る説明会
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	始めて学ぶ役職者講座
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	実地指導対策セミナー
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	安全運転管理者講習
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	介護老人保健施設経営セミナー
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	ケアテックス2019
事務部門	事務職	井上　洋一	研修	京都府老健施設大会
事務部門	事務職	遠藤　良太	研修	きょうと福祉人材育成認証制度「上位認証」説明会
事務部門	事務職	遠藤　良太	研修	キャリアパス研修
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	きょうと福祉就活サポートプログラム　受入準備研修
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	夏期福祉職場インターンシップ　事業所向け事前研修会
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	京都府福祉職場組織活性化プログラム職員アンケート活用セミナー
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	福祉職場リクルーティング研究会
事務部門	事務職	大野木　茜	研修	福祉職場インターンシップ事業所向け事前研修会
事務部門	事務職	坂倉　吏江	研修	認定調査員現認研修会
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	健康保険委員・年金委員合同表彰式及び第1回研修会
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	年末調整説明会
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	年金委員・健康保険委員合同研修会
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	業務に活かせる！関数活用術
事務部門	事務職	秦　由見子	研修	福祉職員キャリアパス対応障害研修課程
事務部門	事務職	矢田　圭吾	研修	京都府福祉職場組織活性化プログラム職員アンケート活用セミナー
事務部門	事務職	矢田　圭吾	研修	働き方改革労務管理

事務部門	事務職	矢田　圭吾	研修	運営管理職研修
事務部門	医療技術職	湯浅真希子	研修	学会分類解説セミナー
事務部門	医療技術職	湯浅真希子	研修	第1回給食連絡会
事務部門	医療技術職	湯浅真希子	研修	栄養部会研修会
事務部門	医療技術職	湯浅真希子	研修	第2回給食連絡会
生活支援部門	看護、ケアワーカー	石塚　敦子	研修	対人援助職のためのコーチング活用講座
生活支援部門	看護、ケアワーカー	石村　優佳	研修	キャリアパス研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	井上　淳子	研修	通所リハビリテーション研修会
生活支援部門	看護、ケアワーカー	井深　竹則	研修	アサーション
生活支援部門	看護、ケアワーカー	塩見　泰基	研修	福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程　初任者コース
生活支援部門	看護、ケアワーカー	進藤　一樹	研修	リスクマネジメント研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	玉記沙也香	研修	認知症実践者研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	土谷　幸絵	研修	エンゼルケア
生活支援部門	看護、ケアワーカー	中島由希子	研修	介護・看護を担う医療従事者のための感染対策セミナー
生活支援部門	看護、ケアワーカー	西井　基樹	研修	介護のための感染対策セミナー
生活支援部門	看護、ケアワーカー	丹羽智佳子	研修	介護老人保健施設経営セミナー
生活支援部門	看護、ケアワーカー	丹羽智佳子	研修	運営管理職研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	肥田　瑞穂	研修	通所リハビリテーション研修会
生活支援部門	看護、ケアワーカー	藤原　京代	研修	嚥下障害看護
生活支援部門	看護、ケアワーカー	藤原　京代	研修	高齢者施設看護協会研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	前田　真大	研修	キャリアパス研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	松野　彰太	研修	認知症介護実践リーダー研修
生活支援部門	看護、ケアワーカー	三浦　香織	研修	キャリアパス研修　中堅職員コース
生活支援部門	看護、ケアワーカー	吉田　麻里	研修	食形態の選択・変更のタイミングと食事ケア
生活支援部門	看護、ケアワーカー	吉田　麻里	研修	脳梗塞と脳出血
リハビリテーション部門	理学療法士	岡　徹	研修	認定訪問療法士基礎研修会
リハビリテーション部門	理学療法士	岡　徹	研修	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
リハビリテーション部門	理学療法士	岡　徹	研修	日本地域理学療法・京都府理学療法合同学術大会
リハビリテーション部門	作業療法士	岡本　孝爾	研修	リハスタッフのための福祉用具選定の考え方
リハビリテーション部門	理学療法士	古塩　博史	研修	急性期病棟におけるリハビリテーション関連専門職研修会
リハビリテーション部門	理学療法士	中村　輝彦	研修	細かくみてみよう！体幹機能評価―解剖学、運動学で考える―
リハビリテーション部門	作業療法士	森川　純子	研修	住宅改修・家屋評価学習会
リハビリテーション部門	作業療法士	森口　遙加	研修	運動器疾患に対する評価を基にした徒手療法と運動療法アプローチセミナー in 東京
推進センター部門	医療技術職	藤林　通代	研修	京都市地域リハビリテーション推進研修
推進センター部門	医療技術職	藤林　通代	研修	聞いて得するシリーズ　料理を作って、認知症予防
推進センター部門	事務職	樫本　俊兵	研修	京都市地域リハビリテーション推進研修
推進センター部門	事務職	樫本　俊兵	研修	介護予防ケアマネジメントリーダー養成研修
推進センター部門	事務職	樫本　俊兵	研修	健康長寿の鍵は“フレイル予防”!!―自分でできる3つのツボ―
推進センター部門	事務職	神谷はる野	研修	中堅職員研修
推進センター部門	事務職	神谷はる野	研修	健康長寿の鍵は“フレイル予防”!!―自分でできる3つのツボ―

施設内研修開催一覧（部門横断型全体研修）

当年度は，施設職員に向けて以下の研修を開催しました。

開催日	研修名	講　師
4月19日	救急蘇生について	フクダ電子 中島由希子（生活支援部入所療養科科長）
5月31日	感染対策について	伊藤　良子 （西陣病院感染管理認定看護師）
6月12日	褥瘡予防について	丹羽智佳子 （生活支援部部長）
7月22日	権利擁護について	岡本　匡弘 （京都保育福祉専門学院学院長）
9月24日	高齢者施設で注意すべき感染症 ノロウイルス嘔吐時初期対応実践	藤原　京代 （感染対策委員会）
10月24日	口腔ケアについて	京都府北歯科医師会
11月13日	ICFの概念と老健での導入について	林　健二 （関西医科専門学校教員）
12月18日	利用者の「尊厳」と「社会的な生」を護り、支える私たちの仕事について	空閑　浩人 （同志社大学社会学部教授）
1月20日	フットケア	多氣　真弓 （西陣病院皮膚排泄ケア認定看護師）
2月28日	認知症について 権利擁護について	松野　彰太（認知症介護実践リーダー研修修了者） 玉記沙也香（認知症介護実践者研修修了者） 身体拘束人権委員会

施設内研修開催一覧（役職者対象）

7月18日	対人援助職の当事者研究について （その意義と可能性）	空閑　浩人 （同志社大学社会学部教授）
11月 7日		
2月19日		

（敬称略）

京都市レジリエント・シティ京都防災功労特別表彰について

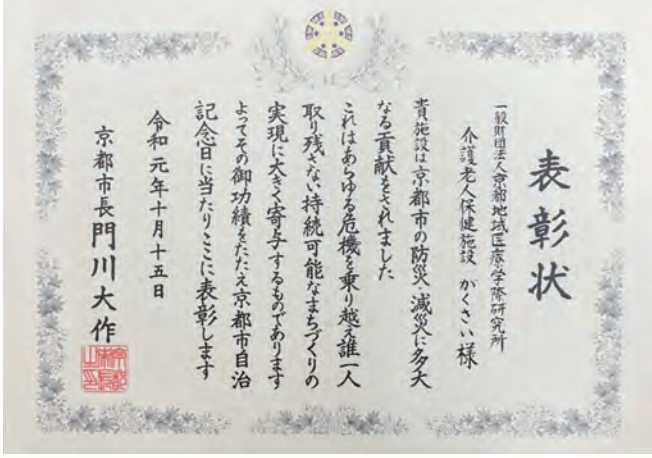
記載者：藤林　通代

京都市では、自然災害や人口減少をはじめとする様々な危機に対し、粘り強くしなやかに対応し、将来にわたって人々がいきいきとくらせる魅力と活気に満ちた都市（＝レジリエント・シティ）の実現に向けた取組が進められており、2019年10月15日の京都市自治記念式典にて、介護老人保健施設「がくさい」及び京都市北区地域介護予防推進センターがレジリエント・シティ京都防災功労特別表彰を受賞した。

介護老人保健施設「がくさい」においては、鷹峯学区での小学生へのあいさつ運動、行方不明者捜索模擬訓練への参加、高齢すこやかステーションへの登録、鷹峯すこやか学級への会場提供等の地域との密接な関わりや、2018年7月の豪雨および台風21号により甚大な被害が発生した北山3学区（中川・小野郷・雲ヶ畑）への施設備蓄品の提供等を評価していただいた。

京都市北区地域介護予防推進センターにおいては、高齢者への体操教室、調理実習を含む栄養講座や脳トレ講座などの事業の実施および各学区の地域ケア会議、北山三学区合同ケア会議、北区地域福祉推進委員会、健康長寿のまち・北区推進委員会などでのレジリエンスな課題に対する議論や取組等を評価していただいた。特に北山三学区合同ケア会議では災害後の生活不活発病防止や避難することができる体づくりを啓発し、北区地域福祉推進委員会では第四期北区地域福祉活動計画の策定に関わらせていただき、健康長寿のまち・北区推進委員会ではインターバル速歩マスター養成から引き継いで、マスターを中心とした自主グループを確立する事業を開催した。

介護老人保健施設「がくさい」の基本方針にも掲げている「地域福祉に貢献する」ことができたこと、またそのことについて評価していただいたことに感謝している。

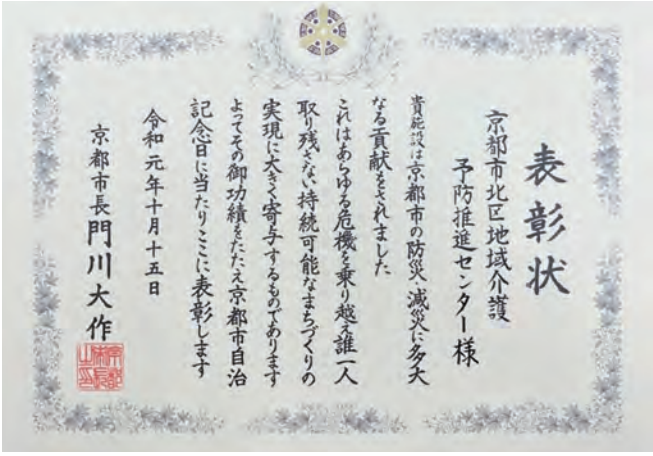

表彰状

一般財団法人京都地域医療学際研究所
介護老人保健施設　がくさい　様

貴施設は京都市の防災・減災に多大
なる貢献をされました
これはあらゆる危機を乗り越え誰一人
取り残さない持続可能なまちづくりの
実現に大きく寄与するものであります
よってその御功績をたたえ京都市自治
記念日に当たりここに表彰します

令和元年十月十五日

京都市長　門川大作


表彰状

京都市北区地域介護
予防推進センター　様

貴施設は京都市の防災・減災に多大
なる貢献をされました
これはあらゆる危機を乗り越え誰一人
取り残さない持続可能なまちづくりの
実現に大きく寄与するものであります
よってその御功績をたたえ京都市自治
記念日に当たりここに表彰します

令和元年十月十五日

京都市長　門川大作

地域貢献活動

2019年度は下記のような活動を実施した。

○交通安全

・あいさつ運動（毎月1日及び15日）

鷹峯子供安全の日という名称で、交通量の多い鷹峯街道を通って鷹峯小学校へ登校する子供たちの安全と、挨拶を通して周りの人々と繋がる大切さを子供たちに感じてもらうことを目的に、毎回10名ほどの職員が参加し実施した。

○防災

・たかがみね防災フェスタ2019（11月3日）

マグニチュード7以上の地震発生を想定した鷹峯地域住民の総合防災訓練において、車いすによる搬送訓練の講師を務めた。

○地域イベント

・今宮祭（5月5日）

御本社から御旅所へ神輿の行列が巡行する神幸祭で、施設正面玄関前を休憩場所として利用していただいた。また、利用者も祭の雰囲気を味わい喜ばれた。

・鷹峯ふれあいまつり（8月3日）

毎年開催されている恒例の地域行事で、水餃子の販売と体組成計とを設置した健康コーナーのブースを担当し地域住民に喜ばれた。

・五山の送り火鑑賞会（8月16日）

京都の夏を代表する風物詩の一つである五山の送り火を地域住民に鑑賞していただくため施設屋上を開放し、多数の方にご来場いただいた。

・夏まつり（8月23日）

2005年の開設以来、毎年8月の第4金曜日の夕方から開催しており、施設最大の行事であるだけでなく、鷹峯地域での夏の恒例行事として地域住民に多数ご来場いただいた。地域の子供たちが購入できるよう屋台で販売する価格を低めに設定し、地域住民との交流の機会とした。

○子どもたちとの交流

・きらきら学習（6月25日、1月15日）

鷹峯小学校4年生の授業の一環で、子どもたちが福祉施設を学ぶ機会として、施設見学や利用者との交流を企画実施した。

○場所の提供

・鷹峯学区各種団体共催のたかがみね絆サロン（毎月19日）
・鷹峯地域コーラス活動グループ（毎月第1・3土曜日、第2日曜日）
・ふれあいまつり実行委員会（6月21日、7月2日）
・南鷹峯町ラジオ体操（7月24日～8月6日）
・南鷹峯町地蔵盆（8月24日）

夏まつり

2019年8月23日

大雨のため、屋台を施設内に設置し開催

女子プロ野球「京都フローラ」の選手と利用者とのキャッチボール大会などを実施

RUN伴

2019年10月20日

認知症の方や家族、支援者、一般の方がリレーしながら一つのたすきを繋ぎゴールを目指すイベントに参加

京都市北自衛消防隊訓練大会

2019年9月12日

消火器操法訓練に参加し優秀賞を受賞

京都市自衛消防隊訓練大会

2019年10月31日

北区代表として京都市大会に初出場

実習生受入状況

記載者：中島由希子

2019年度の実習生は、以下の教育機関から年間受入延人数・実数で受け入れ、各部署の職員が実習生の教育に対応した。

例年と同様に、高齢者の介護を通して、老健の役割や、各職種の役割と多職種の連携等を学びにつながるように、それぞれの職種が関わった。特に、看護学生については、昨年より受入人数が増員となり、主に実習生に関わりをもつ介護職員にとっては、負担になったと思われる。

介護職員および看護職員には教えることで刺激になり自己成長に繋がり、看護学生にとっては実際の高齢者施設での経験が人としての学び・専門職としての学びに繋がるため、実習生の受け入れは大切である。

以上を踏まえて、次年度以降も状況に応じて受け入れ判断し、対応していく。

1. 実習受入

2019年度　実習生受入状況

学校名	職種	実習内容	実習期間	実習生人数
佛教大学	支援相談員 （社会福祉士）	ソーシャルワーク実習	8月、24日間	1名
同志社女子大学	管理栄養士	給食の運営	3月、5日間	2名
京都橘大学	理学療法士	検査・測定実習	2月、5日間	1名
関西医科専門学校	理学療法士	見学実習	7月、5日間	1名
		臨床基礎（見学）実習	1月、9日間	1名
京都医健専門学校	理学療法士	見学実習	3月、4日間	1名
京都府医師会 看護専門学校	看護師	老年看護実習Ⅰ	5月～11月、4日間 ※補習8月、3日間	41名 ※補習1名
京都府医師会 看護専門学校	看護師	在宅看護論実習	7月～11月、2日間	6名
京都育英館京都看護大学	看護師	高齢者支援論実習	5月～2月、4日間	113名
				168名

1）入所療養科および通所リハビリテーション科

看護師関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
京都府医師会看護専門学校	179	50
京都看護大学	436	113

2）相談課

社会福祉士関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
佛教大学　社会福祉学科	24	1

3）リハビリテーション科

理学療法士関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
関西医科専門学校 理学療法学科	14	2
京都橘大学 健康科学部理学療法学科	5	1
京都医健専門学校 理学療法科	2	1

4）総務課栄養係

管理栄養士関連

教育機関名	年間受入延人数（名）	実　　数（名）
同志社女子大学生活学部 食物栄養学科	10	2

DWAT活動報告

記載者：丹羽智佳子

［主な活動内容］

京都府災害派遣福祉チーム（京都DWAT）は、2014年に避難所において、長期的な避難生活による要配慮者の二次被害を防ぐために編成された。現在、京都府には154名がチーム員として登録している。

2019年度は被災地での活動はなく、2回の養成研修と長岡京市で行われた防災訓練に参加した。

養成研修では基本的な座学の研修と状況設定し、具体的な支援をチーム員で検討する研修が行われた。被災地での活動経験のあるチーム員が講師を行い、実際の事例等も交えて提示し、チームで支援を考える事を行った。

また、長岡京市の防災訓練では9ヶ所の小学校を避難所として開設し、今までの被災地での活動の中で運営主体や運営方法、支援団体が異なるため、各地域の特性や課題を明確にし、その避難所、避難者に応じた活動を展開する研修が開催された。この防災訓練には介護老人保健施設「がくさい」からも矢田事務部長と藤林介護予防推進センター長の両名の参加もあり、鷹峯地域における防災に関して活かせる学びもあったように思う。

また、平時の活動としては、地域住民の防災意識を向上させるように普及啓蒙活動、防災訓練、防災研修会の講師等で活動している。また、同じ地域のチーム員で施設間の交流により発災時の強力体制の強化等に取り組んだ。

2019年度の研修には関西福祉大学大学院　社会福祉学研究科の学生が参加しており、卒業論文として災害派遣福祉チームの活動内容をまとめたいとの事でチーム員がインタビューに数名が対応した。

災害時の避難所におけるソーシャルワークアセスメントに関する研究～ DWAT（災害派遣福祉チーム）の取り組みにおける一考察～として発表された。

今後、自然災害も増える中で地域での活動と「がくさい」としての福祉避難所としての役割、BCP（事業継続計画）も施設として具体的に考えて行かなければならない。特に2019年度末にコロナウイルスの感染症が発生し、感染症も踏まえたBCPの作成は重要と考える。

介護老人保健施設「がくさい」 2019年度 業績発表会

老健がくさいでは、各部署・ユニットにおける活動を毎年度末に業績発表会として、老健職員へ向けて報告会を開催しています。

その年度、特に優れた活動をした部署・ユニットに対しては、施設賞と各部長賞を授与しています。

・開催場所：介護老人保健施設「がくさい」

・開催日　：2020年3月27日

部署名（発表順）	抄　録	発表者	備　考
3階東側ユニット （清水・鞍馬）	「何気ない日々から見つけた幸せの形」施設という限られた空間でいかにその人らしく生き生きとした生活を送れるのか。何気ない日々から、気づき・発信・共感を職員間で大切にし、1年間取り組んだ内容を報告する。	久永　知広	
3階西側ユニット （嵐山・高雄）	職員視点のリハビリ・レクは必要ありません。その人にとって何が必要か、どうすれば幸せを感じてもらえるか。声を拾い、話し合い、たどり着いた認知症ケアから学んだ「その人らしく」とは何だったのでしょうか。	三浦　香織	施設長賞
推進センター	健康寿命延伸・フレイル予防を目的に、北区式包括ケアシステムのつながりの中で、介護予防に取り組んできた事業と元気な高齢者が活躍できる場所の育成について報告します。	藤林　通代	リハビリテーション部長賞
相談課	今年度の相談課の発表は数字を一切使用しておりません。超強化型老健としての使命と責任を負いながらも利用者や家族に寄り添ったハートフルな在宅支援に取り組んできました。	宅間　奈美	
リハビリテーション科	4月に訪問リハと通所の短時間デイを開設し、入所の短期集中リハの充実、研究発表に取り組んだ。新年度に向けては、他部署や他サービスと連携しつつ、訪問リハの充実と機器整備に重点を置いてゆきたい。	小林　崇宏	
総務課	総務課は施設運営に関わる情報を扱い、施設の様々な情報が集まり、施設全体を客観的に見ることができる唯一の部署です。「総務課にしかできないこと」に視点を置いて 取り組んだ内容について報告します。	秦　由見子	
2階ユニット （西陣・嵯峨・祇園・貴船）	今年度、利用者の在宅復帰に向けて職員一人ひとりが大切にしている思いや考えをもって取り組んできた。この業績発表を通じてさらなる飛躍のためにお互いの意識を共有したい。	森　　篤史	事務部長賞
通所リハビリテーション科	今年度、短時間デイケアの大幅なリニューアルを行った。成果を実感すると共に見えてきた課題として、1日型デイケアとの両立の難しさについて学んだことを報告する。	肥田　瑞穂	生活支援部長賞
1階ユニット （光悦）	ユニットに関わる職員が多い中、統一された介護の提供を目指し、利用者が安心して、生活が出来るように、そして楽しみを持って生活が出来るように取り組んだ事を発表する。	岩村　隆史	

参考）2018年度受賞

施設長賞：総務課、事務部長賞：清水ユニット、生活支援部長賞：嵐山ユニット、

リハビリテーション部長賞：嵯峨ユニット

京都市北区地域介護予防推進センター

記載者：藤林　通代

センター長：藤林　通代

[年間目標]

『自主的に介護予防に取組むための事業展開と企画、他機関共同の企画など質を充実させる』

[主な活動]

第7期京都市民長寿すこやかプランの重点取組に『健康寿命の延伸に向けた健康づくり・介護予防の推進』という項目があり、2018年度に引き続き、重点取組に意識をもって目標を立てた。

当センターは、京都市の委託を受け65歳以上のすべての高齢者を対象とした、介護予防の普及啓発（講演会・プログラム提供等）と地域活動組織支援等が主な実績である。

重点取組には、元気な高齢者が自主的に介護予防に取組むことを推奨しているため、自主活動グループの立ち上げ支援やボランティア育成にも力を入れた（52回/年）。

2019年度の新たな取り組みとして、男性のみのクラス「アクティビクス」と「インターバル速歩」を活用した自主グループの育成を行った。

「アクティビクス」とは、アクティブとエアロビクスを合わせた俗語で、担当職員が命名した。事業内容としては、自分自身で脈拍の変動やRPE（主観的疲労感）を確認し、エアロビクスを基調とした有酸素運動により運動器の機能向上を目指した。

「インターバル速歩」は、2018年度に京都産業大学と北区役所健康長寿推進課が連携し、市民ボランティア“インターバル速歩マスター”（以後、速歩マスターと呼ぶ）」を養成し、区民にインターバル速歩を普及啓発した。2019年に開催された健康長寿のまち・北区推進会議の中で、速歩マスターの活躍の場所として、当センターと協力することになり、老健「がくさい」・特養紫野・北老人福祉センターの屋上を拠点に事業を始めた。その後、老健「がくさい」では、自主グループが確立し、毎週チームが中心となり活動した。また、北老人福祉センターを拠点したグループでもチームを育成したが、新型コロナウイルス感染症の影響でしばらく活動できず、チーム確立までには至らなかった。

2019年度では、事業回数1,935回、延べ参加人数25,828名の高齢者の方に出会うことができた。要支援1から要介護2の認定を持ち、介護サービスと併用しながら参加される方も増加傾向であった。多機関との連携により新しい企画を行い、切れ目のない支援を担う1つの機関として、北区の地域福祉をさらに推進できるように事業展開していきたい。

職種別職員数

2020年3月31日現在

区分	職員数（実人数）		
	合計	常勤	非常勤
管理栄養士	1	1	0
事務コーティネーター	5	2	3
合計	6	3	3

地域活動実績・研修参加実績

地域活動実績

区単位での活動・・・

・京都市北歯科医師会・歯科衛生士会北支部主催の『歯の広場』でのブース協力
・北上認知症サポートネットワーク連絡会に係る『高齢者すこやかステーション』への協力
・「健康長寿のまち・北区」取組に係る『北区魅力再発見事業～また来たくなる北区～』にて握力測定・片足立ちテストなど体力チェックのブースを協力
・区役所健康長寿推進課と京都産業大学が養成したインターバル速歩マスターに対する『スキルアップ講座』運営に協力。栄養講座や体組成の計測など
・フナオカスタンダードでのブース出店　『介護予防の啓発とサバ缶パスタの販売』
・市民すこやかフェアにおいて、介護予防推進センターブースで計測の協力とセンター活動の啓発
・北区社会福祉協議会主催『居場所作りに関する研修』『すこやか学級実務者研修会』において、グループワークのファシリテーターとして協力
・介護予防ケアマネジメント事例検討会議へ出席。在宅支援としての推進センター事業の関わりと啓発
・区単位の地域ケア会議にあたる『包括支援センター運営協議会』へ出席。北区式包括ケアシステムの構築へ協力

圏域単位での活動・・・

・原谷包括圏域行方不明捜索模擬訓練への協力
・原谷包括圏域サービス事業所連絡会の事務局として、老健「がくさい」と共に参加

学区単位での活動・・・

・各学区すこやか学級への講師派遣と運営協力
（小野郷・中川・鷹峯・金閣・衣笠・大将軍・紫竹・待鳳・鳳徳・紫明・雲ヶ畑・上賀茂・元町・楽只・柏野・紫野）　18学区と1地区のうち16学区
・各学区の居場所サロン、各種団体活動への協力
（北区総合防災訓練、おれんじ庵・金閣、紫竹まつり、鳳徳ふれあい会、鳳徳わかば会、鳳徳オープン教室、柊野加茂川のほとり、雲ヶ畑さじきの里、元町火曜サロン、元町まつり、パークシティ北大路町内会「朝一体操」、鷹峯おとな食堂、鷹峯ふれあい祭り）

サービス事業所などとの連携活動

・紫明倶楽部「体力測定会」での測定協力　（年2回）
・総合ケアセンターきたおおじ「いきいき教室」（月1回）　手作業・おやつ作り・体操・認知症への理解と啓発
・北老人福祉センターより依頼　『認知症あんしんサポーター養成講座』を実施　認知症予防の講話とリーダー活動　『知ってて損なし』北歯科医師会の協力もあり、口腔教室を実施
・柊野福祉会主催『柊野健康福祉フェア』にて、フレイル予防の体操
・DSポラリス運営推進会議へ出席。運動特化型のＤＳからの受け皿としての活動推進

自主グループ活動の研修会と支援協力

・運動指導　『ミモザ会』『若ヶ峰』『さつき会』『インターバル速歩in鷹峯チーム』
『インターバル速歩in老センチーム』
・栄養教室　『ぐーたん』
・脳トレ活動　『脳トレサポーター養成講座』『脳トレサポーターブラッシュアップ研修』

関係機関との会議

・京都市北歯科医師会公衆衛生委員会
・「健康長寿のまち・北区」推進会議及び推進企画会議
・北上認知症サポートネットワーク会議および講習会
・北区地域福祉推進委員会
・包括支援センター運営協議会及び運営会議及びセンター長会議
・包括看護師保健師専門職部会
・「子どものまち・北区」運営会議
・各包括介護予防ケアマネジメント事例検討会
・市民すこやかフェア、鷹峯ふれあい祭り、フナオカスタンダード等実行委員会
・情報交換会（各区地域介護予防推進センターと情報交換、市との協議など）
・原谷日常生活圏域サービス事業所連絡会
・居場所つくり情報交換会
・DS（ポラリス）運営推進会議
・包括圏域、各学区の地域ケア会議
・北山3学区合同ケア会議

研修参加実績

・サルコペニアを予防・改善する栄養食事ケア
・サルコペニアを呈する方への効果的な運動について
・利用者のやる気、QOL向上につながる多職種連携
・健康長寿の鍵は、“フレイル予防”‼ ～自分でできる3つのツボ～
・住民主体による介護予防の推進に向けた研修会
・オーラルフレイル・フレイル対策研修会

第4章

在宅関連部門

訪問看護ステーション「がくさい」

部　門：在宅関連部門
記載者：藤原美智子

所長：藤原美智子　主任：桃田貴久子　主任：森脇　誠

［年間目標］

『地域に信頼される事業所運営と組織体制の強化』

［主な活動］

2019年度は、訪問看護　4867件/年（目標達成率　97％）訪問リハビリ　6468件/年（目標達成率94％）延べ1496人の利用者に訪問を行った。

今年度は、地域に信頼される事業所を目指すという目標のもとに、スタッフ一人ひとりが地域のイベントや会議などに参加して、地域住民との交流を通してニーズを知ることや訪問看護や訪問リハビリを周知してもらえるようにと努めた。また、法人内では、訪問看護や訪問リハビリの1日体験などを初めて実施した。それにより、法人内での連携を深める機会を得られたと考える。従来の看護学生実習とは別にナースセンター主催の1日訪問看護体験（インターンシップ）も1名であったが、受け入れた。今後も後進の育成や法人内での連携を行うために出来るだけ実施していきたい。

サービスの質の向上という点においては、職員全員が「家族支援」をテーマに多方面からそれぞれに研修に参加するなどして自己研鑽を行い、所内でも伝達研修を実施した。そして、訪問看護ステーションの事業拡大にむけて、事業拡大ワーキンググループを設置し、定期的に会議を行い、2020年2月には、居宅介護事業所の転居、訪問看護ステーションの所内の改修工事を行った。これまでよりもスペースも広くなり、職場環境の改善に繋がった。

在籍職員

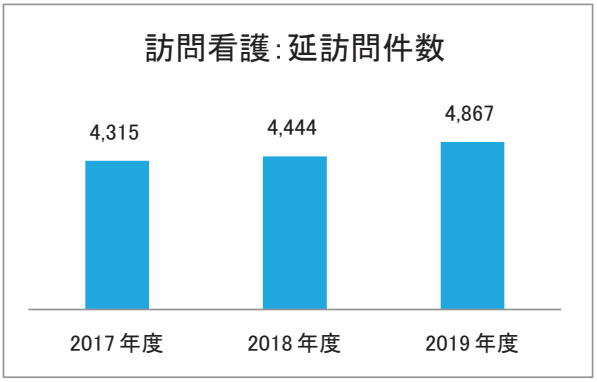
2020年3月31日現在

氏　名	役　職	職　員
藤原美智子	所長	看護師
桃田貴久子	主任	看護師
森脇　　誠	主任	理学療法士
堀井　千裕		看護師
池田　総子		看護師
福田　千紗		看護師
濱田　真美		看護師
門野　雅行		理学療法士
中川　智喜		作業療法士
松木　　玲		理学療法士
村本奈巳子		事務員

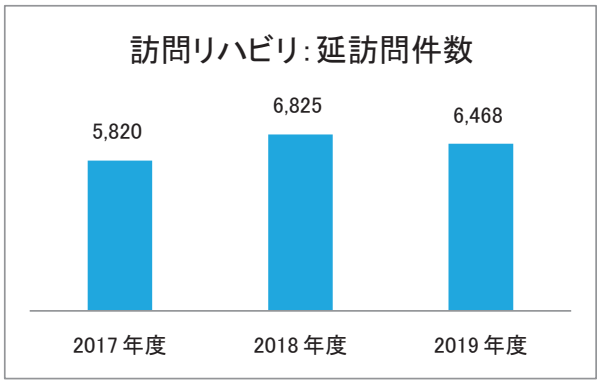
外部研修参加実績（訪問）

氏　名	職種	研　修　名
藤原美智子	看護師	認定看護師教育課程（訪問看護看護課程）
桃田貴久子	看護師	大人の発達障害を学びケアに活かそう
桃田貴久子	看護師	広小路認知症カンファレンス
桃田貴久子	看護師	高齢者の皮膚裂傷予防・スキンケア
桃田貴久子	看護師	医療と介護の現場で役立つ行動分析学
桃田貴久子	看護師	認知症患者とのコミュニケーションと療養環境の調整
桃田貴久子	看護師	在宅褥瘡・創傷ケア
桃田貴久子	看護師	裁判例から学ぶ看護ケア
堀井　千裕	看護師	医療機器使用患者の在宅療養支援
堀井　千裕	看護師	末期がん患者を持つ家族への援助
堀井　千裕	看護師	渡辺式家族看護
堀井　千裕	看護師	京都府訪問看護協議会主催　学習委員会参加
池田　総子	看護師	救急法講習会
池田　総子	看護師	緩和ケア合同カンファレンス
池田　総子	看護師	口腔ケア研修
池田　総子	看護師	感染予防研修
池田　総子	看護師	上級救命講習
福田　千紗	看護師	2019「訪問看護eランニング」を活用した訪問看護師養成講習会
福田　千紗	看護師	慢性心不全の患者の看護
福田　千紗	看護師	権利擁護研修
濱田　真実	看護師	訪問看護ｅーランニング
濱田　真実	看護師	感染予防研修
濱田　真実	看護師	医療安全・個人情報について
濱田　真実	看護師	権利擁護研修
濱田　真実	看護師	エンドオブライフケア・ELNEC- J
濱田　真実	看護師	薬師山セミナー
森脇　　誠	理学療法士	知的障害のある方の加齢変化の特徴と支援課題
森脇　　誠	理学療法士	介護・未来・フェスinイオンモール桂川
森脇　　誠	理学療法士	京都訪問リハビリテーション実務者研修
門野　雅行	理学療法士	リフトリーダー養成研修
門野　雅行	理学療法士	リハスタッフのための福祉用具選定の考え方
門野　雅行	理学療法士	SJF滋賀技術練習会
門野　雅行	理学療法士	みなくさナイトセミナー
門野　雅行	理学療法士	市身連：住宅改修・家屋評価学習会
中川　智喜	作業療法士	オレンジカフェ上京（2ヶ月に1回ボランティアとして参加）
中川　智喜	作業療法士	バリアフリー展
中川　智喜	作業療法士	日本認知症ケア学会（京都）
中川　智喜	作業療法士	北・上認知症カンファレンス
中川　智喜	作業療法士	療法士が知るべき在宅復帰に向けた準備
中川　智喜	作業療法士	京都市における地域包括ケアシステムとリハビリ専門職の役割
中川　智喜	作業療法士	家屋改修の基礎知識
中川　智喜	作業療法士	使える制度と本当に使える福祉用具
村本奈巳子	事務職	訪問看護ステーション医療事務研修

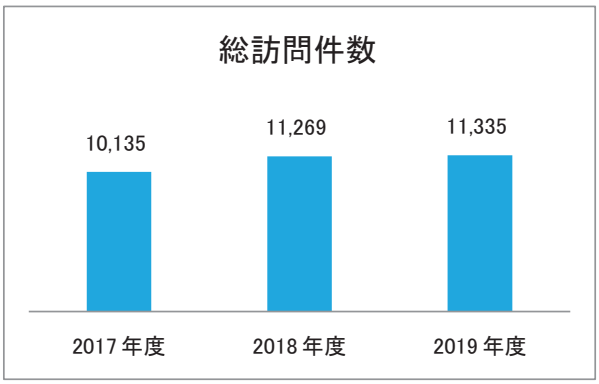
事業統計



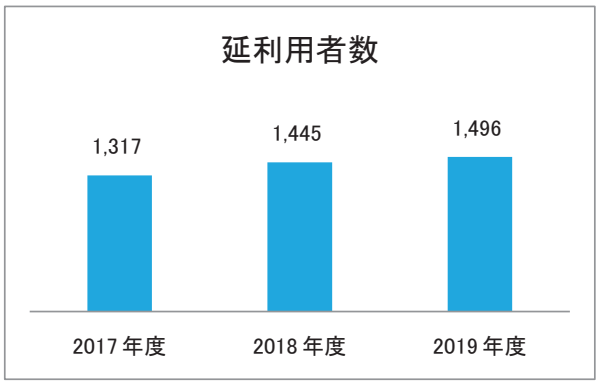
	2017年度	2018年度	2019年度
訪問件数（看護）	4,315	4,444	4,867



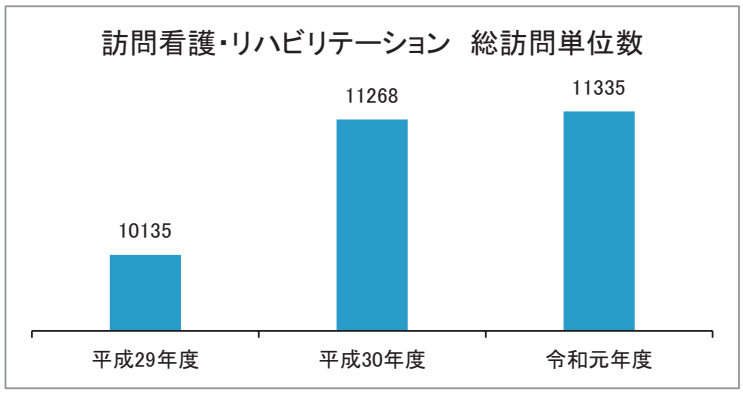
	2017年度	2018年度	2019年度
訪問件数（リハ）	5,820	6,825	6,468



	2017年度	2018年度	2019年度
総訪問件数	10,135	11,269	11,335



	2017年度	2018年度	2019年度
延利用者数	1,317	1,445	1,496



	平成29年度	平成30年度	令和元年度
訪問看護・リハ	10135	11268	11335

居宅介護支援事業所「がくさい」

部　門：在宅関連部門
記載者：下山　照美

所長：下山　照美　主任：辻村シノブ

[年間目標]

『利用者が住み慣れた地域での生活が続けられる様、事業所の組織体制を整える。』

[主な活動]

今年度は入職者や退職者はおらず、ケアマネジャー５名（常勤換算4.3名）事務１名の体制を維持し、活動する事ができた。特定事業所加算についてもⅡを維持する事ができた。

また2020年２月に訪問看護ステーションがくさいと共同で使用していた事務所から、新しい事務所に移転し、今まで活動していた範囲から少しずれた事によって、より活動範囲が広がった。

利用者人数の目標は、月平均165件を目指していたが、結果月平均162.4件、また達成できた付も２回と目標を達成できなかった。目標が達成できなかった要因としては、入院/入所の利用者の在宅復帰時期の把握が困難であった事と在宅復帰が見込まれていた利用者が長期施設入所や死去などが続いた事、２月の引っ越しに向けて、不測の事態に備えて、意識的に新規利用者の受け入れを制限していた事が考えられる。

在宅部門との連携においては、同法人包括からの新規相談人数は目標年間15件であったが、結果年間14件、同法人訪問看護との連携は目標月平均35件であったが、結果月平均24.7件といずれも達成できなかった。特に訪問看護との連携員数が大きく下回った原因としては、今回の結果に介護保険適用ではなく医療保険での依頼が数字に反映されていない為と考えられる。来年度は統計方法について反映できるよう工夫を行う予定である。法人内のケアマネジャー有資格者の１日体験を計画し、２名受け入れする事ができた。実際の居宅介護支援として仕事内容を伝えることができ、また他部署からの意見などを聞くことができるなど有意義なものとなり、今後も定期的に開催できればと思う。

書類業務の効率化という点に対しては、年度の前半は全員意識を持って行えたが、後半はやや意識が薄れ、また多忙となり、遅れがちとなったが、年度中には業務を終える事ができた。研修の参加については、京都府介護支援専門員会主催の研修や北区や上京区の事業者連絡会などを中心にケアマネジャー５名で計96研修と前年度に比べても沢山参加する事ができた。そのうちのケアマネジャー１名が主任介護支援専門員の更新研修を受ける為の条件である研修についても受ける事ができ、来年度更新研修を受ける予定となる。

在籍職員

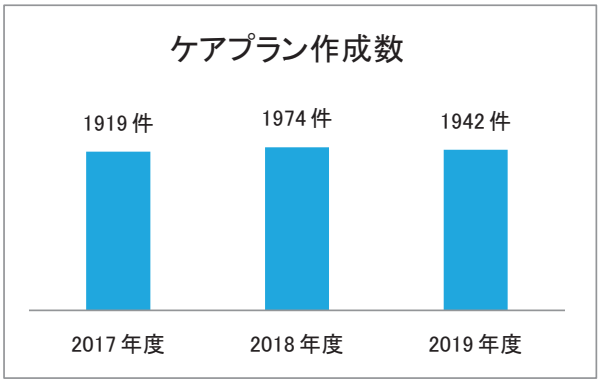
2020年３月31日現在

氏　名	役　職	職　員
下山　照美	所長	ケアマネージャー
辻村シノブ	主任	ケアマネージャー
大嶋佐百合		ケアマネージャー
北原真由美		ケアマネージャー
廣田　裕美		ケアマネージャー
森岡　尚子		事務職員

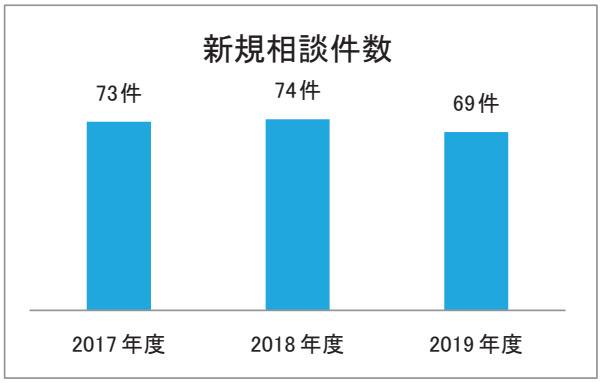
外部研修参加実績（居宅）

氏　名	職種	研　修　名
下山　照美	介護支援専門員	令和元年度　京都市北西・北東ブロック研修会
下山　照美	介護支援専門員	令和元年度地区別看取りサポート研修
下山　照美	介護支援専門員	令和元年第8回高齢者虐待防止のための研修”セルフネグレト”の実態とその支援
下山　照美	介護支援専門員	令和元年度京都市地リハビリテーション推進研修
下山　照美	介護支援専門員	「京都式」ケアプラン点検研修
下山　照美	介護支援専門員	京都市介護認定給付事務センター開設に係る説明会
辻村シノブ	介護支援専門員	透析センターの見学と意見交換会
辻村シノブ	介護支援専門員	レビー小体型認知症の理解（症例から学ぶ対応）
辻村シノブ	介護支援専門員	北上認知症カンファレンス
辻村シノブ	介護支援専門員	令和元年度看取りサポートの人材育成研修
辻村シノブ	介護支援専門員	「京都式」ケアプラン点検研修
大嶋佐百合	介護支援専門員	ここまでできる在宅医療part2
大嶋佐百合	介護支援専門員	令和元年度京都市地リハビリテーション推進研修
大嶋佐百合	介護支援専門員	よくわかる高次機能セミナー
北原真由美	介護支援専門員	ここまでできる在宅医療part2
北原真由美	介護支援専門員	令和元年度京都市地リハビリテーション推進研修
廣田　裕美	介護支援専門員	レビー小体型認知症の理解（症例から学ぶ対応）
廣田　裕美	介護支援専門員	令和元年度京都市地リハビリテーション推進研修
廣田　裕美	介護支援専門員	「京都式」ケアプラン点検研修

事業統計



	2017年度	2018年度	2019年度
ケアプラン作成数	1919件	1974件	1942件



	2017年度	2018年度	2019年度
新規相談件数	73件	74件	69件

京都市鳳徳地域包括支援センター

部　門：在宅関連部門
記載者　竹内　卓巳

センター長、科長：竹内　卓巳
主任：北村　直美（看護師）　江東　彩子（社会福祉士）

[年間目標]

『圏域を中核とする地域包括ケアを推進させ、一層の支援体制向上のため法人内連携を図る』

[主な活動]

【「公益性」「地域性」「協働性」の視点に立った活動】

地域における地域福祉推進の核となる民生委員・老人福祉員等の関係機関は日頃から緊密な連携をとることは必要かつ不可欠である。

そして今後増加の一途をたどると言われている認知症が関連する諸問題について、認知症の初期段階で集中支援を専門とする「認知症初期集中支援チーム」や医療との多職種連携の中核となり、ケアマネや多くの専門機関からの相談支援が可能ないわば支援者のための支援機関である「在宅医療・介護連携支援センター」も協働性視点を持った活動をするうえでも重要な機関となるのだ。

2019年度は北区の取り組みである「高齢すこやかステーション」事業における鳳徳包括圏域内で登録していただいている57事業所の中でも薬局や歯科医院対象を対象に多職種連携をテーマにした圏域地域ケア会議を開催した。圏域内の多くの民生委員や北医師会からDRにもご出席をいただき、多職種連携の重要性についてグループワークにて議論を行った。そしてすこやかステーション事業登録者のフォローアップ研修の場ともなった。

残念ながら2020年3月に開催予定としていた第二回目はCOVID-19感染拡大防止のため中止とした。

【介護予防事業の利用促進と地域連携・相談対応支援】

学区毎に定期開催されているサロンやカフェ等の集いや集団検診会場へ参加し、法人内の推進センターと協力して運動教室や介護予防の普及啓発に努めた。また月二回当包括内で行っている「紫明わいわい体操」も推進の一般介護予防事業の位置で定期開催しており、近隣住民からも毎回10名以上参加され、集いの場としての役割も果たしており、定期利用の方も増え満足度も高いものになっている。

また、地域連携としては毎年の紫明学区の敬老会や夏祭り、合同避難訓練にも参加し地域連携構築を担っている。

1月には北老人福祉センター世話人対象の「認知症サポーター養成講座」を開催し、認知症の正しい知識を普及啓発する場として活用していただいた。

圏域内の医療機関や専門機関からの新規相談件数も月平均23件あり、必要に応じて成年後見制度についての説明や繋げる支援を行い、虐待通報があれば行政、ケアマネやサービス事業所等と連携。必要に応じてケースカンファレンスを開催し、支援方針の検討と支援をしている。

在籍職員

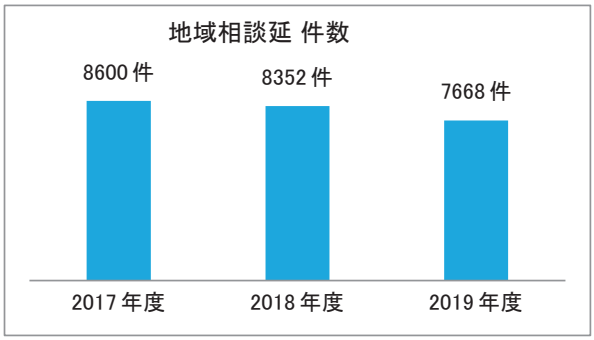
2020年3月31日現在

氏　名	役　職	職　員
竹内　卓巳	所長	ケアマネージャー
北村　直美	主任	看護師
江東　彩子	主任	社会福祉士
堀　　典子		ケアマネージャー
畑中　雪江		ケアマネージャー

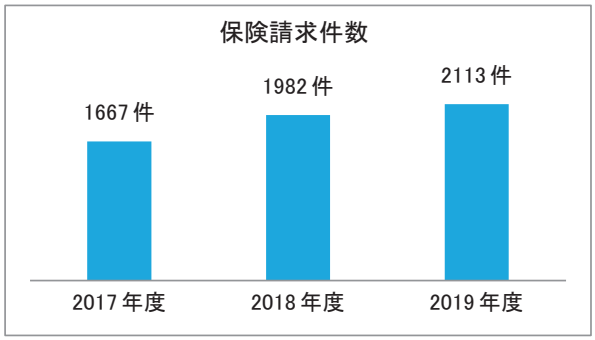
外部研修参加実績（包括）

氏　名	職種	研　修　名
竹内　卓巳	介護支援専門員	2019年度　介護予防ケアマネジメントリーダー養成研修
竹内　卓巳	介護支援専門員	2019年度　地域包括支援センター管理者責任者研修
竹内　卓巳	介護支援専門員	2019年度　京都市北西ブロック合同研修会
竹内　卓巳	介護支援専門員	2019年度　包括協研修
竹内　卓巳	介護支援専門員	北区特別講座　「～認知症を知り、地域で支えあおう～」
竹内　卓巳	介護支援専門員	広小路カンファレンス
北村　直美	看護師	2019年度　地域包括支援センター職員等現任者研修
北村　直美	看護師	京都府看護協会　三職能合同研修会
北村　直美	看護師	北区特別講座　「～認知症を知り、地域で支えあおう～」
北村　直美	看護師	広小路カンファレンス
北村　直美	看護師	医療介護連携研修
江東　彩子	介護支援専門員	市町村等職員のための高齢者虐待対応に関する研修会
江東　彩子	介護支援専門員	医療介護連携研修
江東　彩子	介護支援専門員	北区特別講座　「～認知症を知り、地域で支えあおう～」
堀　　典子	介護支援専門員	地域課題抽出研修会
堀　　典子	介護支援専門員	北区特別講座　「～認知症を知り、地域で支えあおう～」

事業統計



	2017年度	2018年度	2019年度
地域相談 延件数	8600件	8352件	7668件



	2017年度	2018年度	2019年度
保険請求件数	1667件	1982件	2113件

第5章

法人運営等

法人事務局

記載者：竹村　淳一

本年度の法人事務局は、法人ビジョンの段階的な実現のために主に以下の項目において注力した。

1.経営基盤の安定化

①収支状況（2019年度、法人全体）　（単位：千円）

	2019年度末(A)	2018年度末(B)	増減（A-B）
経常収益	2,890,000	2,751,000	138,000
経常費用	2,737,000	2,615,000	122,000
経常増減額	152,000	136,000	16,000
経常外増減	0	△24	△24
法人税等	72	72	0
正味財産増減額	152,000	136,000	16,000

法人の主力事業である病院と老健は引き続き順調な業績であった。医師体制の充実・稼働率の維持・施設基準類上げなどが主な要因であり、職員全員がそれぞれの目標に向かって尽力して頂いた結果である。この場をお借りして感謝申し上げます。

②在宅事業拡大：訪問看護ステーション（訪問ST）、居宅介護支援事業所（居宅）

当法人が考える地域包括ケアを実現するためには訪問STと居宅を拡大する必要がある。2019年度9月から事業拡大ワーキンググループを組織し拡大準備をした。大きな課題は職場環境であった。訪問STと居宅は同じ建物に入っており、スペースも余裕がなかったため専門職増員と職場環境改善ができない状態であった。2020年2月に居宅移転が実現し、両方の事業で専門職増員ができる環境が整った。次年度以降、専門職増員を図り本格的な事業拡大を進める。

2.新しい組織活性化の仕組み提案

①病院機能評価委員会

2019年度にワーキンググループを組織し、病院機能評価受審に向けて対策を講じてきた。職員の尽力もあり認定を受けることができた。今後は、そこで改善した機能を維持・向上してゆかなければならない。受審時には一部の職員が改善活動に関わっていたが、今後はより多くの職員が関わる仕組みが必要である。そのような目的から『病院機能評価委員会』を発足した。委員会発足後の最初の活動は、機能評価項目を多くの職員と共有し改めて改善点を挙げることにした。現場視点の多くの意見があり、それを基にして新しい改善活動を継続中である。

②倫理コンサルテーションチーム（ECT）

臨床倫理を強化するためには、職場習慣や基本的な考え方を見直す必要がある。しかし職員にとって臨床倫理で取り上げるべきテーマは忙しい日常業務に忙殺されてしまうことが多い。業務の中で、少し立ち止まって考えるべきテーマを見つけ出し、倫理的視点で検討を促すチームが必要である。そのような目的からECTを提案した。それまで聞くことが少なかった「倫理」というキーワードを最近は聞けるようになっており、少しずつ職場風土が変わっていることを実感している。

4月以降、COVID-19の脅威が本格化している。法人事務局として感染防止対策や職員衛生管理の強化を支援しなければならないと考えている。

理事会・定時評議員会

一般財団法人京都地域医療学際研究所 第23回 理事会

1. 日　時
2. 場　所　書面決議（日程調整が困難であるため）
3. 議　題
   - ・第1号議案　2018年度事業報告について承認を求める件
   - ・第2号議案　2018年度収支決算について承認を求める件
   - ・第3号議案　第10回定時評議員会の議案並びに開催日程について承認を求める件

一般財団法人京都地域医療学際研究所 第10回 定時評議員会・第24回 理事会

1. 日　時　2019年6月24日　午後2時00分
2. 場　所　ANAクラウンプラザホテル京都「醍醐の間」
3. 議　題

（1）報　告

- ・2019年度 取り組み状況について
- ・理事長、副理事長並びに常務理事（事務局長）の業務報告について

（2）議　事

- ・第1号議案　2018年度一般財団法人京都地域医療学際研究所事業報告について承認を求める件
- ・第2号議案　2018年度収支決算について承認を求める件
- ・第3号議案　理事及び監事・評議員の選任及び解任について承認を求める件
- ・第4号議案　理事長、副理事長及び常務理事の選定について承認を求める件
- ・第5号議案　定款の一部変更について承認を求める件

一般財団法人京都地域医療学際研究所 第22回 理事会

1. 日　時
2. 場　所　書面決議（COVID-19による影響のため）
3. 議　題

（1）報　告

- ・2019年度取組み状況について
- ・2019年度決算見込みについて
- ・理事長、副理事長並びに常務理事（事務局長）の業務報告について

（2）議　事

- ・第1号議案　2020年度一般財団法人京都地域医療学際研究所事業計画並びに予算について承認を求める件
- ・第2号議案　2020年度短期借入金について承認を求める件

一般財団法人京都地域医療学際研究所 法人運営会議 議事内容

法　　人：森理事長、久保所長、
　　竹村事務局長
病　　院：上島院長、菅副院長、前田回復期リハビリテーション部長、日野整形外科部長、
　　小牧スポーツ整形外科部長、細越看護部長、中井医療技術部長、吉田事務部長
老　　健：土井施設長
　　丹羽生活支援部長、岡リハビリテーション部長、矢田事務部長

2019年度議事次第

[4月] 1. 人事に関する件 2. 倫理的風土の強化に関する仕組みに関する件 3. 育児・介護休業規程の改訂に関する件 4. 2019年度 夏季賞与支給に関する件 5. 2019年度 スポーツクラブ補助に関する件 6. 英会話サークルの提案に関する件	[5月] 1. 人事に関する件 2. 訪問リハビリテーション事業開設に関する件 3. 急性期一般入院基本料5の取得に関する件 4. 2018年度 下期目標の結果に関する件
[6月] 1. 人事に関する件 2. 超強化型老健の取得に関する件 3. 2019年度 各部署目標の策定に関する件	[7月] 1. 人事に関する件 2. 2018年度 財務分析について
[8月] 1. 人事に関する件 2. 2019年度 職員満足度調査結果に関する件 3. 土曜日診療体制に関する件 4. 通勤手当の改定に関する件	[9月] 1. 人事に関する件 2. 警報時特別勤務取扱要綱の制定に関する件 3. 処遇改善加算に関する件 4. 夜間勤務手当の改定に関する件 5. 電子カルテシステムの導入費用に関する件 6.『即位礼正殿の儀』の祝日手当に関する件 7. 2018年度 法人年報の発刊に関する件
[10月] 1. 人事に関する件 2. 上期　収支状況・事業活動状況に関する件 3. 在宅事業所の分割に関する件	[11月] 1. 人事に関する件 2. 2019年度 冬季賞与支給に関する件 3. 2019年度 永年勤続表彰者に関する件 4. 2020年度 予算策定に関する件
[12月] 1. 人事に関する件 2. 修学金制度申請に関する件	[1月] 1. 人事に関する件 2. 修学金制度申請に関する件 3. 組織体制に関する件
[2月] 1. 人事に関する件 2. 新型コロナウイルスの対応と影響について 3. 2020年度 診療報酬改定の影響について	[3月] 1. 人事に関する件 2. 2020年度 部門方針に関する件 3. 2019年度 法人年報の策定に関する件

クラブ活動：野球部

記載者：吉田　潤

・代表：下谷　聡
・がくさい病院
　相馬　寛人、下谷　聡、正生　拓海、吉田　純、吉田　潤、髙田　賢悟、
　平河　雄太、新谷　圭由、小林　剛、西尾　大智、森　直樹、塚田　徹、
　馬淵　拓実、蛭子　拓真、浦田　雄史、阿部　哲也、井上　歩美
・老健がくさい
　遠藤　良太、井上　洋一、平岡　良、久永　知広、中村　輝彦

部員数　22名

[主な活動]

京都私立病院協会主催 病院対抗野球大会に参加、本年度は毎月1回の練習を目標として活動を行った。

病院対抗野球大会（4月14日開催、みどりが丘公園野球場）は、1回戦で前年準優勝チームとの対戦となり苦戦を強いられた。0対10と大差をつけられての最終回、打線が繋がり、土壇場で5点を返すことが出来た。最終的に相手のファインプレーでゲームセットとなったが、この時のチーム結束力は素晴らしいものがあり、あらためて、がくさい病院のチーム力の強さというものを実感した。しかしながら、やはり日頃の練習不足は否めない。この後、他病院との練習試合と、毎月1回の練習日を設定してグラウンドの確保を行いましたが、練習日は、ことごとく雨天に見舞われてしまい、本年度の活動はあまり行えずに終わってしまった。日祝日・昼間での活動は、勤務の都合により集まりが悪く、どうしても夜（ナイター）の活動となりがちである。そのような中であるが、なるべくチーム練習日を増やし、チーム力のアップを目指して活動を継続していきたいと思っている。４月に入職した新メンバーも加わり、なによりも怪我なく、楽しく活動することができた。

最後に、クラブに所属していなくても練習や試合への参加はできるので、どなたでもお気軽に声かけをいただき、参加してもらえたらと思っています。初心者、女性の参加も大歓迎です。沢山の方々の参加をお待ちしております。

クラブ活動：フットサル部

記載者：新谷　圭由

・代表：下谷由紀乃（がくさい病院）
・がくさい病院
　下谷由紀乃、田﨑亜友美、蛭子　拓真、下谷　聡、礒島　大志、相馬　寛人、
　吉田　純、西村竜太郎、森本　雅之、佐織　歩、浦田　雄史、新谷　圭由、
　髙田　賢悟、平河　雄太、馬淵　拓実、榊原久見子
・老健がくさい
　遠藤　良太、久永　知広、松野　彰太、中村　輝彦
・法人事務局
　竹村　淳一

部員数　21名

[主な活動]

学際研究所フットサルチームは病院職員と老健職員などから20名で構成されており、全体練習と京都私立病院協会フットサル大会に参加等の活動をしています。

2019年度は、京都私立病院協会主催の「第14回病院対抗フットサル大会」に参加しました。限られた時間内で練習を積み重ね試合に挑みましたが、１勝2敗と惨敗、予選敗退と残念な結果に終わりました。年々参加されている他病院のレベルが上がっており、予選突破の壁が高くなっている様に感じました。来年こそは予選突破できるように、また1年間練習に励みたいと思います。ご声援いただいた皆様、ありがとうございました。

フットサル部では、部に所属していなくても練習だけでも参加することができます。部活動を通じて、法人内職員のコミュニケーションの輪が広がると良いと考えております。初心者や女性の方の参加も大歓迎です。沢山の参加をお待ちしております。

クラブ活動：バレーボール部

記載者：村本奈巳子

・代表：山田　美香　・会計：中井登代美
小牧伸太郎、日野　学、古川吏恵美、清水　真弓、坂口　早希、小塚　理恵、
岡田　里奈、下谷由紀乃、田崎亜友美、礒島　梓、太田垣沙和、松下　歩惟、
蒲田　景斗、川上　幸奈、石田沙与里、柴山　美穂、榊原久見子、小林　依子、
下村由香里、村本奈巳子

部員数：22名

[主な活動]

2019年度の学際研究所バレーボール部の登録は、病院・在宅部門職員等から男女合わせて22名のメンバーで構成されている。活動としては、月２～４回程度の練習や練習試合と、京都私立病院協会主催 病院対抗女子バレーボール大会に参加した。

第42回病院対抗女子バレーボール大会（8/25太陽が丘体育館、10/20横大路体育館）では、予選大会は１勝１敗の成績で予選突破し、決勝大会に進むことができた。決勝大会は残念ながら１回戦敗退となった。今大会も男性メンバーの参加が認められ、がくさいチームも男性メンバーが参加し、より力強いチームで戦うことができた。両日とも、法人内外からのたくさんの熱い応援があり、チーム躍進の原動力となった。次年度も、メンバー全員が楽しんで勝ちあがれるような試合ができればと思っている。

毎月の練習では、メンバーの所属する地域の体振チームやその近隣体振チームと合同練習や練習試合を月に数回行った。また、地域体育館を利用し、男女や経験の有無を問わず、練習や練習試合を行うことで、部門や部署を越えたメンバーとの交流ができた。

練習試合や練習は、多くのメンバーが参加できるように、勤務終了後の夜に行っている。勤務後の疲れた中でも元気に体を動かすことで、運動不足解消やストレス発散にもなり、楽しむことができたと思われる。

バレーボール部では、クラブに登録していなくても、練習や試合への参加が可能である。部活動を通じて、様々な部署の職員のコミュニケーションの輪が広がるような、クラブにしたいと考えている。経験の有無、年齢、男女問わず、新入職員の方も含め、沢山の人の参加を待っている。今後も、楽しくたくさんのメンバーと一緒に活動したい。

クラブ活動：テニス部

記載者：鈴鹿　三郎

上島圭一郎、前田　博士、日野　学、小牧伸太郎、下村　征史、久保　元則、
丹羽智佳子、中井登代美、山田　美香、古川吏恵美、林　亮治、下村由香里、
鈴鹿　三郎、鈴木貴美子、岩永　久乃、柴田　和子、中谷　道子、高橋　和子、
中川　裕子、長野　国洋、田中　美帆、進士　初枝、阿部　哲也、井上　歩美、
太田　絢野、馬淵　拓実、宮城　真穂、正生　拓海、三好　歩美、坂口　延枝、
吉川　美稀、東山　昌子、村本奈巳子、樫本　俊平

部員数：34名

［主な活動］

2018年度よりテニス同好会として月1回テニス活動を実施してきた。同好会での活動実績が認められ、2019年度より正式にテニス部としての活動が承認された。

毎月1～2回、西院テニスコートを会場としテニスを実施。院内各部署・法人内事業所からの参加があり、普段の業務では直接関わる事が少ないメンバー同士の交流が活発に行なわれた。

また、テニス部主催の懇親バーベキューを開催しスタッフの家族も含め大勢の参加が得られた。

テニス初心者でも楽しめるよう、テニス経験者がコーチ役となり基礎練習の時間を毎回設けた事でメンバー全体のレベルアップがはかれた。しかし、月1回から2回の活動ではゲーム形式での練習ができるレベルまでには至らず、目標としていた練習試合の実施には至らなかった。

次年度は練習体系を整え、クラブ内で試合形式練習ができるようにしていきたい。

2019年度テニス部活動開催数10回／年
平均参加者数11人／回

年　　表

<table>
<tr><th>年　次</th><th>月</th><th>事　　項</th></tr>
<tr><td>昭和56年
(1981年)</td><td>6

8
11

12</td><td>社団法人京都府医師会第108回臨時代議員会，財団法人京都地域医療学際研究所設立にあたり基本財産として1,000万円の拠出を承認
京都府医師会会長有馬弘毅，京都府知事へ法人設立許可申請
法人設立許可
初代理事長に京都府医師会会長有馬弘毅就任
法人設立登記</td></tr>
<tr><td>昭和57年
(1982年)</td><td>12</td><td>京都府・京都市へ施設設備補助金の交付を要望、次年度より交付
補助金交付一覧
<table>
<tr><th rowspan="2">区　分</th><th colspan="2">補　助　金</th><th>補助額（延納利息）</th></tr>
<tr><th>京　都　府</th><th>京　都　市</th><th>京　都　府</th></tr>
<tr><td>昭和58年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>34百万円</td></tr>
<tr><td>59年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>45百万円</td></tr>
<tr><td>60年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>24百万円</td></tr>
<tr><td>61年度</td><td>125百万円</td><td>125百万円</td><td>5百万円</td></tr>
<tr><td>計</td><td>500百万円</td><td>500百万円</td><td>108百万円</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>昭和58年
(1983年)</td><td>5

7
7

7
8

10
12
12</td><td>清和建築設計事務所へ京都地域医療学際研究所施設工事の設計・工事監理委託
済生会京都府病院より跡地の土地・建物引継
済生会京都府病院と土地・建物売買契約
ファクシミリシステムリース契約開始（最多契約数400台、昭和62年8月以降新規契約中止）
竹中工務店と工事契約
修抜式・工事着工
募金活動開始
寄付金総額　573件　158,912千円
内訳
医師会員　504件　75,112千円
そ の 他　69件　83,800千円

理事　藤和大祐　初代研究所所長就任
施設工事完了
開所式
京都府知事へ病院開設許可申請
診療科　内科・外科・整形外科
病床数　50床</td></tr>
</table>

昭和59年 （1984年）	1	京都府立医科大学　講師　木谷輝夫　病院長就任
	1	附属病院　開院式
		附属病院　開設許可（1月17日　診療開始）
	3	建物所有権移転登記
		土地所有権移転登記
		有馬弘毅理事　理事長辞任（京都府医師会長退任）
	4	田邊朋之理事　理事長就任
	6	附属病院　基準給食実施承認
	10	附属病院　病床数変更許可（101床）
		附属病院　基準寝具（病衣）実施承認
	12	全国高校駅伝競走大会の救急医療機関指定
昭和60年 （1985年）	1	全国都道府県対抗女子駅伝競走大会の救急医療機関指定
	4	運動時心臓障害の相談（心臓検診）事業開始
	7	「老人栄養生態調査」の実地調査実施
	12	「難病の治療・看護調査研究」の調査研究班加入、調査開始
昭和61年 （1986年）	8	スポーツ選手の筋力測定診断事業開始
	9	「高齢者の体力に関する調査」
	10	土地所有権移転登記
昭和62年 （1987年）	8	「高齢者の体力に関する調査」
	11	高齢者の健康相談会開催
昭和63年 （1988年）	1	難病相談会開催
	2	附属病院　基準看護一類実施承認
		附属病院　運動療法の施設基準実施承認
	2	高齢者療養相談会開催
	3	腎疾患相談会開催
	4	附属病院　基準看護（基本看護料）実施承認
	8	「高齢者の体力に関する調査」
	11	在宅治療難病患者の訪問指導事業の訪問開始
	12	難病講演会と相談の会開催
	12	高齢者の食生活調査と栄養指導開始（平成5年まで）
平成元年 （1989年）	2	寝たきり老人入浴サービス事業開始
	3	老人健康講座開始
	8	田邊朋之理事長　京都市長就任により辞任
	8	大森圭造副理事長　理事長職務代行
平成2年 （1990年）	1	附属病院　基準看護特一類実施承認
		京都府医師会長　松尾　裕　理事長就任
	4	附属病院　基準看護特二類実施承認
平成3年 （1991年）	3	藤田大祐　研究所所長辞任
	4	前大阪空港検疫所長　遠藤治郎　研究所長就任

平成4年 (1992年)	9 10	厚生大臣　老人訪問看護ステーションに係る認定法人等認定 京都府知事　老人訪問看護事業者指定（京都府1号） 指定老人訪問看護事業開始
平成5年 (1993年)	5	附属病院　CT装置更新（東芝製） 附属病院　手術室改修
平成6年 (1994年)	3	松尾　裕　理事長辞任（京都府医師会会長退任） 横田耕三　副理事長　理事長就任 附属病院　診療科目追加（神経内科・皮膚科） 開設10周年記念式典（京都全日空ホテル）
平成7年 (1995年)	3 4	「優秀自主防火事業所」京都市長表彰 スポーツ医科学センター開設 アスリート体力測定診断・相談事業開始
平成8年 (1996年)	9	京都市在宅介護支援センター開設 介護相談事業開始
平成10年 (1998年)	4	所長　遠藤治郎　辞任 附属病院　病棟・改修工事開始（平成11年4月完成） A病3階病棟（21床）を「療養型病床群」改変
平成11年 (1999年)	4 10	前京都府立医科大学耳鼻咽喉科教授　村上　泰　所長就任 附属病院　診療科目追加（耳鼻咽喉科） 附属病院　診療科目追加（放射線科・リハビリテーション科）
平成12年 (2000年)	4	介護保険事業開始（京都府知事指定）
平成13年 (2001年)	4	評議員会設置
平成14年 (2002年)	1 3 4 11	全館内の禁煙実施 横田耕造理事長辞任（京都府医師会長退任） 京都府医師会長　油谷桂朗　理事長就任 附属病院　診療科目追加（消化器科・循環器科） 館内BGM有線放送開始
平成15年 (2003年)	1 3 7 10 11	「京都府婦人消防隊等優良施設」京都府消防協会長表彰 A棟玄関自動的にドア設置 京都市介護老人保健施設整備費補助金内示 介護老人保健施設建設工事指名競争入札実施 竹中・田中特定建設工事共同企業体　最低価格提示 田中偉晃　一級建築士事務所と介護老人保健施設設計・監理業務委託契約締結 竹中・田中特定建設工事共同体企業と工事請負契約締結 介護老人保健施設「がくさい」建設工事起工式・地鎮祭

平成16年 (2004年)	4	旧京都銀行紫野支店跡取得・改修工事開始（6月完成）
		附属病院　病院薬剤部　院外処方箋発行開始
	5	附属病院　CT装置更新（東芝製）
		附属病院　A棟1階事務室オープンカウンター設置・薬剤部移転等工事
	7	附属病院　放射線科デジタル画像処理システム導入
	10	設立20周年記念式典・祝賀会（京都ブライトンホテル）
	11	介護老人保健施設「がくさい」建設工事完成
	12	介護老人保健施設「がくさい」竣工披露式・祝賀会
平成17年 (2005年)	1	介護老人保健施設「がくさい」開所式
	3	駐車場管理システム設備工事（4月完成）
		北大路別館1階 改修工事（訪問看護ステーション、在宅介護支援センター移転）
		B棟1階 改修工事（スポーツ医科学センター）を移転
	4	駐車場管理システム（アマノ製）運用開始
		A棟1階・2階診察室等改修工事（4月29日～5月8日）
		B棟1階改修工事「スポーツ医科学センター」（4月23日～5月1日）
	5	A棟1階・2階診察室・処置室・点滴室・検査室改修工事完成
		駐輪場設備（日本駐輪）設置
		電飾看板2台新設（大宮通）
	6	自動体外式除細動器（AED）「フィリップス社製　ハート　FR 2」設置
	7	A棟4階・5階病室給排水設備・酸素吸引設備増設工事（7月1日～8月31日）
		A棟・B棟外壁塗装工事（7月1日～12月24日）
		A棟・B棟・北大路別館防犯カメラ増設工事
	8	介護老人保健施設「がくさい」第1回夏祭り（地域交流のため毎年8月に開催）
	10	敷地内禁煙実施
平成18年 (2006年)	3	油谷桂朗理事長　辞任（京都府医師会長退任）
	4	京都府医師会長　森　洋一　理事長就任（第6代理事長）
		京都市鳳徳地域包括支援センター　京都市から受託開始
		健康スポーツクラブ「がくさいウェルネス」事業開始
		附属病院　病棟改修工事開始
	6	附属病院　病棟改修工事完成
	7	学際股関節研究センター　設置
		附属病院　病棟改修キャンペーン実施（～10月）
	8	附属病院　患者満足度調査実施
	10	介護老人保健施設「がくさい」予防通所リハビリテーション開設
	12	附属病院　厨房・栄養科　床改修工事
平成19年 (2007年)	1	附属病院　開院23周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設2周年
	3	第13期理事会・第3期評議員会　役員任期満了
	4	第14期理事会・第4期評議員会　役員就任
	7	A棟4階一般病床（40床）を「障がい者病床」に変更
	10	全国老人保健施設研究大会研究発表
	11	附属病院　オーダリングシステム稼働開始

平成20年 (2008年)	1	附属病院　開院24周年
		介護老人保健施設「がくさい」 開設3周年
	3	木谷輝夫病院長　退院
		スポーツ医科学センター休止
		寝たきり老人の入浴サービス事業終了
	4	村上泰所長　病院長代行就任（兼務）
	7	A棟4階5階病棟ベッド休止（40床→38床）
	8	監査法人トーマツによる病院経営分析調査
	11	近畿老健大会
	12	経営改善審議会　開始
平成21年 (2009年)	1	附属病院　開院25周年
		介護老人保健施設「がくさい」 開設4周年
	3	腎疾患相談事業休止
		第14期理事会・第4期評議員会　役員任期満了
	4	第15期理事会・第5期評議員会　役員就任
		附属病院　平田俊幸 診療部長　病院長就任
	9	近畿厚生局　施設基準適時調査
平成22年 (2010年)	1	附属病院　開院26周年
		介護老人保健施設「がくさい」 開設5周年　記念式典・祝賀会（大谷大学）
		インフルエンザワクチン一斉接種　実施
	5	A棟エレベーター改修工事（三菱電機ビルテクノサービス）
	10	国税調査実施
平成23年 (2011年)	1	附属病院　開院27周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設6周年
		地上デジタル放送対応テレビ導入
	3	第15期理事会・第5期評議員会　役員任期満了
	4	第16期理事会・第6期評議員会　役員就任
		北大路別館1階に防犯カメラ増設
	7	A棟3階　療養型病床（21床）を「一般病棟」に変更
平成24年 (2012年)	1	附属病院　開院28周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設7周年
	6	特例民法法人京都地域医療学際研究所　最初の評議員就任
	9	一般財団法人京都地域医療学際研究所　移行認可
	10	一般財団法人京都地域医療学際研究所　登記完了
		第1期評議員　就任
		第1期役員　就任
平成25年 (2013年)	1	附属病院　開院29周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設8周年
	3	村上泰所長　退任
		本庄英雄副所長　退任
		A棟4階浴室増設

平成25年 （2013年）	4	森洋一理事長　所長就任（兼務）
		小西哲郎　病院長就任
	5	回復期リハビリテーション病棟開始（52床）
		一般病棟病床数変更（40床→38床）
	6	第２期評議員　就任
		第２期役員　就任
	9	健康スポーツクラブ「がくさいウェルネス」事業終了
	10	新病院内覧会
		建物引渡し
	11	病院移転
		近隣住民対象病院見学会
		新病院外来診療開始
平成26年 （2014年）	1	がくさい病院　開院30周年記念式典・竣工式典
		介護老人保健施設「がくさい」 開設10周年
	10	回復期ワーキンググループ発足・医療法人輝生会　業務支援開始
		介護老人保健施設「がくさい」 開設10周年記念式典
	11	がくさい病院移転1周年
平成27年 （2015年）	1	がくさい病院　開院31周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設10周年
	4	中・高齢者のための「がくさい健康塾」開催
	8	回復期リハビリテーション病棟責任者会議設置
	11	がくさい病院　図書室開設
平成28年 （2016年）	1	がくさい病院　開院32周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設11周年
	3	がくさい病院　トヨタ練習支援型リハビリロボット導入
		がくさい病院　島津製作所FPD搭載型回診用Ｘ線撮影装置
		がくさい病院　回復期リハ入金基本料Ⅱ取得
		介護老人保健施設「がくさい」 介護支援ロボット導入
		法人運営会議、部門代表者会議の会議形態を見直し
		がくさい病院　回復期リハ入金基本料Ⅰ取得
		介護老人保健施設「がくさい」通所リハ　利用者定員数拡大
		がくさい病院　島津製作所FLAXA VISTION透視撮影装置
平成29年 （2017年）	1	がくさい病院　開院33周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設12周年
	4	中期ビジョン策定（法人、病院、老健）
		目標管理制度、人事評価制度導入
	6	がくさい病院　訪問リハビリテーション事業開始
		がくさい病院　回復期リハ病棟 体制強化加算取得
		がくさい病院　組織体制変更（部門制、マトリクス組織）
	10	法人理念新設
	12	育児・介護休業規程改定

平成30年 （2018年）	1	がくさい病院　開院34周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設13周年
	2	がくさい病院　病院機能評価受審ワーキンググループ発足
	4	がくさい病院　回復期リハ病棟　体制強化加算取得
	6	がくさい病院　病棟改修工事（6月～7月）
		整形外科病棟（40床→44床）、回復期リハ病棟（50床→46床）
	7	介護老人保健施設「がくさい」　強化型老健取得
	8	子育て世代職員の働き方検討ワーキンググループ発足
	9	がくさい病院・訪問看護ステーション　専門職ユニフォーム変更
	10	がくさい病院　上島圭一郎　副院長就任
		人事評価制度再検討ワーキンググループ発足
令和1年 （2019年）	1	がくさい病院　開院35周年
		介護老人保健施設「がくさい」開設14周年
	2	がくさい病院　回復期リハビリテーション病棟入院料1 取得
	3	がくさい病院　産学共同研究事業参加
	4	久保俊一　所長就任
		がくさい病院　上島圭一郎　病院長就任
	6	がくさい病院　公益財団法人日本医療機能評価機構 病院機能評価認定
		・リハビリテーション病院3rdG:Ver2.0
		・付加機能評価リハビリテーション機能（回復期）V3.0
	8	介護老人保健施設「がくさい」訪問リハビリテーション事業開始
	10	京都市レジリエント・シティ京都防災功労特別表彰　受賞
		・京都市北区地域介護予防推進センター
		・介護老人保健施設「がくさい」
		・京都地域医療学際研究所

2019年度　年　　報

2020年11月1日　発行

一般財団法人 京都地域医療学際研究所

〒604-8845
京都市中京区壬生東高田町1番9
電 話 (075) 754―7111㈹
FAX (075) 754―7101
http://www.gakusai.or.jp

印刷所　㈱吉川印刷工業所
電 話 (075) 691―8186
http://yop.kyoto

Kyoto interdisciplinary institute of community medicine